

〈資料紹介〉

## 通俗義経蝦夷軍談

はじめに

本稿は『通俗義経蝦夷軍談』を読み下したものである。

同書の著者は膝英勝、明和五年、皇都書林の発刊になる。十巻末に後編を示唆しているが、その詳細不明である。同書巻頭に南山樵夫書の序があるが本書では省略した。また、目録なども省略した。

最初、北海道立図書館蔵の写本を翻刻を試みた。早稲田大学図書館と福岡県久留米市民図書館で版本との照合を行い、専門的な知識をもたない者の印象に過ぎないが、その写本は前記版本の写しであることが推測されたため、写本の誤りを訂正した。また、久留米市民図書館では地図及び図の部分の撮影をさせて戴いた。最初の試みは写本の翻刻にあったが、実質的な底本は刊本であり、本書はその読み下したものである。

梅原達治

写本にも多くのルビはあったが、それは読み方を示すということや、その内容の説明に充てられていると思われる部分もみられた。それで本文はこれを読み下しにすることとした。その最大の理由は江戸後期には、北海道を舞台として、どのような義経物語がかたられたかと云うことを紹介したほうが現在より有意義であると思ったからである。義経の華々しい武将としての活躍、兄頼朝との確執による衣川での三十一歳の死は広く日本人の同情を呼び、彼は悲劇の英雄に仕立てられ、数々の説話を生んできた。それは当時、蝦夷と呼ばれた北海道にもその風潮は移入され、その地の説話をも誕生させ、育んできたといえよう。同書は作家の筆になるものと私は想像しているが、そこにはある程度北海道で、或は北海道関係者間で話題となっていたものを取り捨選択して構成されたものと考えられる。冠岩や弁慶崎など当時から話され

ていたことが窺われる。さらに判官は義経なり、あるいはオキクルミは義経なりという考えかたも示されている。来年崎について「頼然崎」の説も登場する。このよおな伝承が当時からあったものか、「来年帰つて来る」と云つたと云う義経伝承を知つて、より興味深い頼然伝承を考案したものか不明ではあるが、近世に語られた義経物語の蝦夷版であることはいうまでもない。

本文に登場する義経とその周囲の人物は殆どが中世以降の義経説話の人物であるということである。これらの人物が織りなす物語の余香は現在知られた北海道の説話になお微かに漂つてはいるが、伝説そのものは全体としてその構想力や創造性に一部退化した姿も見られる恐れや祖先の遺した遺産の中断の憂いがないわけではない。

ただし、この物語は作家が当時の日本人を読者として、また、当時の常識を基盤として創作された物語であることを忘れてはならないことを強調しておかなければならない。ここに登場する蝦夷と云われる人々は現実にはアイヌの人々を指している。そして、当時の日本人はアイヌの人々より強力な武力をもち、それによつてアイヌ民族を支配していた。その状況になんら疑問をもたず、その状況を義経の時代まで遡らせて考えていたようである。そして支配者は被支配者よりも優秀であると考えていたのであろう。このような考えが正しくないことを私たちは一応知つてはいる。また、被支配民族を劣等視した当時の人々がその時代の流れのなかでしか考えられなかったと云うことはやむをえなかつたことも考えられる。蝦夷はアイヌ民族にたいする蔑称にもなっており、その言葉をそのまま使用することは堪え難い苦しみを感じる。しかし、その呼称を使つていたことを忘れることはできない。現代もまだそのような観念を引きずっている人がいないとは云えないからである。本文を読めば直ちに分かることであるが、蝦夷のすることはすべて無知愚

味、あるいは禽獣と異なる所なしと野蛮民と目する民族を表す常套語を多用している。随所に見られるこのような記載をここでは一々指摘しないが、冷静な読者にはそれらの表現や記載が真実から離れた表現であり、内容にも我々の現在の常識に照らして信義に叶つた人物もまた、それに悖る人物も登場している。有能な作家は意識的、無意識的を問わず読者の自尊心に詔つた表現をしたのかも知れない。本稿はとかく江戸末期にどのような義経物語が北海道を舞台に考えられたかを見て戴きたいと思う次第である。

なお、本書の内容についての注は一切省いた。未熟ではあるが、あらためて解説を施したいと考えている。

#### 凡例

一、本書の底本には、北海道立図書館所蔵の『通俗義経蝦夷軍談』を用い、久留米市立市民図書館及び早稲田大学図書館の刊本を参照して作成した。

一、本文は底本の形態の保存よりも、読解の便宜のためにかなり自由に書き改めた。そのおもな点はつぎのようなものである。

現代の字体、仮名使いを使用した。但し、アイヌ語の聞き取りをそのまま表記したと思われる箇所は片仮名表記にした。人名、地名は漢字表記であるが、これはそのまま使用した。

歴史的用法に従つた語句もある。寄せ手↓寄手、追つ手↓追手、同一の地名に違う表記が見られた場合、なるべく統一したが、見過ごした場合もある。

熟語もなるべく現代の表現に改めた。

ルビが振られている箇所もその意味が通じる限り、とくにそのルビの読みは無視して底本のままにした。胸懷 ルビ 〓 シンテイ 心底である。

一、本文には句ごとに「。」が付されているが、現代的な句読点に改めた。句点は最小限に押さえた。ただし、読み方がはっきりしないような箇所は、文脈上の区切りから見るとそれ程重要でない場合にも句点を用いた箇所がある。会話の部分には「」を施した。

一、割注はへゝで示した。

一、人名や地名が並ぶ場合、その間を・で仕切った。義経・忠衡は……。

一、補記、付記などは省いた。

玉フ ↓ 給う

ノ玉フ ↓ 宣う

室礼テ ↓ 設えて

得物は武器の場合には得物、狩猟の獲得物は獲物をあててある。

要するに、現在に読者が目で追って読み、その内容を把握しやすいであろう表現を、正確な復元に優先させた。

末筆ながら御協力賜った諸機関ならびに関係各位に深甚なる謝意を表す次第である。

## 凡例

一 源廷尉義経生涯の事跡世の知る所なり。よつて今之れを略して載せず。なかなずく奥州衣川において生害の事諸書に出でて歴然たり。然れども蝦夷の地図を考えるに弁慶崎・来年鼻など云う地名あり。また今蝦夷人の世話に食事に向かう毎に「ギグルミ。ヲキグルミ」と唱うる。これ蝦夷の風俗に、則ちキグルミは義経、ヲキグルミは判官なり。宮社あつてギグルミ大明神としてこれを祭る。常に参詣絶ゆる事なし。毎歳正月元日、二日、三日は参詣の人なし。これ功臣十二員の人びと年始の礼有りと云い伝えたり。

一 義経金へ渡ししと云う説あれどもその証確かならず。然れども今北地の門戸毎に画像の神を祭る。その像廷尉の像なり。これ確かなる証あり。

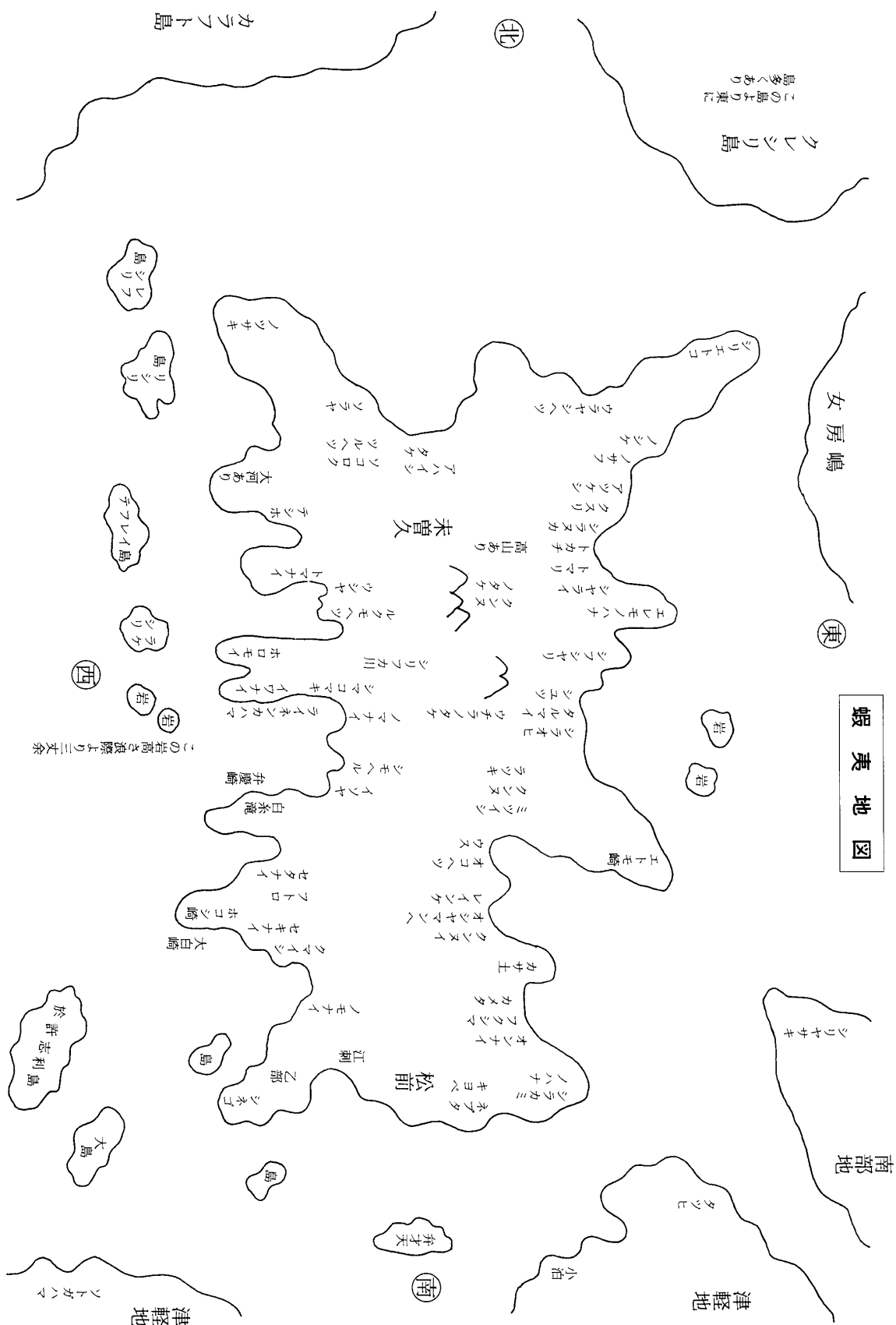
一 和漢の史を考うるに往昔蝦夷或いは毛人と称する者は鰐田・津川等の事なり。今世に蝦夷は朝鮮・琉球の如き国王有りて平治せし国と心得る人多し。左にあらず。義経の蝦夷渡りの頃とても只部落なり。國中一統せしにあらず。蒙古・靺鞨といえども亦同じ。中華に隸属するにあらず。義経蒙古を平治し、北韃韃へ渡り義経の子孫北狄に在りて遂に今中華を一統し、国号を清と名付けしは、清和源氏の清なりと云い伝え、今中国の天子

は義経の子孫なりと云えり。

一 此の書は元京師の書林某、或る人の家蔵『蝦夷記』三巻を懇し、久しく秘蔵せられしがたまたま其の書を見るに東奥、松前に好事の人ありて編集せしと見えて方言野鄙にして言語不通の事多く書は見るに足らずといえども、其の事跡・人名・地名等に到つては実に近く義経蝦夷に渡りし始末を具に記せり。いまこの書によつて潤色増補して『通俗義経蝦夷軍談』と題す。然るに此の題名海内に名高く四方の幼児此れを見ん事を求む。然るに故あつて久しく書肆に蔵して他見を許さず。頃日又坊間に『義経蝦夷軍談』と題せる一書あり。未だ梓に繡めずといえども繕写して普く世に流布せり。其の書亦義経生涯の事蹟を記し終わりに蝦夷に渡り彼の地を一統しキグルミ大王となり、子孫彼の地に現在せる事詳に述ぶるといえども妄談にして拠なし。今刻する所の『蝦夷軍談』と同名異書なれば見ん人惑う事なかれとしか云う。

明和五年戊子九月

平安 桃林主人識



## 卷之一

源義経奥州に下向す。

謀事人に在り、成事天に在り。むべなるかな。前伊予守従五位下源義経は一度御舎兄頼朝卿の命を受け、慮を帷幕の中に回らし謀を千里の外にいたし、木曾の狼籍・平家の逆族を亡ぼし、天の時、人の和、相共に至り、太平の端を萬世に発く。計策だれか肩を並べん。しかるに梶原平三景時が口給の讒を免れ難く、腰越に止めて鎌倉に入る事を許され給わず。当惑の胸にただ親兄の礼を重んじ、再び都に引き返し、抛を求めて咎なき所以を申し発き給えども、嬖臣側にありて、これを支ゆ。ゆえに数年の功ここに空しく、その上、ややもすれば名もなき倍臣御館を脅かすとの患あり。ほぼ、追討の宣旨下りしなどの風聞頻なれば、暫し馴れつる雲井の空を跡になし、御手の郎従若干召し連れ給い、文治元年乙巳十一月摂津国大物の浦に蟻いしてひとまず筑紫の方へと赴き給いしに逆風忽ち舟を覆さんとす。ここにおいて大和・河内ここかしこに彷徨い給う。かく成行に従い、いとど鎌倉より御在所を捜し求むる事頻なれば、とても東海道は人の心頼み少なく御身を安んじ給う事叶わず、密かに身を窺し北陸道を経て奥州へ下り給う。ここに奥州十七万騎の貫首、前鎮守府將軍藤原秀衡は父祖の代より源

家に恩深く、ことさら義経首服の古、秀衡の方にて生長し給いし由緒もあれば、この度、図らず漂泊の身と成り給いたる事を哀れみ、民部少輔基成が居住せし衣川の別館に請じ、高館殿と仰ぎ奉り、遇しければ、義経も暫し安堵の思いをなし給い、相伴う郎従等も休息をぞ致しける。ここに、頃は文治二年の秋、鎌倉に奇妙の鷹匠あつて、時の近臣若殿原、これを玩べば、御前にも御遊の助となりて、あまねく諸国に名鷹を求め給う。奥州は名鷹多き所なりと、秀衡にも乞い求め給う。秀衡承りあまねく国中に索むといえども、心に叶う名鷹を得ざればとて、隣島松前蝦夷は往古より音に聞えし名鷹多き土地なれば、人を遣わし求めんとて家人秋田次郎尚勝と言う者をして、その頃松前の首領、桂呂仁という者の方へ頼り、あまねく山野に狩り索め、なおも端蝦夷の方へ入って、名鷹数多を取得て、その年の初冬にもなりぬれば、ひとまず立ち帰り、秀衡猷鷹の用意に備えんとす。時に桂呂仁、尚勝に對面し、種々物語のついで、尚勝にいいて曰く。「某が領する小島は荒野の一部落なりといえども、日域の地に近く、なお神国之武威を示して、その護り堅固なれば、近境よりいささかも侵犯の患いなし。すでに東北の奥蝦夷は外国よりややもすれば干戈を動かし、威を示して奪い掠めんとす。某、隣島の首長と好あり。これを思うことここに年あり。果してこの頃蒙古より奥蝦夷を窺うとの風

聞あれば、遠からずして隣島乱れんか。蒙古勢強大にして、ついに蝦夷これが為に陥られん。蝦夷陥らるるにおいては自ら蒙古に組せん。その時は我領島孤にして保ち難からん。年来隣国の好を思い、一度秀衡日本より加勢を給わり、神国の威風を示し、蒙古の難を退け給わば、島中の悦、何事かこれにしかん。足下帰国せばこの旨を委細に告げ、不日に秀衡の憐みを待つ」と懇に諭しければ、秋田次郎領承し奥州にこそ帰りける。

秀衡卒す。書を泰衡に遺す。

かくて秋田次郎尚勝、奥州に帰り数多の名鷹を索め来る由を披露し、つぎに松前の桂呂仁が謂し事ども詳しく演説しければ、秀衡つくく／＼と聞きて、「蝦夷は靺鞨・蒙古に隣れり。かれが風俗、性強暴にして、ややもすれば境を犯すと聞き及ぶ。しかれども仮初めに数百里海程を隔てぬれば、わが軍威を示すに難く、これまで打ち捨て聞き流しつるが、この度蒙古侵来との風聞桂呂仁が頼み、いかにも隸島の好もだし難しと雖も、兵は凶器なれば妄りに事なくは動かし難し。なをも評定あるべし」とぞ申されける。しかるに秀衡は日来老衰のいたわり重病となり、日を追って頼なく覺えければ、泰衡を始め一族家人を召し集め、遺言しけるは、「われ老命逃れ難し。死しての後、家督泰衡を傳き何事も先例に従かい、国衡・忠衡により政事を申談じて執行うべし。第一申し置く

は高館殿の事なり。いま世を忍び給う御身なれば、とかく大切に労わり奉り、出でては人口を塞ぎ、入りては主君のごとく仰ぎ奉り必ず御下知に背く事なかれ」と懇にいい含め、また、外に一通の遺書を認め堅く緘して「われ死して計画窮らん時、開き見るべし。変に応ずる策たらん」とて、家督泰衡に渡されける。この事外に知る者なかりける。程なく文治三年丁未十月二十九日、行年九十二歳にてついに卒去せられける。かくて泰衡は父が遺跡を受け継ぎ、陸奥出羽の押領使となり、六郡を管領し十七万騎の貫首とぞなりにける。程なくその年も暮れて、明くれば文治四年戊申三月二十二日、「義経を召捕り、進ずべき」由の宣旨並びに院庁の御下文を泰衡に下され、官史生国光院庁官景強これを持つて同四月奥州に下着す。鎌倉よりも搜し出すべき由の催促頻りなりければ、泰衡この旨を領掌し、尋ねまいらすべき由の請文を捧ぐるといへども、事延引に及びければ、同十一月重ねて宣旨並びに院庁の御下文を相添えられ、官史生守康これを携えて下向す。鎌倉よりもまた義経を討つて出だすべき由の使者を下されける。同五年二月二十五日には、重ねて鎌倉より泰衡が形勢を窺わしめんが為に、雑色里長を平泉に下されける。かように宣旨も度々に及び鎌倉の使者頻なれば、「ひとまず評議あるべし」とて、一族には庶兄西城戸太郎国衡・舎弟泉三郎忠衡・同本吉冠者隆衡・同出羽冠者

通衡・桶爪太郎入道俊衡・同五郎季衡、郎徒には川辺太郎高経・佐藤庄司基治・金剛別当秀綱等を召し集め評議にぞ及びける。泰衡申しけるは「今、父の遺命に従い、高館殿を隠しなば、違勅の罪逃れ難く、鎌倉殿の憤り瀕についてはこの国に勢を向けられんか、忠孝、ともに全うし難し。計画ここに窮れり。おのおの胸懷を残さず申さるべし」とありければ、西城戸太郎国衡が曰く。「およそ日本濶しといえども、今義経の御身を寄せ給うべき所、恐らくはこの国に限れり。定めて鎌倉にも評議区々なるべければ軍勢を向けられん事近きにあるべし。もし討手を引請け、父が遺命を守り鎌倉に敵対なばついには領する所の国を失わん。よし、また、その時、鎌倉殿の仰せを請け、高館を追い出し奉るとも、一旦隠し置きたる咎・違勅の罪逃るべからず。所詮、思案を一致にして、いまだ鎌倉の命を請ぬ前に事を計らんか」と申しければ、本吉冠者隆衡・桶爪太郎入道俊衡・同五郎季衡を始め、宗徒の輩多くはこの詞に同意する気色に見えければ、泉三郎忠衡吐息を吐ぎ「誠に隠れたるより顕わるるはなし」と言え、所詮奥羽両国一致して義経の為に働くとも、今世草木も靡く鎌倉を敵に受くるは日本国に敵するも同じ。御労しくは存じ奉れども、「高館殿を討つて出だす評議、宜しからん」と事もなげに申すにぞ。この程別けて高館殿へ親しかりける泉三郎だに心中斯の如くなれば、誰か否をい

わん。すでに評定相極まりければ、泰衡座中をきつと見て「しかばいよいよ高館殿を討ち奉り、鎌倉殿の御感に預からんや。また退いて愚案を回らすに義経は万夫不当の名将、ことに属従う輩は一騎当千の者共なれば、中々仮初めに敵すべからず。鎌倉へも注進し、討手の勢をも乞い受け、力を合わせて討たんには、進んで敵するに安く、退いて国命を失わずというものならん」と河辺太郎高経をもつて義経の在所を尋ね出し、匿い置きぬる由を鎌倉へ申し遣わしける。「行路難きにあらず、人情反覆の中にあり」と。秀衡存命の時ならば、義経の御身にかかる急難もあるまじきものを。昨日に変わる人心「鎌倉の討手に力を合わせん」と評議一決して、おのおの宿所に帰りける。人の心ぞ頼なき。一門宗徒の郎従、悉く座を立ちて後、御館泰衡、泉三郎忠衡を閑所に招き、声を潜めて申しけるは、「古より君父の恩は共に報ずる事難しと。亡父の遺命を護らんとすれば、鎌倉に背く。かつ、違勅となる。これによつて諸人の心を計り見るに、無情、みな鎌倉の威に恐れて心変わりで見えたり。我われいか程方寸を碎くともついには難に迫り給わん事疑なし。亡父も未前にこれを察し我に一通の遺書を遣し置き進退ここに窮まらん時開き見るべしと教ゆ。今その時に当たれり。ゆえにわれ遺書によつて予め計策を決めおきたり。これによつてわざと心変わりに同意の風情を表し、あまつさえ、鎌



倉へまで注進せしは、汝が方寸を見抜きし故なり。われは君命に従つて代々家国を失わず。これ、また、先祖への孝なり。汝は父の命を守つて、高館殿へ始終を物語し、とかく、高館を落し参らする計略よりほかあるまじ」といへば、泉三郎感涙を流し、「さてく驚き入つたる計略かな。さばかり高館殿へ志し給うとは存ぜず。せめて某一人なりとも父の命を護り、太刀の続かん程は高館殿へ奉公し、叶わぬ時は御自害をも勧め奉り、某も潔く腹かき切らんとしに、今の仰をいかでか背かん。さりながら、高館を落し参らせて、いづくに隠れ給うべきや」と問へば、泰衡打ち頷き、懷中よりかの一通を取り出だし、泉三郎に与えて、なおも声を潜め「これぞ亡父の遺書にして、未前を察する計略かの孔明が錦囊にも優れり。旧年汝もほぼ聞きごとく、松前の桂呂仁、蒙古の賊蝦夷を犯し、近付く事を恐れてわが国を頼み軍勢を借らん事を求む。亡父の前見当たれり。しかれば、その遺書の金言に任せ、義経の御手の郎従、泰衡が加勢と名付け、密かに松前へ渡海なさしめ、桂呂仁を案内者として、蝦夷の三島へ落とし奉り、松前を援け蒙古を退くるを名として、恐らくは義経の智謀・郎従の武勇、ついにはかの地の首長ともなり給はん事疑なし。およそ日本を離れ給わば後方に鎌倉の咎もなく、結局、御安居の基たらん。汝急ぎ一刻も早く高館殿へ参向し、この旨を語り御用

意なさしめ奉るべし。夢ゆめ、妻子にも漏らす事なかれ。明日より泰衡御敵と相なる上は一言もわが口より出だす事難し」とつぶさにいい含めければ、忠衡畏つて座を立ち、直ぐに高館殿へと急ぎける。

忠衡、義経に高館に謁す。

「子を見る事父にしかず」と前陸奥貫首藤原秀衡亡命の砌、その子、泰衡に遺命して高館殿の安否を決め置きぬる事、至れり尽せり。されば泉三郎忠衡は、亡父の遺書を捧げて直ちに衣川に参向し、高館殿に見参してありし事共物語しければ、義経一度は頼朝の情なきを怨み、一度は秀衡父子の信義を感じ、秀衡の遺書を見て、涙を流し給ひ、即時にこれまで属従うところの者共を召し集め、評議にぞ及ばれける。義経仰せ出だされけるは「われ自ら死者狂に働かば、武者の千騎万騎は物その数にあらねども、敵と目ざすは兄なり。これに刃向うは本心にあらず。口惜しくもこれまで隠れ忍ぶ事なれば、所詮これまでの序次を乱さず、秀衡の遺命に任せ、ひとまず、蝦夷へ押し渡らんにはしかじ。おのおのいかに」とありければ、武蔵坊弁慶進み出で、御掟だれか違背仕らん。これまで属き従ひ奉り、この座に並び居る者共、皆々君の御難に代わり、三世の契を違えじとの忠心鉄石のごとくに固めたれば、御賢慮しかるべし」と申しければ、ありあう宗徒の人びと同意にて、

落ち行く人びとには、義経を始め武蔵坊弁慶・依田源八兵衛弘綱・亀井六郎重清・鈴木三郎重家・片岡八郎弘常・伊勢三郎義盛・駿河次郎清重・黒井次郎景次・熊井太郎忠基・鷲尾三郎義久・備前平四郎成房・佐藤三郎義信・同四郎経忠・民部卿頼然・下部の鬼三太を始めとして、究竟の輩、雑兵共に都合五十八人と定まりける。増尾十郎権頭兼房は、もとは北面の侍なりしが、義経に従い、数度の勲功を顕わし、いま八旬に及んで、この座にありあわせけるが、人びと御供を勧めしかども、「城に残り留まって寄せ来る敵を引請け、一軍して味方を励まし、敵を欺き、運命尽きずんば、あとより追い付き奉るべし。しかれども、耆老の事に候えば、これを最後と覚え候」とて懇に暇乞し、勇み進んで見えにける。義経も兼房が別れにいとど涙に咽せ給えども、とても落つべき気色見えざれば、詮方なくも出で給う。その外残り留まる人びとには杉目太郎行信は義経の顔面によく似たればとて、御姓名を冒し奉り、義経の御身に代わって大将となる。常陸坊海存も「存ずる子細の候えば、城に残つて一軍し、後より追い付き奉らん」と、これ等を宗徒の勢として、かれこれ都合七百人には過ぎざりける。さてまた五十余人の人びとは四月二十五日を限り、五人三人ずつ津軽の方へと志し、密かに夜に紛れ、高館城を忍び出で、身を窶し姿を変え、何国ともなく落ち行かれしを知る者さらになかなり

ける。

泰衡、高館城を陥す。

奥州の使河辺太郎高経、日を経て鎌倉に到着し、義経の御在所を訴え、討手の勢を乞い請けん事を述べければ、鎌倉の殿中評議区々にして、義経追討の軍勢を催さる。その用意頻りなり。奥州平泉には河辺太郎を鎌倉へ上せし後、種々評議ありて、鎌倉の大軍容易には来たるまじ。しからば、ひとまず手勢を催し、高館に押し寄せ、勝負を決せんと、文治五年閏四月二十九日、泰衡の舍弟、本吉冠者高衡を大将とし、長崎太郎佐光・同次郎俊光・照井太郎高春等三万余騎を三手に分け、衣河の館に押し寄する。城中にはかねて覚悟の事なれば、命を塵芥よりも軽んじ防ぎ戦いければ、寄せ手も手負・討死多くして、攻め倦んで見えにける。その日も漸く黄昏に及びければ、寄手少し引き退き、人馬の息をぞ休めける。高館城中には「今宵夜討に打つて出で、一先敵を脅かさん」と勇み進んで見えけれども、権頭兼房おおきに制して申しけるは「たとえ今夜、夜討ちして打ち勝ちたりとも、味方千騎に足りぬ小勢をもつて、だれを頼みにこの城永く保つべきものにあらず。しからば鎌倉勢の到らざる先に心静かに自害せんにはしかじ」と約束のごとく杉目行信、甲冑を脱ぎ捨て大将の座に着き、義経より賜りし、赤地の錦の直垂を着し、「いざや最後の名残惜しまん」と、

酒酌み交わして乱舞時をぞ移しける。兼房諸軍に向い「唯今大将の御自害候ぞ。落ちんと思ふ者共は心任せに落ち行くべし」と大音声に呼ばわり、大将の座に入つて見れば、はや、行信は自害しけり。兼房即時に介錯し、首を錦の直垂におし包み、座上に直し、その身も腹一文字にかき切れば、海存またこれを介錯し、その儘、処々に火をぞ掛けたりける。立ち昇る煙に紛れ常陸坊は跡方もなく、落ち行きけるに、これを知る者なかりける。残る軍兵思いくに刺し違え、または落つるも多かりける。寄せ手はこの火を見てわれ先にと柵を乗り越越えく城中に踏み越んで、義経の首はこれならんと奪い争い取つて、勝ち鬨を上げ、平泉へぞ引き返しける。泰衡やがて飛脚を以つて鎌倉に達しける。その飛脚五月二十二日鎌倉に到り首は追つて進ずべしとなり。これによつて鎌倉には暫く奥州発向の用意は止みにける。

秋田尚勝由緒。

ここに義経を始め宗徒の郎徒五十余人、高館城を恙無く忍び出で、思いくに身を襲し、あるいは三人あるいは五人、かねて津軽の辺を志し、「深浦という所にて出逢うべし」と定め漸く五月十日余に、ここかしこより集まり、松前の海口深浦にこそ着きにける。ここはいまだ津軽の地にして家居も変わる事なく、人の往来・風俗も変わらざりければ、漁人の家に五人三人宿りを求め、泉三

郎忠衡の音信をぞ相待ちける。ここに秋田次郎尚勝という者あり。かれが父は羽州秋田の産なりしが、家富み耕稼を業とし、その余力には専ら交易をなす。津軽・南部・平泉の近郷はいうに及ばず、松前・蝦夷島までも、渡海の船を仕立て、米穀を多く積み、松前に至り、これをかの地へ鬻ぎ、その代わりに昆布、辛螺、鰯臍、熊膽などを交易して、平泉および京都へも上しける。しかるに仁平の頃、交易のために松前より蝦夷島まで渡海せしに、いささか交易の論によつて、蝦夷の首長丹呂印がために害せらる。

この時、尚勝、いまだ幼年にして、外に助力の一門眷属もなく空しく年月を送りけるが、尚勝成長して父が業を受け継ぎ、交易をなし、南部・津軽へも度々渡海せしかば、何とぞして、蝦夷に渡り、父が敵丹呂印を討たん事を欲すといえども、「かれは蝦夷小島の首長なれば、その力足らずしてはいかでか討つ事を得ん。所詮しかるべき大将に従つて、本意を達せんものを」と思い、家業は一人の叔父のありけるに譲り、その身一人諸国を巡り武者修業し、その後奥州に帰り平泉の秀衡は代々奥州の押領使にて武勇の家なれば、他に求めるに及ばずとて直ちに秀衡にぞ仕えける。秀衡もかれが志、かつ蝦夷に仇ある事を知りければ、本貫、秋田を名乗らせ、秋田次郎尚勝とぞ呼びにける。先年、名鷹を松前蝦夷に索しにも、この尚勝をぞ遣わしける。これによつて尚勝松前より蝦

夷の地理・山川・風俗は悟り、その上代々交易をなしければ、幼年より蝦夷人の詞などにもやや通じける。しかるに秀衡存生の砌、ある時密かにこの尚勝を呼び出だし申けるは、「汝に一大事を申し聞かせん。汝われに仕うる事久し。汝蝦夷に仇あり。よつてわれに従い武士となり、一度松前の桂呂仁が乞うに任せ、加勢として蝦夷に渡り父の仇を報ぜんとする志、われ疾くにこれを知れり。しかりといえども今事を起こすべき時にあらず。幸なるかな。

源予州義経はわが家には主君のごとし。これまで匿まい隠し置きたり。わが齡のあらん程は、少しも氣遣う事なしといえども、われ死して後は鎌倉殿の仰せ厳しく、必ず討つて出だすべきの催促瀕なるべし。われ、予めこの事を計り、家督泰衡に密かに申し聞かせ、一通の書を遣せり。今汝にもこの一大事を知らする上はわが死後に鎌倉の使重なり、かつ、京都の宣旨も下るべし。しかる時は偽つて義経を討ちたる体に遇し、密かに高館を落とし参らすべし。汝先達つて羽州に帰り、兵糧、渡海の用意をなし、津軽深浦の辺に便を求めて時節を待つべし。もし衣川において、義経生害と聞かば、必ず津軽の浜辺に待ち合わせ、義経に対面し主従の約をなしその時わがこの書をもつて、義経に告げ知らせ、忠勤を励み、蝦夷島の案内者として、かねて用意せし兵糧船に取り乗り、松前の桂呂仁に加勢と号して蝦夷島を従え、汝が仇もその時心安

く報ずべし」と懇に申し含め、一通の自筆の書を渡し、「汝ゆめく人に知らする事なかれ」とて、秋田次郎尚勝に暇をこそは遣わしける。これによつて、尚勝故郷秋田に帰り、渡海の船と号して、米穀を積み、津軽の方に何時となく、数多の船を出だし置き、その身は深浦の漁人の家に忍び居て、平泉高館の安否を尋ね居たりしに、今度「衣川館陥つて義経主従生害」と聞くや否や秀衡未前を察せし詞の符合せるを感じ、義経主従を今やくと相待ちける。

#### 尚勝始めて義経に遇う。

奥州は日域東北の隅にして、津軽外浜は渺々たる平沙にて常に風ありて砂を巻き、あたかも朔北の砂漠に似たり。義経は高館を密に落ち延びて、この辺の漁人の舎に隠れ居給いしが、頃は五月二十日余り、一天曇なく海上数千里の眺望はこの日にありと覚えければ、義経は武蔵坊弁慶・鈴木重家・鬼三太を召し連れ給い、主従四人浜辺を伝い、深浦の港に渡海の船を尋ねられしに、折しも秋田次郎も義経を今やくと待ち侘びければ、浜辺にて図らずも義経に行き逢いたり。尚勝おおきに悦び即時に名乗らんと思えども、義経われを見知り給わねば、まずく知らぬ体にもてなし尋ね見んと近寄りて、義経主従に向い、「諸君はいかなる人びとにて御座候や。この辺には見馴れ申さず」と尋ねれば、鬼三太応えていう様、「われわれは前予州源義経に仕えたる者なるが、わが君高

館に秀衡父子が情にて、暫く忍びおわせしが、追討の宣旨重なり、鎌倉の使頻なれば、情なくもわが君を始め主従御館泰衡が為に高館において生害ありし故、われわれも君とともに生害を同じくせん身なれども、恥ずかしや。露の命を捨てかねて平泉近くは住む事叶わず、かかる有様となりてここに来り候」と答えければ、尚勝聞きて、「実にや高館殿は清和の苗裔として元暦の始には鎌倉殿の御代官となり、木曾の悪逆・平家の賊党を滅ぼし給いし事、今日域に隠れなき名將の天運時至らずして御生害とは惜しむにもなお余りあれ。さて諸君はここに居て、これより何処を指して行き給うや」と問わば、弁慶、これを聞きて「謂われざる事を問う者かな。何国へ行くともこの方の心の儘、ただし行先を尋ねて汝如何する」と顔色を変えて怒りければ、鈴木重家進み出て、弁慶を制し止めかの者に向かい「同伴の過言無礼は宥怒あるべし。われわれは落人の身なれば何国と定めて行方もなし。何とぞして寺ある方に到り、剃髪染衣の姿ともなり主君の追福をなさばやと思うのみ。寺ある方を教えてたべ」といえばかの者からくと打ち笑い、「われ愚蒙の者といえども諸君の為に欺かれんや。今朝未明に睡り覚め、わが寓居の窓を開いて、東北の方を望むに怪しき氣あり。術をもつて、これを考うるに、哲人その下にありと見ゆ。その氣いよく盛んにして、しかも東北に進むの勢あり。これによつ

て、われこれに來たり、その氣の起こる処を見れば、諸君に逢えり。また、一術をもつて諸君を相するに、頻に旅行の兆ありて、さらに出家遁世の相なし」という。義経始終を聞き給い「これ凡者にあらず。その上、この辺鄙に斯様の者あるべし」とも思われねば、かの者に向い「さてく、足下は不思議なる妙術をえたる人なるが、何故この辺鄙に住居致され候」と尋ね給いければ、その時尚勝義経に向かい、「まさしく君は高館殿にてましますや。某は秋田次郎尚勝と申す者にてここに君を待つ事すでに久し。最初よりこれを申さんと思えども、もし粗忽に申し出だしなば、御疑もありつらんと、一旦の無礼を御許し給わるべし」とて、ありし事共、蝦夷に仇ある所以悉く語り、さて秀衡の一通自筆の書を取り出し、義経に見せ奉りければ、義経これを見給い、涙を流し、「秀衡の志浅からず。死後までもかくのごときか」とおおきに感じ給い、尚勝に向かい、「さてく、汝は孝心といい、忠義といい、感じ入った。今よりわれに仕えて、いよいよ忠勤を励むべし。われ蝦夷に渡りなばまず手始めに丹呂印を討つべし。汝が為に仇なればわが為にも仇なり」とこれより尚勝と主従の契約をなし、義経おおきに悦び給い、津軽の辺、所々に隠れ居たる味方の者共にもこの事を知らせ「不日に蝦夷に渡海すべし」と勇み給えば、尚勝が曰く、「某予めその用意仕りおきたり。本国秋田より渡

海の船を回しおきて、ほぼ兵糧の用意も調えおきたり。海上の日和を見合わせ、直ちに松前に渡り、首領桂呂仁を向導として蝦夷の三島へ攻め入り給え。しかりといえども、蝦夷は人の性強暴にして、仁もなく義もなく、さながら禽獣のごとし。その地大山巨川少なからず。某先年松前に渡り、地理の案内・人倫の風俗、ほぼこれを知れり。まずく御物語仕らん」と、その夜は義経を深浦の漁人の家に伴い参らせける。

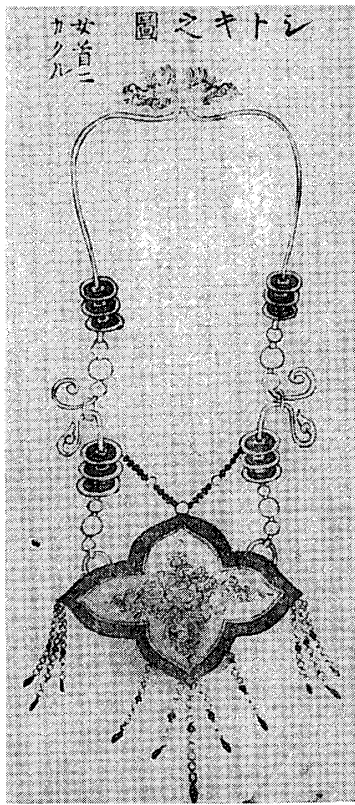
## 卷之二

尚勝、蝦夷の風俗を語る。

天の覆う所・地の載る所・日月の照らす所国にあらずという事なし。東奥、都加留は一つには津川、また津軽とも書す。いずれも和訓の近き所なり。往昔は蝦夷の一種にして内地に居すといえども、やや王化に従わずさながら禽獣と異ならざりしに、今は、陸奥に属し、外浜の浦々島々まで靡かぬ草木もなかりけり。ここに義経は秋田次郎尚勝を得給い、蝦夷に渡海の便を得給いければ、近辺に隠れ居たる郎徒共に便を求めて告げ知らせ、秋田が寓居に召し寄せ給いければ、おのおの、これを聞きて、おおいに悦び、五月十日余り、われもく集まりける。その者共には、武蔵坊

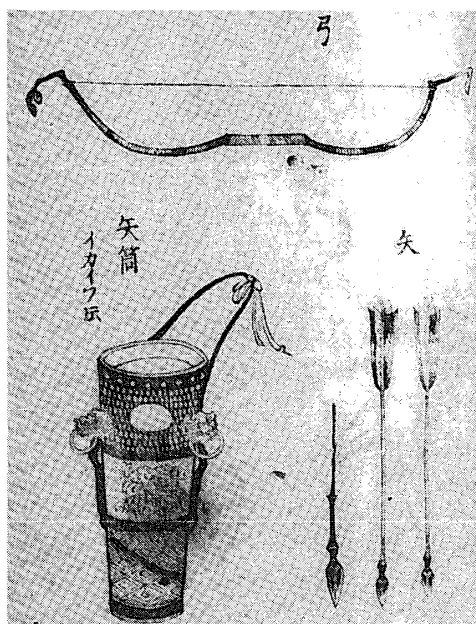
(一五四)

弁慶・鈴木三郎重家・依田源八兵衛弘綱・亀井六郎重清・片岡八郎弘常・伊勢三郎義盛・駿河次郎清重・黒井次郎景次・熊井太郎忠基・鷲尾三郎義久・備前平四郎成房・佐藤三郎義信・同四郎経忠・民部卿頼然・鬼三太等なり。秋田次郎尚勝も威儀を改め参会す。義経、尚勝を側近く呼んで仰せられけるは、「われ、今般汝が働きにて兵糧渡海の舟調えし上は蝦夷島へ渡るべし。しかれども、その土地・風俗・言語までも知らざれば、何によつてか計策を用いん。汝が見聞の儘に語り聞かせよ」とありければ、次郎進み出で、そのあらましを語りける。「蝦夷に端蝦夷・奥蝦夷の別あり。端蝦夷より奥蝦夷へは陸地続なれども、大山巨川多くして往来絶えたり。ただし、舟路に往来自由なる由。地理は某も悉く存ぜずといえども、渡海の便に見聞して覚えし所々は、まず、この深浦より船にて海上百里ばかりへただし、古の百里。六町をもつて里となす。今いう十里なるべし。下これに倣う。順風には半日ばかりにして、至ればアジカと云う舟着あり。このアジカより海上八十里ばかりにして小泊という港あり。これはいまだ奥州の地なり。小泊よりまた海上百里ばかりにして松前に到る。この松前より海陸ともに蝦夷に往来あり。松前は日本に同じき所もあり、また蝦夷の風俗の所もありて、言語も大方は通じ候えども、多くは蝦夷なればわが国に好を通ずるといえども夷属なりと卑しめ用いず。



しかれども、日本の風俗を学び得たる者も多きゆえ、わが家、先祖よりかの地へ米穀を賣えり。かの地、田を耕す事を知らず。もつとも土地も五穀を植ゆるに宜しからずと。およそ蝦夷の西南にして、日本通路の入口なり。これに端・奥の蝦夷をあわせて、すべて三島といえり。さて、風俗は男女みな髪を披り、衣服は単衣にして左衽、貴賤の別あり。鞋履なくして、皆、裸跣、耳に環を穿ちて鎊とす。貴人は金銀、卑賤は銅鉄を用ゆ。男は肘長くして身体最も毛多し。故に上古に一名を毛人国ともいえり。その性勇敢にして闘を好み、死を恐れず、常に刀を頭に掛くる。女は皆、身を文にす。その形あるいは花草をもつてす。これ、皆小児の時、その母の刺す所なり。およそ、十七八歳になれば皆嫁す。嫁すれば唇の辺を刺して、青草汁を摺り込む。これ夫あるの印なり。玉を綴りて銀鏡を胸に懸け身の守とす。これをシトキという。某が

先祖たびたびかの島に渡りこれを得たり。幸ここに持ち来し」とて、家来に云い付け、具足櫃より取り出だし義経に見せ奉りける。「さてまた文字なければ甲子紀年を知る事なく、寒暑をもつて春秋を分かち、月の盈缺を見て朔望を知る。地に金山・銀山多けれども。金銀珠玉を宝とせず、古器・刀剣をもつて宝とす。島中、城郭の備なく、家に屋室の分なく、ただ四壁ありてこれに窓を開き、蓋に茅をもつてし、菅を編みで敷物とす。夜は魚膏を燃やし、父子兄弟同じく寝ねて、男女の別なし、土地に五穀を生ぜず。牛馬なく、日本と交易すといえども、米穀・塩・酒の類あまねく蝦夷の人民を養うに足らざれば、卑賤は熊の肉・魚の肉、あるいは鳥獣の肉をもつて食とす。故に、おおくは山野に狩をなす。その性、酒を嗜めども土地に酒なし。たま／＼日本の酒を得て吞まば、男女ともに、おおいに悦び、踊躍をなし樂を極むるとぞ。最前にも申すごとく、闘を好む故に、怪しき兵器を用ゆ。甲冑は海驢の皮、あるいは、海獺の皮をもつて製す。いかなる利器といえども、これを穿く事あたわず。シヨキネ棒と号して、およそ径四寸ばかり、長さ六尺ばかりの棒あり。これをもつて甲冑を討ち破る。これに当たる者、立所に死す。弓は木にて作り、矢は四羽に矧ぎ、根は鹿の骨を用い、烏頭・蜘蛛を合わせてこれを塗る。この毒矢に当たる者、即死せずといえども、助かる者稀なり。ただしこの毒を



消す薬ある由。人煩うに医薬なく、祈祷をなして、病を癒す。枕元に鉄先という物を置き、死せる人は、一旦、この鉄先にて怪しき術をなし、蘇生をなさしめ、しばらくありて、また死す。また芝隠、胡沙吹とて、怪しき術あり。まず、芝隠れとは人に隠れんと思う時、たちまちに、形を失う。胡沙吹は身に迫りたる難ある時、口より気を吹き、人の目をくらます事あり。しかれどもかよの幻術は、衆人皆なすにあらず。わが仇なる丹呂印は右の術を極め得たる由。その地に産する珍禽・異獣・奇花・変草は挙げて数え難し。言語は諸邦と通ぜず。その一二を申さば、水をワツカ、火をアンへ、夫をオツカイ、婦をメノコシ、老人をルル、子をミチウチなどと申し候」と詳しく物語申しければ、義経を始め、満座の人びと、興に入りて、酒宴をぞ催されける。秋田次郎座を立ちて、最前の具足櫃より蝦夷の甲・弓矢・太刀など種々取り出だし、義経に見せ奉りける。

義経、深浦を発し松前に到る。

かくて、五月下旬になりければ、海上の日和を見合せ、出船と相定む。この間に秋田次郎本国より渡海の大船三艘、深浦の港に回し、船には究竟の船頭・水主・梶取を入れおき、下積には米穀を多く積みたる船一艘を義経の御座船と定め、義経主従五十余人、並びに秋田尚勝郎徒少々・船頭・水主ともに七十余人、残り二艘



には舟頭・水主、その外交易に物馴れたる秋田の者共ばかりにて、いづれも米穀を下積みにして、軍器等を積みで御座船より二三日遅れて出帆すべしと定め、義経の乗り給いし船は、六月朔日に深浦の港を出帆して遙かの沖に遭ぎ出だす。この渡海はいたって難所なれども、折しも日和よく浪風静なるに、今年は閏月ありし六月の初めなれば、極暑に夕立を催しけるが、また北方気候の正しからざる故にや、俄に、海上風荒く、舟を揺り上げ揺り降ろし、さしも馴れたる水主なれども、詮方なくぞ見えにける。忽ち北風吹き来たりて、一瞬の中に舟を数十里吹き流し、とある小島に寄り掛かれり。さしも武勇の人びとも、天変に詮方なく、「ひとまず舟をいかなる所へも寄せよ」と呼ばわれども、方角だにも知れぬ大海なれば、船頭・水主も迷う所に、義経静々と船の舳に立ち出で給い、漫々たる溟海を見給うに、海上より三丈ばかりも出づらんと見ゆる岩石あり。義経着し給いし烏帽子を取りて、日本の方を心中に拝し、「伊勢太神宮・住吉大明神・塩竈大明神、別しては弓矢神正八幡宮、義経無実の難に沈み、遠く日本の地を離れ、かかる大難に逢う事も、いかなる宿世の報いやらん。今般、始めて蝦夷に渡り、せめてかの地を拠とせんとす。哀この願成就し、行末安穩ならしめ給わば、波風を静めて舟をかの地に着け給え。願望成就せばかの地において宮社を建立し永くかの島の鎮護とせ

ん。もしこの願叶わぬものならば、只今、義経が命を取り給われ。叶うべき物ならば、この烏帽子出たる岩に留め給え」と心中に深く祈念し擲げ給えば、不思議やかの烏帽子、烈しき風に誘われ、偏翻と飛行し、あれや／＼という中に、かの岩上に落ち止まる。義経を始めとし片唾を吞みし七十余人、これを見て寄異の思をなし、再び蘇生したる心地に悦び精神日頃に十倍し、金石をも打ち碎き、鬼神をも押し倒すべく末頼もしくぞ覚えける。されば今の世までこの岩石を名付けて御冠石というとかや。かかる一心の祈念によつて、海上風静まりければ、船中鼓動し、義経開運の印と勇み悦び船を日あらず漕ぎ戻しそれより難なくかの松前に漕ぎ寄せける。

義経始めて桂呂仁に会う。

かくて義経の舟は松前の海口、乙部という所へ漕ぎ付け、良き上がり場を見繕い、人びと岸へ打ち上がれば、義経、秋田尚勝を召され、「急ぎ日本より加勢の由を、首領桂呂仁が方へ案内すべし」とありければ、義経を舟に残し、秋田次郎尚勝・伊勢三郎義盛、二人松前の首領桂呂仁が在所へと急ぎける。秋田尚勝は案内者なれども、この間の難舟にて思いよらざる乙部へ漕ぎ寄せける故、方角を失い、尋ねべき人もなく家居も見えざりければただ河水の流れに添いて山路を分け入りければ、漸く部落ありて松前の漁者な

ども往来しけるに遭いて、路を尋ね、程なく桂呂仁が居処へ尋ね行く。かくと通じければ、その門内・往来・応対、日本と変わらず。事を取次者、兩人を迎え入れ、委細を聞きて、かく桂呂仁に通じければ、程なく、首領、兩人に對面して、長途の勞を謝し、わけて尚勝が約を違えず、ふたたび加勢として、この地に來たる事を悦び、やがて招待の使を乙部へ遣わし、義經主従を迎え入れる。その礼義もまた嚴重なりければ、義經主従急ぎここに来て、はじめて安堵の思いをなす。暫くあつて、上下の座を分ち、義經を始、宗徒の人びとを張内と思しき所に招じ、桂呂仁は怪しげなる装束にて義經に對面し、珍膳嘉肴を出して饗応し、黄昏に及べば燭を照して、終夜かの蒙賊境を冒す患を告げ、寇を退けん事を乞う。義經問いて曰く。「それ蝦夷は靺に隣つて、時々かの賊境を冒す事を聞きつるが、この松前は、また数百里を隔てて、なお山河の堅あり。さまで思い給うべきにあらざるをいかしてかくばかり宣うぞ」。桂呂仁、答えて曰く。「日本は神国にして、文武を則とするが故に、およそ軍を出し、辺境を冒すにも進退に法令ありて、互いに正路に兵を交う。またわが近境、夷賊の習、情に疎く文を知らざれば、武に血氣の勇をのみ頼んで、その性、至つて剛強なれば、水に入り、火に入れども、事ともせず。その上、今度、蝦夷、蒙古に脅かされ、一時にかれが有となり、首長はかえつて、

降を乞い、一時に變ずる。夷賊の情、強きを頼んで、かれに従い、隣島の好を忘れて、彼を助けわが島をも奪われんとす。蝦夷の風俗、戦勝時は妄りに人を殺伐し、時の間に、千万里の山海をも越え、常に弓を修練して、その矢尻に毒を塗る。故に人この矢に当たる時は、その毒皮肉を糜爛して、たちまち命を落とす。しかればいかなる山海の堅ありても頼まれず。手を束ねて、敵を待ち難し」という。義經始終を聞き給い、「しからば、居ながら敵を待たんより、早々向導を得て、蝦夷に立ち越し、かの蒙古に合体せば、すなわち蝦夷を敵として、心腹の患を除かん。明日門出の用意し給うべし」とありければ、桂呂仁が曰く。「必ず敵を侮り給うべからず。諸君の形勢を見るに、いずれも一騎当千の人びと見えたり。しかりといえども、某、退いて、愚案を回らすに、いかにしても今般、日本より加勢の人数、甚だ無勢なれば、数万里を隔てたる、奥蝦夷、蒙古に向かい、却つて、災を引き出さんか。まず〳〵五三日も滞留し給い、よく〳〵思慮を回らさるべし」と申しければ、義經主従、しからば乙部に舟を残しぬれば、心許なしとして、その夜鈴木・亀井・依田・黒井など、十人の輩は乙部へ帰りける。義經をはじめ宗徒の人びとは桂呂仁が方にて種々商議をぞなしにける。

私に曰く松前は本邦の地を離れ蝦夷に続くといえども、今本

邦に隸す。その頃は、いまだ夷人のみ多く、首領も夷種と見えたり。桓武天皇の朝に、坂上田村麻呂、悉く、東夷の地を収め、海によつて塞となすと。しかれども惜いかな史に伝わらず。たま／＼、蝦夷と称するものは、都加留、鰐田の事にして、今いう松前、蝦夷にあらず。その後、嘉吉三年若狭守源信広、海を越えて、夷中に入り、ついにその南海北地を平定すと。信広は若狭国の人。武田太郎と称し、蠣崎と名乗り、また地名によつて松前と改む。今松前氏の先祖なり。しかる時は松前の開けしは、遙かに後世の事と見えたり。

義經密に軍議を謀る。

その頃、松前より日本に來り、蝦夷人も往來し、あるいは日本より松前にも到りければ、和語に通ずる者も多く、また夷語を用い、和語を知らざり者もあり。松前の者共、秋田次郎に問いて曰く。「今般、日本より來る大将の名はいかに」と尋ねける。尚勝が曰く。「伊予守從五位下判官義經」と答えける。松前人とかく通ぜねば、合点せず、ただ、ハウグワンの名のみを聞き取り、「判官、判官」とのみ覚えける。故に、ついに蝦夷にその名高く、後世まで判官の名のみ残りしなり。義經は桂呂仁が方にありて郎從を召集め、密に軍議せられける。民部卿頼然が曰く。「昨日桂呂仁が言を聞くに、松前の者共蝦夷を恐れ臆病にして、たとえ千人、二千人の雜

兵を出だすとも物の用に立つべからず。その上、兵糧船もいまだ着岸せず。これに馬一匹もなければ、この分にて蝦夷へ攻入り、少々夷賊を従えたりとも、行先知れぬ大島にて、その上蒙古・韃に続きたれば、なかなか容易の事にもあるまじ。しからば、たとえ一年二年これにおるとも始終の勝を取るこそ肝要なれ。上は天の時を考え、中は地の理を論し、下は人を帰伏さるる謀をなすにあらずんば、事成就し難し。某、つらく愚意をもつて思うに、まず／＼、日本より松前、蝦夷へ交易の為に渡海せしなどと偽り、蝦夷の人情を探り、何とぞして、人民を懷け、ついには、蝦夷がわが有となさん」と申しければ、義經を始、満座この議を然りとす。秋田次郎が曰く。「人びとの申さるる所、一理ありといへども、しかる時はわが仇なる丹呂印を討つ事も、一年、二年にては叶い難からん。そもそも、われ本貫を捨て、秀衡に仕えしより以來、心身を苦しめ、父の仇には俱に天を戴かずといえ、一日忘るる日なし。しかるに時至つて、今松前に渡り、まず／＼、わが仇を差し置き、なんぞ、他事をなさんや。その上君、津輕において、蝦夷に渡り、まず手始めに丹呂印を討つべしと、宣いしにあらずや」と、恨むる気色に見えければ、弁慶が曰く。「足下の申さるる所尤も道理至極せり。今丹呂印を討たん事は安かるべし。しかりといへども、行先とてもまた大事なり。はるばる、日本より、この地

に渡り、仕出したる事もなきに、蝦夷に屍を曝しなば、我わればかりの恥にあらず。永く日本の耻辱にあらずや。一旦の勝負を心に掛けず、始終の勝を取るこそ本意なれ。足下の敵を討たずまじきにあらず。今しばらく待ちて、人びとの意見に任せらるべし」と宥むれども、尚勝、なおも合点せず、「おのおのはこの地に渡り、蝦夷を従え、後、栄を心に掛け給うといえども、某は左にあらず。父の敵、丹呂印を討つての後は、この命、何にかせん。これ待事、一日三秋のごとし。頃日、松前人の噂を聞くに、丹呂印はシブシヤリという所に居する由。急ぎシブシヤリに押し寄せ、手始めに、まずく、丹呂印を討たん」という。義経、これを聞き給い、「げにく、汝が申すごとく、われこの地へ渡りたるも、汝が働き故なり。義経をはじめ、この座に並び居る者共は、奥州、衣河にて屍を曝し、魂魄、蝦夷に再び生すというものなり。無益の長儉議せんより、汝が仇、丹呂印が居処知れたるうえは、明日よりシブシヤリに押し寄せ、即時にこれを取り、奥蝦夷までも攻め入らん」と宣えば、弁慶が曰く。「尚勝が申す所、その理当たれり。しかりといえども、地理の案内も知らぬ蝦夷なれば、ひとまず、人びとの意見につきて、蝦夷に立ち越え時節を見て事を計るべし。一年の二年のと長き事にもあるまじ。蝦夷の人民を帰伏させ部落を数多従えなば、即時にシブシヤリを乗っ取るべし」と君を諫め

秋田を宥め、明くるを遅しとその夜は松前の客舎にこそは明かしけれ。

#### 義経再び桂呂仁に会う。

次の日また桂呂仁義経主従とともに、またまた商議をなしにける。桂呂仁が曰く。「今、隣国の好みを忘れず、日本より加勢をなし給う。悦、何事がこれにしかん。某、向導を致さんと欲すれども、この松前の守も捨て難く、その上、多病にして、諸君に随従する事あたわず。わが手下に阿刺干という者あり。かれは元来、蝦夷の産にして、幼年よりこの地に来てわれに従い、日本へも渡海し、和語にも通じ、また蝦夷の人情をもよく知りぬる者なれば、これに雑兵千人を相添えて、先駆とし向導致さすべし」とて、阿刺干を召し出だしける。その人を見るに、面黒く、髪髯長く、両眉、真中にて合い、腕には刺をしたり。実に松前も異なる人物なるが、人びとの前に畏まる。民部卿頼然、桂呂仁に向かって「蝦夷の一二を攻め伐たんには、松前人の力を借るに及ばず。我われにて事足るべし。我輩、日本より加勢として、はるばるこの地に渡る意趣は左にあらず。何とぞして蝦夷を寄伏させ、靺。蒙古までも、攻め入り、日本の威風を示し、再び隣国島を侵す事なく、この地の患なからしめん事を欲す。これ容易の事にあらず。これによって、わざと小勢をもつて蝦夷の地へ忍び入り、まずまず蝦

夷の形勢を伺い、某、後事をなさんと計るのみ。もし難儀に及ばば、加勢を給わるべし。まずこの度は日本より加勢に渡しし事を深く隠し、交易渡海と偽り、向導のため阿刺干に、人数百人を添えて借し給わるべし。近き中に日本より、追々加勢の大兵、渡るべし。必ず微勢なりとて気遣い給う事なかれ」と申しければ、おのおのこの議に同じ、首領桂呂仁もこれをしかりとして、「しからば、明日より打ち立ち給え。ここより浜伝いに三日路を経給わば、白紙鼻という処あり。これすなわち、松前の領分なれども、端蝦夷の海辺通路に便よき地にて、竹木もまた多き所なれば、かの処に陣營を建て給え。尚勝・阿刺干、向導致すべし」と懇に物語し、その夜白紙鼻へ兵糧運漕の用意をぞしたりける。

### 卷之三

義經、營を白紙鼻に建つ。

頃は六月二十日余り、程なく五更の鐘告げて、まだ東雲の明けやらねど義經主従四十余人、約束のごとく、松前を打つ立ち給えば、松前の向導、阿刺干、人数百人のなかより、十人ばかりの雑兵を従え先に進んで案内す。またほかに究竟の水主・揖取、桂呂仁より贈るところの兵器・調度・兵糧にいたるまで、数艘の舟に積ん

で、残りの人数もろともに、岸に添うて、海路より運送し、義經を始四十余人は阿刺干を先に立て、山際の徑に添うて出沒して嶮岨を辿りつつ、程なく、白紙鼻にぞ着きにける。折しも日和よく、松前舟は先立って着岸せり。義經は熊井・鷲尾・備前平四郎を召して、「松前人少々向導を添えて乙部に残せし日本船を、ひとまず、白紙鼻へ回すべし」と、鈴木・亀井・依田・黒井など、十人の者共の迎えのために遣わされける。また秋田次郎はおのが家来二人に松前の者共を添えて、松前船一艘日本渡海の体に拵え、日本より積み来たる兵糧の後船を迎えの為、日本へぞ渡しける。しかるに、この船日本の後舟と入れ違いて、日本に着きにける。さてまた白紙鼻は家居もなく、人の往来、絶えたる海浜にて、一方は巖々たる嶮山のみなれば、人びと山林に入りて、木を伐つて、まづく、仮屋を設え、ここを暫く陣營と定め、義經主従ただ船中に明かし暮らして、およそ四十余日に及びけり。しかるに、今、この仮屋に安居すといひながら、何の計策もなく、徒に日を送らんも由なしと、人びと評議し、まずまず、阿刺干を上ノ国へ蝦夷の城地へに遣わし、蝦夷の形勢を窺わしめ、片岡八郎・秋田次郎はこの島の案内・安居の手掛かりにもなるべき事を尋ねんと、両人立ち出で、ここやかしこと島深く見回りければ、いつしか別れ／＼になりける。

## 片岡 秋田、海満路に遇う。

片岡八郎はとある山を見付け、まず山上を志して登りける。「最早四五町も来りつらん」と思う時、向こうよりその丈六尺余りの大男「これなん蝦夷人」と見えて、顔面鬼ともいうべく、眼の光は青玉のごとく、鬚長々として口隠れ、左の手にかの秋田がいいしごとき弓をもち、右の手に矢を取って、四方を見回し来たれば、片岡思うよう。この島に米穀なければ、魚鳥を獵漁つて食すと聞けばこれならんと思ううち、次第に間近くなれば、かの者片岡を見ておおきに驚く顔色にて、矢取つて打ち番え弘常を一矢に射んとす。片岡おおいに仰天し、両手を合わせて、伏して曰く。「われは日本の漂泊人なり。怪しき者にあらず。早まり給うな」といへども、言語通ぜず。しかれども、地に伏したるを見て、さすが人情やありけん。弓を弛し、片岡が傍近く寄るところを、八郎得たりとむずと組み、押し倒さんと働けども、かの者片岡より力や優りけん。片岡をなんの苦もなく取つて伏せすでに害せんとするところに、秋田次郎、遙かにこれを見付け逸散に駆け来り、上なる蝦夷を跳ね退くれば、片岡下より起き上つて、しばらく組み合い捻じ合いけるが、ついに兩人して蝦夷人を取つて押さえ、「我われまったくその方を殺害せんとあらず。この方に一大事あり。この事を幸汝に頼まん。その儘にて頼みなば、同心せずして、却つ

てわれを害せん事もやとかくは事なすなり」と兩人して両手を捉えて動かさず。なかにも秋田次郎はほぼ蝦夷の言語を覚えければ、夷語をもつていいけるは、「我われは日本人なるが、この島に渡る意趣は、この島近頃蒙古の賊に苦しめられ、干戈日々止む時なしと聞く。これによって我われ日本より来り、蒙古の賊を追いつだけ、永くこの島の患を除き、快く日本と交易をなさしめんとす。我輩に一味する者ならば、一命を助くべし。われに敵する者ならば、唯今命を取らん」という。この時、かの蝦夷人が曰く。「われは海満呂とて、この島を巡察する者なり。異邦の人來たる時は、所の首領に訴えその非常を糺す。今奥蝦夷は蒙古の賊に苦しめられ、干戈を動かすといへども、今某が住む久魔伊志〈地名〉は、高山大河の堅めありてその患なし。いずれにもせよ、この島の為になる事ならば組すべし。また益なき事ならば、たとえわが一命は忽ち奪われるとも、順うまじ」という。その時、秋田次郎、片岡に相談し、まずく、白紙鼻に伴い行きいかようにも計らわんとこの蝦夷人を先に立て、急ぎ白紙鼻の陣営にこそは帰りけれ。

## 海満呂、白紙鼻に到る。

ここに熊井・鷲尾・備前の三人は、過ぎにし六月二十日余、白紙鼻の陣営より、乙部に残りし日本船、亀井・鈴木・依田・黒井など、十人の殿原、並びに秋田が郎徒を尋ね、かれ等諸共同船して、

白紙鼻にひとまず船を回さんと思えども、頃しも秋の半にて、朔風のみあつて、南風を相待ちいたずらに舶して、三十余日を送り、八月上旬に漸く追風になりければ、程なく乙部に纜解きてついに白紙鼻にぞ着きにける。白紙鼻には乙部に残せし日本船、無難に着船したる事を悦び、船中の調度共を取り出だし、互にこの程の疲を慰めける。程なく、頃しも八月十五夜、空晴れて、ひとしお月の明かりければ、義経もいまだ安居の心地はなけれども、この程の疲れを晴らさんと船中より日本蓄えの酒を酌み交わし、郎従とともに、珍らかなる海辺の月に眺め興じ給いし。折節、片岡、秋田、蝦夷人を一人、引き立て帰り来たり、今日の次第を委細に物語しければ、義経おおいに悦び給い、「この者は蝦夷の巡察とある上は、粗忽に大事を申聞かさんも、いかがなり」と宣えば、秋田次郎が曰く。「惣じて蝦夷は知慮浅き者にて、日本より交易の為、渡りしなどいい聞かさば、却つて、帰伏致すまじ。始終画一に申し聞かせ、虚実を伺い、もし少しにても順わざる体あらば討つて捨つべし。まずく、この儘にては悪しかりなん。皇国の威を示す為なれば、烏帽子・直垂を召さるべし」と、おのおの衣服を改めて御座を設け、威儀嚴重に設えて、燈燭立て並べ、かの者を御前へ出だしぬ。その様、豪強面に表れ、かつて、礼儀を知らずといえども、さすが大将たる威に恐れて、首を垂れて畏まる。そ

の時秋田次郎かの者に向こうて、「そもそも、わが主君と頼み奉るこれなる御大將は日本人王の始、神武天皇より五十六代の聖主、清和天皇の後胤にて、当時日本の武將たる源頼朝公の御舍弟なり。一度御舍兄の御代官として逆賊を亡し、日本に威を輝かし給えども、佞人の讒言によつて御兄弟の御仲隔絶す。人倫の道を重んぜらるる故に、押して親兄の心に逆らわず、遠く日本の地を離れ、幸、今般、松前の桂呂仁が頼によつて、この島に渡り、汝が国の患とする蒙古の賊敵を退け、一度蝦夷に皇化を示して日本との通路自由を致させなば、この島の人民、交易の便よくして、富饒ならしめんが為渡海し給えども、なお不知案内の便を得、または人民にこの事を説き諭さしめんが為、汝に委細をいい聞かすなり。汝わが君に心を寄せこの一大事成就せば第一の功たるべし。しからば汝を一郡の太守とも封じ重く用い給うべし。いかにや」といえば、かの者始終を篤と聞き、しばらく思案の体にて答え申しけるは、「われ常々思うに、いかなる天命にや、かかる辺境の奴と生まれ、賤しき業に日を送る事ぞと怨み居たるに、これ天の与うる所なり。今日より決して汝が主に仕えん」と義経の方に向かつて、手を合わせ平伏すれば、片岡・秋田、悦び「最前、汝はクマインシの巡察なりといいしが、いかなる者に仕えるや。これ迄主と頼みたる者はいかなる者なるぞ」と尋ねければ、「某はもと奥蝦夷、

未曾久へ地名。義経、のちこの地の首となるの者にて、垂止刺という者の手下なるが、同腹の弟、海満林という者と二人、蒙古の難を避けて、今久魔伊志に住んで、金架奈という者に属せり。わが本国、未曾久の者はいかなる儉難の地といえども、一日に千里の道を歩行する事はこれ常なり。よって、諸邦に狩して産業とす。久魔伊志辺は左にあらず。某兄弟よく歩行するをもつて金架奈より巡察の役を云い付けたり。これによって毎日々々遠方に狩をなし、異服異言の人を見れば、必ず先ず金架奈に訴うる計なり。しかれども首領を始め、久魔伊志の人民は奥蝦夷に較ぶれば甚だ微弱にして物の用に立ち難く、家居少々あるのみにして、兵器だにも備わらず、いわんや城郭の構あることなし。またわが本国はほぼ軍器・城市も備わり、人みな強堅なれば、今、金架奈が手下にある事、我われが本心にあらず」と物語す。その時、秋田次郎「今、君を始め、ここに並み居る人びとは乱逆の中に出生し、数箇度の合戦を経たれば、武勇は人の下に出ずまじ。しかりといえども知らざる夷島に、始めて渡り、人民の意を知らねば、甚だもつて心を悩ませり。いかなる方便かある」。海満呂答えて「わが弟海満林は力業はわれに及ばねども、弓をよくし千里を歩行する事は常なり。その上、智ありてこの地の案内・遠山・曲浦・離島までもよく知り、ことに松前にも出でて、日本の事をも尋ね知り、ま

た東北・靺鞨・蒙古までも、地理をよく察したり。この者に始終を申し聞かせ、伴い来りて主に仕えしめん」といえば、義経を始め皆々しかるべしと。「これより久魔伊志へは、いか程ある」と松前の者に尋ぬるに「およそ四百里余もあらん」という。だれあつて海満呂に従い行かんという者もなければ、片岡・秋田、かれに向つて「汝偽言をもつてこの処を逃るべからず。必ず、明日、海満林を連れ来るべし」と夷人の欲を逞しくする事を聞き、日本の淳酒嘉肴などを進め引出物を与え恩を見せて免じ帰らしめけり。

#### 海満林蝦夷の地理を語る。

明くる日午刻、海満呂は約を違えず義経に帰伏し、海満林を連れ来る由を申す。義経悦喜斜ならず。この白紙鼻より久魔伊志までは、およそ四百里と聞きしに、夜前彼所に帰えり、即時に今日、海満林を伴い来る事を怪しみながら、兩人を御前に召され、遙かに海満林を見給うに、面黒くして、髪鬚長く口隠れ、身には青き衣を左衽に着し、木弓を持ち、矢を携えたり。海満呂よりは背少し小さく見ゆれども、その様由々しくぞ見えにける。義経、海満兄弟を側近く召され、秋田次郎並びに松前の通事をもつて、島の様子、並びに、永くこの島の患となる蒙賊を退けん事を議し「一つには日本よりの通路を自由ならしめん為、地理を悉く語り聞かせよ」とありければ海満林頭を上げて「それ蝦夷は日本の東方に



当たり、蒙古は蝦夷の西南に当たれり。わが本貫、未曾久より、蒙古へ船路、七八日に往来せり。元来この島を三つに分けて、端蝦夷・中蝦夷・奥蝦夷という。まず端蝦夷というは、西南は江刺へ今、松前の舟着。第一の大港なり。松前・福志磨・仮墨太・レヒケ・ランナイ・ヲヨベリ、北は江止毛・タルマイに至り、北西はクマイシ・セタナイ・上ノ国という所に至るまでを端蝦夷という。中蝦夷というはセナガシ・久須意より三ツ石・志夫差利・久須利・アツケシに至るまでを中蝦夷という。また奥蝦夷というは西はシリエトコ・ニウホシマイに至り、東はノツサブに至りて、はなはだ地広しといえども山河多くありて、人なき地のみ多く、所々に村落ありて名も知れざる処数多なり。奥蝦夷の未曾久は首領を亜止利という。近隣の部落を多く従え、勢強大にして、石を畳みて城郭を築き、靺鞨・蒙古にも渡りて軍器も備わり、端蝦夷に較ぶれば、おおいに剛強なり。しかるに近年蒙賊盛に辺を侵し、蝦夷を蒙古の有とせんとす。ほぼ端々の島々は蒙古に取られし所も多し。また中蝦夷より奥蝦夷の際にイシガリとて大河あり。この河水ややもすれば大地に溢れ山を崩し地を失い人を損ずる事、珍しからず。これによって、中蝦夷より端はこの河を便として蒙古の患を免れたり。しかれども近年ややもすれば海上より中蝦夷・端蝦夷へも賊船の来る事多し」とつぶさに語りける。義経を始め従

臣等始終を聞きて「今は心安し。なにとぞこの地の一部落を謀をもつて従え、その人数を雑兵として奥蝦夷を帰伏させ、靺鞨・蒙古までも従えん」と密に軍議ぞせられける。

義経従臣とともに武芸を顕わす。

ここに秋田尚勝が本国より兵糧運送のため、津軽深浦にて三艘の渡海船、一艘は義経の御座船とし、残り二艘の舟は御座船に二三日遅れて出帆しけるが、五月下旬逆風に遭いすでに危うかりけるが、とかくして奥州の小泊港の海中、大島と名付けし島に五十日余り泊りし。漸く、七月下旬に到つて松前の江刺港に二艘共に着船して「交易のため、日本より渡海せし」と偽り、義経のある所を尋ぬるに、松前に知れる者ありて、頃日、海浜、白紙鼻という所に御座する由を語りければ、おおきに悦び、江刺より直ぐに白紙鼻へ舟を回し、程なく海上無難に白紙鼻に着岸す。かねて秋田が計らいにて、この舟に究竟の名馬を十二匹まで載せたり。義経主従、秋田諸共おおいに悦び、「兵糧・兵器より、日本の酒、その上名馬まで渡りければ、このままにてたとえ二年三年、白紙鼻に居すとも兵糧に不足なし。快く夷賊を征せん」と勇み進まずという事なし。かの後船の渡りし後は、郎従ら徒然の余り、馬を責めあるいは弓を射、兵器を試み慰みける。ある時義経の御前にて、海満兄弟および松前の者共を召して、熊井太郎忠基は究竟の弓勢

なれば、おおいなる馬場を設らえ、騎射をなさしめ給う。鈴木三郎重家は馬の上手にて、曲馬を乗る。海満呂・海満林・松前の者共ついに見なれぬ事なれば、片唾を呑んでぞ眺め入り、おのおの手練を感じける。海満呂は座を立て、そのまま海に入り海中より重さ百斤ばかりなる岩石を持ち出だし、片手に据えて座上に置くに、松前の者共寄り集まり持ち上げれども、一人も持ちうる者なし。弁慶見兼ねて飛んで出で、この岩石を遥かに目より高く差し上げ、「用もなき石を取り上げつるものかな」と一町ばかり彼方なる海の深みに投げ込みける。さて辺りなる松の樹を根ながら引き抜きて、海満呂に「かくのごとくするや」といえば、海満呂も劣らず辺なる樹木を根ながら抜き取る。その後、弁慶、相撲を始めけるが、海満呂を始めとして、松前の者共、一人も弁慶に及ぶ者なかりける。その間に秋田次郎は蝦夷の鎧を取り出だし、樹の枝に掛け、これを海満林に射さしむるに、海満林、蝦夷の弓矢をもつてこれを射る。矢坪を好むに、鎧の札を一つずつ、少しも違えず、射たりける。佐藤三郎義信、この弓矢を借りて、これを射るに、海満林には及ばざりける。この三郎義信は義経の寵臣、讃州屋島の合戦に能登守教経の矢に当たり討死せし三郎兵衛次信が嫡子にて、弟の四郎経忠とともに二代の忠臣にして、のちに蝦夷にその名を顕わせし、十二員の臣下の一人なり。義信は幼年よ

り弓を好み、今年いまだ十七歳、的矢の勝負にこの三郎に及ぶ者こそなかりける。また熊井太郎は聞こゆる強弓なれば、「蝦夷の甲は矢の通らぬ由。たとえ、いかなる甲冑なりとも、某が矢の通らぬという事あるべきか」と弓矢携え立ち上がり、「昔、奥州にて君の御先祖、八幡殿、清原武則が所望によつて、甲三領樹の枝に掛け、これを射通し給いしと聞く。某、八幡殿の弓には及ばずとも、夷人の甲などか通さで置くべき」と三人張に十五束、暫し、固めて兵と発つ。過たずさしめに堅めし甲を射通しける。海満呂兄弟おおいに感じ、義経も御感斜ならず。これより海満林は熊井を師とし、日本の弓を学びける。義経も興に入り給い、「われも早業を見せん」とて、馬上に薙刀を水車に回し、三丈ばかりもある樹木を安々と躍越えなどして見せ給いければ、海満呂・海満林・松前の者共、おおきに恐れ「蝦夷の堅甲も熊井が弓に及ばず。弁慶が大力・義経の早業、いづれも肝を消し、おおいに悦び、かかる武勇の人びとに従いし事わが本意を達せり。なにとぞして未曾久を義経の手に入れん」と。これより日夜、海満林は謀をぞ回らしける。

阿刺干、上ノ国に横死す。

端蝦夷の奥に上ノ国という所あり。ここの首領を満天仁とぞ申しける。上ノ国の地たるや、北は志利辺知・島古麻喜に至り、南は

宇智羅嶽を限り、岩石を疊みて城郭のごとし。村落所々にありて、いずれも要地に居を構え、山野に狩をなして産業とす。この西は大海にして、海上荒く舟の往来絶えたり。海浜には昆布を出だす。この地の女、衣服を着ながら海に入り、鎌をもって昆布を取り、松前に出して銅鉄、あるいは米穀の類に易るをもつて生業とす。かくて、松前の阿刺干は白紙鼻の陣営より義経の命を請け、この地の形勢を窺わんと松前の従者二十人を従え、陸地より上ノ国へ赴きしが、白紙鼻より上ノ国へは陸地およそ五百里ばかり、ことに山路儉難にて、毎日々々山野に木を伐つて仮屋を建て、夜は休み昼は路を急ぎける程に、漸く上ノ国に着きしかば、松前の者なるが商売の為に、これに來りしといて、銅・鉄・耳環その他、衣服・刀劍の類を少々取り出だし、上ノ国の人に頼つて物語を聞くに「上ノ国は三方に儉山ありて要害よく、一方は荒海なれば、渡海も叶わず、蒙賊の患もなく、大富饒の者多く住居せる由。なかんずく、砂牟印という者、大豪家にして、下僕の数百人を従え、日夜、山野を狩して、熊膽を多く貯えたり」と聞ければへ蝦夷は金銀を貴まず。熊膽を多く持ちたるを富家とするなり。右の砂牟印が家に頼りて、この家の僕従とともに、狩などに出て、久しく、この家に寓して、種々心を尽しける。この砂牟印が娘に砂牟金という者あり。阿刺干、ついにこの女に密通し、この地に留

まらん事を思いける。元來、その頃、蝦夷の風俗にて、定むる夫ある女を侵すといえども、罪する事もなく、咎むる者もなかりける。かくこの家に寓するといえども、義経の事を砂牟印に云い出だす隙もなかりける。一日阿刺干、従者を伴い狩に出でたるが、一人の蝦夷人これも同じく弓矢を携へ狩に出たるが、とある山に入りて、一匹の猿を目掛け、急にかの蝦夷人、弓に矢を矧げ追いつく。なにかしたたりけん。待設けたる阿刺干が前を過る。阿刺干も弓矢携えければ、よつ引いて放つ矢過たずかの猿を射留めたり。阿刺干、おおきに悦び、従者に猿を引き担がせ、砂牟印が家に帰らんとす。かの蝦夷人、これを見ておおきに怒り「何者なれば某が付け狙ひし猿を、猥りに取りけるぞ」といいもあえず、持ちたる弓をよつ引いて、兵と射る。阿刺干身を躲しけれども、ついに、肘に射付けたり。されども、阿刺干、事とせず、矢をかなぐり捨て飛んで掛かる。かの蝦夷人も互いに挑み合い、暫しは闘いしが、かの者力や優りけん。ついに、阿刺干を討ち伏せ、シヨキネ棒を取り出だし、難なく討ち殺しける。従者はこれを見て、阿刺干を助けんと、かの者に掛かりしが、阿刺干が何の苦もなく殺さるるを見て、元より松前の臆病者なれば、なじかはもつて堪えるべき。みなわれ先にと逸足いたして逃げ帰り、砂牟印、並びに砂牟金にもかくと告げれば、おおいに驚き、すなわち従

者を先に立て、かの所に到り見るに、相手は行方なく、阿刺干は大地に倒れ伏して、死にたりける。人びとこれを抱え起こし、家に帰って、さて枕元に歛先を立て置き、怪しげなる祈禱をなしければ、忽阿刺干蘇生したり。砂牟印が娘砂牟金、甚だこれを悲しみ嘆きける。総じて、蝦夷人は泣くに涙出だすとなん。鼻を垂らしけるとなり。砂牟印、この時わが娘と密通せし事を覚り、阿刺干に向かつて「汝久しくわが方に居るといへども、何国の者にて、いかなる由縁にて来れるやらん、尋ねし事もなかりしが、今図らずも、横死に遭えり。何にても云い置く事あらば申すべし」とありければ「われは松前より来れり。もとは仮墨太の者なるが、幼年より松前に到り桂呂仁に仕えたり。この程、桂呂仁、奥蝦夷に蒙古、国を侵す事を聞き、ついには患、松前に到らんかと日本へ加勢を乞いければ、程なく日本より加勢の人数この蝦夷に渡り、今、白紙鼻に仮屋を設らえ居せり。われは向導として、先達つてこれに来れり。願わくば日本人をこの処に招き、時節を見合せ、この地の首領にこの由を告げ給わるべし」と物語す。砂牟印が曰く。「われこの所に数代住居せしが、要害の地なる故、一度も外国より侵するの患なし。これによつて武芸に疎く防戦の術を知らず。日本人は武道に精しと聞く。ことに加勢として来りしとあらば、急ぎこれに迎え、奥蝦夷の乱を鎮め、蒙賊を退け、国を安んずる

為なれば、汝が願に任すべし。しかし、首領、満天仁は知慮少なき人なれば、猥りに云い出し難し。まずまず、日本人をわが家へ招き置き、某深き慮あり」と了承しければ、阿刺干おおいに悦び「云い置く事外になし。わが願望成就せり」と悦び、暫くあつて死にける。これによつて砂牟印、阿刺干が横死を不便に思い、阿刺干が従者におのれが家人を添えて白紙鼻へ遣わし日本人をぞ迎える。

#### 卷之四

海満林、志魔母伊を取るを計る。

「智慧ありといへども、勢に乗るにしかず。鑑基ありといへども、時を待つにしかず」と。宜なるかな。源義経、日本文治五年六月より今九月に至るまで、白紙鼻に暫く安居し給いしが、頃日、海満呂・海満林の兄弟を得給い、三島の地理・要害・城地に至るまで絵図に写して、義経、日夜これを見て計策を回らし給い、一日、海満林及び従臣を召して、不日に事をなすべき評議をぞせられける。海満林申しけるは「某がこれまで住みけるクマイシは、地狭く、首領金架奈とても事に臨み、物の用に立つべからず。これより西に至り、五百有余里にして上ノ国という所あり。この地は海

路絶えて要害の地なり。また東に至つては、仮墨太という所、よき城地なれども、いずれも、この処々には、首長あつて、猥に入る事を許さず。ここにこの地を去ること百里にして、志魔母伊という処あり。首領を万平須という。家富み、勢を奮う事近辺の村落に並ぶ者なし。これに頼りて事をなさば、いかなる事にも出来せずという事なし。某、つらく思慮を回らすに、万平須、元来大欲の者なれば、何とぞして、志魔母伊において、交易の場を開き、日本より往来して米穀・酒の類を自由にかの地の産物と交易をなさしめ給わば、大欲の万平須、早速に許諾せん。かくの如くして、人民を懷け給わば、万世の謀ならん」という。義経、聞き給ひ、「げに、汝が申す事、我が心に叶えり。それ、軍法にも天の時は地の理にしかず。地の利は人の和にしかずといえは、人の和に非ざれば、事を成就する事難し。さきに頼然が言いしも、これなり。汝、志魔母伊に到り、万平須に説きて、この事を計らうべし」とありければ、海満林、御暇給わり、シマモイ指してぞ急ぎける。

海満林、丹須古に会う。

海満林は白紙鼻を立ちて、シマモイに行かんとせしが、心に思うよう。「我々兄弟、金架奈が手下にあつて、巡察の役たりし身が、今、日本人に従いし事なれば、定めて金架奈、我々兄弟を疑うべ

し。しかし、金架奈は知恵なき者なれば、何とぞ謀をもつて金架奈を賺し、万平須に近寄る便にせばや」と思案し、まずくクマイシヘ立帰り様子を窺わん」と彼方こなたと急ぐところに、一人の蝦夷人弓矢を携え徘徊する者に遇えり。海満林、近寄つて声を掛け「汝は何方の者にて、何国に行くや」と問ひければ、かの者答えて曰く。「我はシマモイの万平須が手下に丹須古という者なり。毎日、山野を狩して、いかなる日といえども、我何にても鳥獸を得ずという事なし。しかるに、今日、未明より出でて今晡時といえども獲物なし。もし獲物なき時は罪を得る。故に百里の儉難を越えてここに至る。汝いかなれば、我を問う」。海満林、万平須に仕ゆると聞きて、「これこそ究竟の手掛なり」と思ひ、「汝獲物なくして帰らば如何に」と問う。「我獲物なくして帰れば即時に主人万平須に打ち殺さる。故に今夜が明日になるとても、狩得ずんば帰ること難し」という。その時、海満林何にてもこの者を賺しなば、事なるべしと思ひ、義経より賜わりし日本の美酒を少々携えければ、丹須古を側へ招き酒を勧む。丹須古も今日は獲物なく、その上珍しき美酒を呑みければ、総じて蝦夷の習にて、酒を呑めば、互に踊り楽しむ事なればやや久しく海満林とともに踊り遊びける。その時、海満林が曰く。「汝、今夜何国に行くとも獲物あるまじ。しかる時は、如何する」と問う。丹須古が曰く。「如何と

もする事なし。何国へなりとも身を隠さんと思うのみ」。海満林が曰く。「しからば、我、汝に一大吉事をいい聞かさん。我はクマイシの海満林という者なるが、この程、日本人のこの地に渡海せるに会いて、我もクマイシへ帰る事を忘れたり。日本人、あまたの産物を積み来り、この地に交易の場を開かんという。我、仕ゆる所のクマイシは、土地狭く、ことに諸方への通路悪し。汝が住む志魔母伊は、地濶く諸方の通路便よき所なれば、汝が主人、万平須にこの事を勧めんと思ひ、この所に来れり。今、汝に与えし酒も日本人の持ち来れる酒なり。われ日本人を欺いて、万平須とは元来われは知己なりと請け合えり。幸、汝に遇いたり。汝、この事を主人に取り持ち計らんや。しからば今日の獲物なき罪も逃るべし」という。丹須古、始終を聞いておおきに悦び、「我、志魔母伊において日本人交易の場を開かば、わが島の幸、何事かこれにしかんや。しかる時は、この事、わが一つの功なり。獲物なき罪を逃るのみならず、我を重く賞ずべし。急ぎ帰つて、万平須に説き、汝とこの事を計らん」と海満林が居処を尋ね、丹須古は志魔母伊指してぞ帰えりける。

万平須、丹須古を殺す。

丹須古は志魔母伊に帰り、主人万平須が前に出でて申しけるは、「某、終日狩り暮らしけるが、今日いかなる日やらん。猿一匹も得

候わず。これによつて思はず儉難の山坂を越え、白紙鼻の辺りまで狩獵せしが、かしこに日本人多く集まり、竹木を伐つて、家を造り、群がり居る体を怪しみ、いかなる事にやと窺えば、その中に松前人も交じり居て、近来、日本との交易滞る故に、日本人交易の場を開かん為、この島に渡る。この志魔母伊は産物多き所なれば、首長へ願ひ奉らんと欲すれども、この所の案内、かつは松前の桂呂仁が使をもつて首領に申し入れんと、かねて桂呂仁まで願ひ置きたれば、松前の首領よりの使者を相待ち、今に何の沙汰もなく候故、空しく日を送るという。これによつて、某、思案致し候に、いずれにもせよ、この志魔母伊にて交易の場所を開きなば、諸方よりこの地に集まり、松前、日本への通路自由にして、おおいに利を得んと思ひ、ほぼ、某、約をなし置き候えば、日あらずして、日本人この地へ来らん」と申しければ、大欲の万平須なれば、大きに悦び、「日本人交易の場所を望むよし。一度交易の場をこの地に開かば、繁昌、日頃に十倍せん。松前の左右を待つに及ばず。われ、これを許すべし。早く日本人をこの地へ召して然るべし。汝、この事を取り計らうべし」とおおきに丹須古を賞し、取り上げ使いける。これによつて丹須古が勢、日頃に十倍せり。丹須古が朋輩の者共、かれが主人万平須の心に叶い、おおいに出頭せしかば、不審晴れず。丹須古に「何故かくの如きぞ」と

尋しかば、丹須古、知恵浅き者にて、ありの儘に海満林に聞きし由を物語す。朋輩の者共、丹須古が頻に出頭せしを妬み、主人、万平須に密かに右の始終を告げれば、元来短氣の万平須、おおきに怒り、「虚言をいいて、主をくります」と即時に引き出だし取つて抑え、ついに丹須古を討ち殺しける。この後、万平須、思案を回らし、なにとぞ白紙鼻に人を遣わし、日本人をこの所へ召し寄せんと、手下に魁首貴という者を白紙鼻にぞ遣わしける。

# 弁慶魁首貴を殺す。

海満林は義経の御前に出でて、「某、頃日謀を回らしなにとぞして万平須が居処、志魔母意を取らんと思慮を回らし、ひとまず、クマイシへ参り、某が古朋輩に喜留志という者の候が、万平須に縁のある者の由。なにとぞ、謀を回らし、彼をもつて万平須に云い入れんと、昨日、久魔伊志指して参りし途にて、図らずも万平須が手下の丹須古という者に出で会いたり。この丹須古は毎日狩に出でて、禽獸を得て帰る。もし獲物なき時は帰る事能わずという。昨日は終日、狩り暮らせども、獲物一つもなき由物語す。もしなくして、空しく帰る時は、万平須、忽刑に行う由。これによって、某、心付け・酒などを与えて、丹須古が心を解き、かれが手柄にさせんと交易の事を申し聞かせければ、丹須古おおいに悦び、万平須を勧めて、志魔母伊に交易の場を開かんと約諾し、近き中に

某まで左右をせんと勇み進んで帰り候」由、一々義経に言上し、「今日よりは丹須古が方よりの音信を相待つ」と申しける。義経の曰く、「上ノ国へは松前の阿刺干を先達て遣わせしが、今に何の音信もなく、阿刺干も帰り来たらず。また志魔母伊よりは丹須古が左右を待ち、いずれにても、よからん方に付いて謀をなすべし」と左右の便を相待ち給う。ここに從臣共は、日夜、山野に狩をぞなしにける。一時、弁慶、馬上にて、鉄棒を携え、鹿・猿・兔などを追い回しける。亀井六郎・佐藤三郎などは、頃日、蝦夷の弓を習い、禽鳥を射るに当たらずという事なし。かかる所に、向より、蝦夷一人、弓矢を帶し来りしが、弁慶が馬上にて、鉄の棒を振り回すを見て、おおいに驚き、この地に元来馬なければ、「頃日、人の噂にいう奥蝦夷へ蒙古人来る由。蒙古は馬上に達者なり」と聞けばこれならん」と思い、暫し身を隠して居たりしが、とある樹の陰より、弓に矢を番え、狙い澄まして、兵と放つ。弁慶、矢の来るに驚き、身を躲しけれども、難なく右の足に射付けたり。弁慶おおいに怒り、矢の来りし方を見れば、一人の蝦夷人なり。なしかはもつて堪ゆべき。一散に追つ掛けたり。かの蝦夷人も「叶わじ」とや思いけん、足に任せて逃げけれども、ついに叶わず、弁慶が鉄棒に当たり、あえなく死して失せにける。これすなわち、志魔母伊より白紙鼻へ使いに来りたる、万平須が手下の魁首貴に

てぞありける。これにより海満林は待てども丹須古が音信もなく、また志魔母伊には首領万平須、魁首貴が「帰るを遅し」と待ちけれども、互いに通路はなかりける。

#### 海満林、喜留志に謁す。

さる程に丹須古は万平須に殺され、魁首貴は弁慶が為に討たれければ、海満林、日夜、丹須古が音信を相待ちけれども、その便もなかりければ、種々思案を回らし、丹須古は、わが身の為に働けども、元来、大欲無知の万平須なれば、かえって、疑を起こし、事を果さざらぬと思ひ、この上は、方便を変え、久魔伊志の古き朋輩、貴留志という者に頼り、かれをもつて、また万平須が心を計らんと、義経に暫しの暇を乞ひ、久魔伊志へぞ急ぎける。この喜留志が一人の娘ありけるが、「万平須に仕えて、今は妾となりたり」と聞きければ、良き手掛と思慮し、急ぎ久魔伊志に到り、謀をもつて、難なく喜留志に交易の事を、かの娘より万平須に云い入れさせける。これにより喜留志、人をもつて志魔母伊に遣わし娘が方へ確と云い送り、万平須が事を聞くに、頃日、丹須古、日本人に交易の事を約し、「志魔母伊に交易の場所を開かん」と万平須に勧めしかば、おおいに悦び、すでに使を海満林が方へ遣わし、日本人を召し寄すべし」といいけれども、家臣、羯悪志という者、「丹須古が偽なり。欺れり」と讒言しければ、ついに丹須古は罪に落

され、万平須に害せられける。しかれども、万平須いかがいけん。その後魁首貴という者を白紙鼻に遣わせしに、魁首貴、また日本人の為に害せられたれば、いよいよ万平須におきに腹立し、「日本人は偽多し。交易の願にあらず。ただ盗賊ならん。人数を催し、日本人を残らず討ち殺さん」という由、喜留志が娘の方より告げ来る。海満林におきに驚き、しからば頃日、白紙鼻にて弁慶が殺したる、魁首貴なる事を悟り、「このままにてはなかなか謀なるべからず」と、喜留志と様々、相談しければ、喜留志が曰く、「しからば某、直ちに羯悪志が方に到り、事を調えん」と志魔母伊さしてぞ急ぎける。

#### 喜留志、羯悪志を訪う。

「男色老を破り、女色舌を損う」と。志気ある人もここに至つて、これが為に迷う。いわんや衆人においておや。さて喜留志は志魔母伊に到り、羯悪志が家にぞ着きにける。この羯悪志という者はもと喜留志が朋友にて、久魔伊志の出生なるが、万平須に仕えて功をなし、万平須、志魔母伊の首長となりし後は、羯悪志が勢強大にして、喜留志が娘もかれが計らいにて、万平須に仕えさせ、今は愛妾となりければ、この縁と昔の誼みを思い、喜留志とは、互いに無二の仲なりける。これによって、今般、羯悪志が家に来り、対面して「白紙鼻の日本人をこの地へ召し寄せ、首領に勧め



この処に交易の場を、この地へ召寄せ開かせん」事を頼みける。

羯悪志が曰く。「頃日、日本人、数多、交易の為、渡海せしとて、おおきに所々を掠め、この島の人を殺害せり。わが首領よりの使も、白紙鼻にて、人に害せられたる由、定めて倭賊の所為ならん。これによつて、近日、人数を催し、白紙鼻の倭賊を討たんと計る。何ぞここに召し寄せ、交易など思いもよらず。日本人は偽多く頼みとするに足らず」と中々合点せざりければ、喜留志も詮方なく、それより娘に会うて、様々こしらえ賺して、万平須へ直ちに云い入りければ、さすが大欲無知の者、ことに愛妾の言葉によつて、ついに得心し、やがて喜留志に対面し、手下の印吉利という者を添えて「日本人を呼び寄すべし」と、羯悪志にも知らせず、喜留志を久魔伊志にぞ帰しける。

伊勢・駿河、志魔母伊に使う。

かくて、志魔母意の使、印吉利、喜留志とともに、久魔伊志に來たり、海満林が喜留志が家に滞留せしに会いて、いよいよ、首長の御許しを蒙り、志魔母意に交易互市の場を定め、松前、日本の物産を、自由に交易せんと、海満林は使者と喜留志を伴い、白紙鼻にぞ帰りける。海満林は義経に急ぎ密に右の事共を詳しく言上し、すなわち、久魔伊志の喜留志・志魔母伊の印吉利を同道せる由を披露しければ、義経すなわち備前平四郎・黒井次郎兩人をもつ

て、種々使者を饗応し、礼を厚くし、印吉利、喜留志へ引出物を与え、首領、万平須へ種々の献上物を贈り、伊勢三郎義盛・駿河次郎清重を使者とし、海満林に松前の者を添えて遣わされける。まず首領万平須へ虎皮二枚・桑酒五斗・金銀耳環二十・古劍一振、喜留志が娘へ赤地錦一卷・緞子五卷、家臣羯悪志以下へ酒三斗・米五俵ずつ、そのほかそれぐに進物を備え、その年の十一月十日余、志魔母伊にこそ着きにける。

砂牟印の使、白紙鼻に到る。

ここにまた上ノ国の砂牟印は松前の阿刺干が死に臨みし時に、遺言せしに任せ、使いを立て、古阿刺干が従者とともに、上ノ国を発し、夜を日に継いで急ぎければ、程なく、白紙鼻に着いて、阿刺干横死に遭い、遺言によつて、砂牟印より義経を迎える由を委細に演説しければ、義経、従臣と評議ありて、「砂牟印がいう所、実事ならば、急ぎ上ノ国に到るべし」と宣いければ、民部卿頼然・秋田尚勝が曰く「海満林が謀にて、志魔母伊へ伊勢・駿河が参つたり。今また阿刺干、不慮に上ノ国に横死して、その遺言によつて砂牟印、君を迎えんと乞う。両箇のなかいずれに従わんも、あらかじめ定め難し。所詮、良き地を得るを肝要とせん。しかるべき人に雑兵を添えて、上ノ国の様子を窺わしめ給い、重ねて、御駕を回さるべし」とありしかば、義経も尤もと同じ給い、即時に

鈴木三郎重家・亀井六郎重清・下部の鬼三太に、雑兵三十人ばかりを添えて、これはまた、松前へ加勢として、日本より来りしといいし事なれば、兵器なども用意し、贈物を数多拵え、使いとともに上ノ国へと赴きける。程なく日を経て鈴木・亀井、砂牟印が家に入りて、砂牟印を敬う事君父のごとし、種々、日本の珍物を取り出だし、上ノ国の人民に恵み諭しける。上ノ国の人民、おおきに悦び「日本人は情ある者にて、理非明白なり」といいて、鈴木・亀井を慕う事、嬰兒の母を慕うがごとくす。されば首長、満天仁、ついにこの事を聞き、砂牟印が方に倭人来つて、人民に米穀を与え、酒などを吞ましめ、この地の人民慕う由を聞き、砂牟印へ使いを通し、鈴木・亀井をぞ請じける。亀井・鈴木衣服を改め、鬼三太諸共、砂牟印が案内にて、首領の館に入りて、満天仁に対面し、種々の土産・進物を贈り、満天仁を敬う事、君臣の礼をもつてしければ、満天仁、またおおきに悦び「日本人は義理明らかにして、礼を知れり」と悦び、賓客として首領の館に留め置き、種々饗応しける。満天仁が臣に張計理という者ありて、主人満天仁にいて曰く。「この程、砂牟印が方に居る日本人を見るに、その賢しき事、この地の人民及ぶ処にあらず。某つらく日本人の底意を探り見るに人民を思ひつかせ、ついにはこの地を奪い取らんと欲する形勢なり。今、勢微なる時、日本人を残らず討

ち殺し、後の災を除かん」という。満天仁は大欲無道にして、頃の贈物に礼を厚くせし故、この諫言をさらに用いず、却つて、日本人を慕う気色に見えければ、張計理、怒つて飛び掛かり、満天仁を執え、刃を抜いて劫かして曰く。「某が申す事を聞き入れ給わずば、日本人の手に掛けんより、わが手に掛けて殺害し、われも自害して冥途の御供を致さん」とすでに刃を胸に当つれば、満天仁、おおいに恐れ、欺りて曰く「汝が意見を用いざるは、わが過なり、今より誓つて、日本人を近づくべからず。いかにも最前より、汝がいう所を考え思うに、日本人の心底計り難し。速やかに、彼等を殺すべし。汝密にその用意を致し図らうべし」といければ、張計理おおきに悦び「某が諫言を許容し給う事有難し」と刃を鞘に納め、「やがて日本人を討ち取るべし」とその用意の為、おのが宿所に帰りける。満天仁は、即時に近臣属従を召し集め、右の事共を一々語り聞かせ「張計理は逆臣なり。早く討つて捨つるべし」とありければ、従臣共我もくと得物を持って張計理が宅を取り巻き、「臣として君に刃を当つる罪、逃れ難し」といいて、攻め入りついに張計理が首をぞ取りにける。

亀井・鈴木、上ノ国を取る。

亀井、鈴木は客舎にあつて、この事を伝え聞き、おおいに悦び、「これぞ君の御運を開くべき端なり。この機に乗つて、この地を取

らん」と、それより砂牟印に乞うて、満天仁を砂牟印が家に招待しける。満天仁、悦びて、やがて日限をぞ極めける。己酉年へすなわち、日本文治五年十二月二日と定め、その日になりければ、満天仁ふと張計理が諫言を思い出だし、「砂牟印が家に入りし事、いかが」と思えども、契約を交する事なり難く、すなわち、使をもつていいけるは「給仕の者に刃を帶する事なかれ」となり。亀井・鈴木・砂牟印も「畏り奉る」との返事なれば「今は心掛もなし」と究竟の剛力十人を選びて相伴人と定め、その外、人数を従え砂牟印が家に入らんと用意す。亀井・鈴木・鬼三太は密に砂牟印にも知らせず、商議しけるは、「満天仁、われわれが謀に落ちて、今日、この所へ来たる。かれ席に着かば、色を悟られず一刀に刺し殺さん」という。鬼三太進み出で「この役は某に許し給え」という。鈴木が曰く。「満天仁は剛力の由、ことに相伴人はこの地にて、皆々腕立をする者共なり。もし刺し損ずるものならば、われわれが命を落とすのみにあらず。災、ついに、君に及ばん。まづ／＼汝は無用たるべし」という。鬼三太聞きて「たとえ満天仁が力の強き事、異国の孟賁に優るとも、われ一命だも捨てて害せば、などか過る事なからんや」といいければ、鈴木兄弟、かれが志の切なるを感じ、「かならず誤る事なかれ」といい含め、さて松前の雑兵は二十人をいづれも兵器を隠し持たしめて、客舎の後に

忍ばせ、「事、難義に及ばば、切つて出ずべし」とそれ／＼にいい付けて、その日を遅しと待ち居たり。かくて饗応日にもなりしかば満天仁、入り来つて席に着く。近臣十人色黒く、顔面は夜叉のごとくなる者、続いて左右に坐す。これ相伴人なり。この砂牟印が家は、山掛なりければ、従者数人は山の麓に止めて、客舎へは一人も登さざりける。砂牟印・鈴木・亀井は馳走人となる。砂牟印が家来二人、膳を持ち出し満天仁を始め、相伴人に据えれば、鬼三太は大なる鮭の炙物を堆き台に載せて持ち出で、満天仁が前に据え、立ち帰らんとするよと見えしが、かの鮭の腹中に仕込まれたる刀をすらりと抜く。満天仁おおいに仰天して立たんとする所を、早く鬼三太、かの刀を満天仁に打ち付けければ、胸を通して後へ倒る。十人の近臣共、おおいに怒り、目前の敵と鬼三太に取つて掛かる。鬼三太は十人を相手としてさま／＼と働けども、ついに叶わず、即座に討たれにける。砂牟印をはじめ、郎徒共、おおいに騒ぎ、狼狽え回る。なおも十人の相伴人、鈴木・亀井に飛んで掛かる。亀井・鈴木、傍より太刀取り出だし、渡り合い、ここを最後と闘いける。また山の麓よりは、満天仁が手下の者共、われ先にと坂を登りしが、坂半にて松前の者共、待ち設けて討つて出ずる故、一人も登ることあたわず。その隙に鈴木三郎、相伴人を三人まで切り伏せ、大音声にていいけるは「我われこの地に来

る事、余の儀にあらず。蒙古の賊を退け民を安んぜん為なり。汝らが主と頼む満天仁は仁義五常を知らず、無道にして民を虐ぐ。ここをもつて国人甚だ怨を含む。故に今これを殺害す。汝らわれに従うべし。助け永く国民を救わん」といいければ、砂牟印これを聞きて起き上り、「我われ、これまで満天仁を首領となす事、大悪無道の者とは知れども、かれが威勢に恐れて日を送れり。今、幸に日本人を得る事、天の賜なり。今よりわれは従わん」といいければ、満天仁が郎徒共、近臣を始めとし、日頃怨を含み居りける上、鈴木兄弟が武勇に恐れ、皆々拝伏したりける。亀井・鈴木おおいに悦び、しからば満天仁が館に残り留まる者共をも従え、不日に義経をこの処に請ぜんと砂牟印が家を改め、城郭のごとくにぞ構えける。

## 卷之五

泰衡、泉三郎忠衡を攻むる。

さる程に、日本奥州には泰衡が舍弟、泉三郎忠衡は義経に志気深く、勅命を徧せしなど、かねて叡聞に達し違勅の罪によつて急ぎ忠衡を誅すべき由、過にし文治五年六月七日、鎌倉の飛脚、奥州に到着せり。また同十三日には泰衡が使者として、一族、新冠

者高衡、義経の首を黒漆の櫃に入れ、美酒に浸して下人二人に荷わせ腰越浦まで参着しこの由を言上す。これによつて首実檢として、和田太郎義盛・梶原平三景時のおの鎧直垂を着し甲冑の郎徒、二十騎を相具し腰越に来つて、首実檢を遂げにける。へ東鑑にこの首、分明ならずと云云。これによつて、腰越へ御使を下され「泰衡、義経が首を討つて送らるる条神妙なり。ついで泉三郎忠衡、義経に無二の忠志を尽せし由、違勅の者安穩なる事を得ん。急ぎ忠衡を誅せらるべし。しからずんば泰衡もともに違勅の名を得られんか。これ頼朝が計にあらず。勅命の趣きかくのごとくなり。この旨を帰つて泰衡に申すべし」と仰せ遣わされ、御暇を給わりける。新冠者高衡、夜を日に繼いで、奥州に馳せ帰り、右の趣を述べしかば、泰衡・国衡、表にはこはいかにと仰天の体なりしが、忍びやかに忠衡の方に人を遣わし、右の次第を告げ「この上は御辺の方へも討手勢を差し向くべし。自害せし体に遇し、高館殿の御跡を慕い、父が遺言のとうり、蝦夷に渡り、命を全うせらるべし」と云い送り、同二十六日、「勅命なれば是非に及ばず。忠衡を誅すべし」とて、勾当八秀実を討手の大将として、その勢八十余騎にて泉屋に押し寄せ閨を作りて攻めたりける。館の中にも忠衡が郎徒共ここを先途ぞ防ぎ戦いける。この泉屋は無量光院に程近し。折節、夜に入りて、館に火の掛かりければ、ついに無量

光院にも火移らんとす。寺僧等もここを先途、防ぎける程に、漸々として、打ち消しけり。この寺は故秀衡入道、菩提所の為に建立ありし靈地にて、宇治の平等院を模し、扉には秀衡、自ら狩猟の体を描き、金銀を鏤めたり。火もすでに静まりければ、勾当八秀実、泉屋を点検するに、忠衡を始め郎従共、自害と見えて死骸も悉く焼損して、その形分明ならざりしとなり。

忠衡、密かに蝦夷に渡る。

その夜、泉三郎忠衡は郎従共に暫く防ぎ矢射させて後、館に火を掛け、自害の体にもてなし、裏道より逃れ出で、ついに蝦夷へと志し、津軽深浦へとぞ落ち行きける。頃は六月二十日余、深浦の港にはかねて秋田次郎が謀にて交易渡海船一艘この港に泊して、松前蝦夷の安否を聞き居たりしが、忠衡は姿を窺し主従十人余、賈の体に見せ羽州秋田の者なるが、平泉へ商売の為に久しく滞留し、この度松前へ渡海せんためと偽り、この船にこそ来りける。

また忠衡が計にて、義経の御台所・姫君のいまだ四歳になり給えるを抱だいて、思い／＼に姿を変え、深浦の辺に忍びおわせしが、忠衡介抱し奉り、増尾十郎権頭兼房が一子増尾三郎兼邑とて少年十六歳なりけるが、御台・姫君の御先途を見届け奉らんと、高館城を忍び出で、泉三郎が方に隠れ住みしが、この度の御供にぞ参りける。その外、秋田が郎徒、並びに船頭・水主・梶取、都合三

十余人、六月二十九日の黎明に深浦の港を出船せしが、折しも心に叶う追風なかりしかば、小泊という処に数日泊して順風を相待ちしに、松前船一艘この港に着岸しける。いかなる船やらんと思えば、秋田次郎が郎徒、松前の者を従え、蝦夷の白紙鼻より日本の兵糧を積みし後船を迎えの為に来りし船なり。忠衡主従、御台を始め、皆々おおいに悦び、急ぎ秋田が郎徒に遇うて様子を聞くに、義経主従、恙なく松前に着岸、それより今は端蝦夷の白紙鼻という所に御座する由を物語す。人びとおおいに悦び、「しからば、一日も早く蝦夷の白紙鼻へ渡海すべし」とありけれども、この渡海はいたって難所なれば、順風を待ちて、すでに百日余も滞留せられける。程なくその年の十月に漸く順風に續解きて、十一月十日には程なく松前の海口、ネブタという所に着船し、ここにてまた様子を聞くに、いよいよ義経は端蝦夷の白紙鼻の海浜に居する由、またこの頃、上ノ国という所に日本人、蝦夷の首長分の者を殺害し、おおきに騒動せる由を風聞す。これによって、松前の向导を頼み、白紙鼻へ回船して、十一月二十五日にはついに白紙鼻にぞ着きにける。

忠衡、義経と白紙鼻に遇う。

泉三郎忠衡は程なく白紙鼻に着いて、義経主従に巡り逢いければ、義経、悦喜斜ならず。急ぎ対面ありて、互に、過ぎにし高館没落

の事を語り合い、忠衡も兄泰衡が謀にて泉屋を逃がれ出でたる始終を物語りし、御台所・姫君にも渡海の由を申し上げれば、義経始て対面ありて、ただ言をも宣べず御涙を流し給いける。御台は女性の方に、知らぬ夷の島に渡り、この程漫々たる波濤を凌ぎ、心細くも生たる心地はなけれども、君に巡り逢わんを力にて、いまこの島に渡り、義経に巡り逢い給い、悦のあまり、過ぎにし高館の形勢を思い出だし、いまこの御座を見るにつけて、四方は海山のみにして、家居とても定ならざれば、御涙、堰あえ給わず、その座に有り合う人びとも、泉三郎忠衡もともに袖をぞ絞りける。やうやう常に側に召し仕え給いし阿古という女、一人この度の御供にぞ参りけるが、姫君を懐き奉り、義経の御側に出だし参らずれば、義経みずから姫君を懐き給い、しばしは言をも宣わざりける。増尾三郎兼邑も御目見え仕りければ、義経、三郎を側近く召され、「汝が父兼房、数年我に従い、数箇度の合戦に忠勤を励み、別して耆老の身、我を介抱し、あまつさえ、高館においては杉目行信と共にわが命に替わりし忠節、いつの程にかこれを報せん。われとても日の本の地に住む事叶わず、かかる夷の島守となり、行末定めぬわが跡を、汝弱年の身として、はるばるこの地に渡り、われを尋ぬる志、再び兼房蘇生したると思うのみ。いよいよ、忠勤を極むべし。われもせめてこの島を従えなば、汝と共に永く末

の栄華を楽しまん」と懇に宣いければ、増尾三郎謹んで承り「こは有難き御言葉かな。父兼房、高館において、某を呼んで申けるは、密かに君の落させ給う由を語り、汝は御台所の御供をして泉館に忍び入り、忠衡の下知を受け御台所の安否を見届け申すべし。われも高館に火を懸け、密に忍び出で、君の御供して何方にも忍び安居せば、御台所を迎うべし。まずそれまでは、今生の別なりと、終日酒酌み交しけるが、これぞ最後の暇乞と、のちにぞ存じ候いき。その後、高館に火を懸け行信と共に自害したる由。母には都にて生別、父には奥州にて死して別れ候えども、今、君の御目に掛かり候事、父が本懐何事かこれに如かん」と双眼に涙を浮かめければ、義経を始め、有り合う人びと、いとど哀を催されける。義経、重ねて泉三郎に向かい「常陸坊海尊も館に火を掛けその紛に立ち退き、わが跡を尋ねんといいて、生死を共にせんと契約せしが、過つて火中に死しけるか、その音信を聞かず」と宣いければ、忠衡も「海尊が生死こそ不審に候え。この坊、不覚の死をする者にあらず。行方の程こそ心許なけれ」と。それより弁慶・頼然をはじめ、依田・熊井など有合う人びと寄り集まり、秋田次郎が計いにて、この島に渡り、海満林兄弟の者を得たる物語・蝦夷の地理・風俗に至るまで、忠衡に物語して、人びとはこれよりこの島を攻め討たんには、忠衡を一方の大將と頼まん」とおの

おの勇み悦びける。

鈴木・亀井が使白紙鼻に来たる。

程なくその年も暮れて、明くれば庚戌年へ日本文治六年。この年の四月、改元ありて、建久。南宋光宗紹喜元年に当たる。正月、義経、白紙鼻において、元三の儀式を執り行ない給う。近臣には泉三郎忠衡を始とし、衣冠正しく取り繕い、ほほ礼を備うるといへども、米穀だにもなき島なれば、万事欠けたる事のみ多かりける。かかる所に上ノ国より、亀井・鈴木が使として、松前人二人帰り来り、亀井兄弟が義経に捧ぐる書幹を出だす。義経、急ぎ開かせ御覧あるに、去年十二月二日、砂牟印が家において、上ノ国の主長萬天仁を謀をもって討ち取ったり。これによって鬼三太、討死仕り候へども、満天仁が在処を攻め落とし、すでに上ノ国の人民悉く降参し、民に米穀を与え、恩をもって撫育仕り候えは悉く帰伏し、城堡もほほ構え候。この地は要害の地に候えは、急ぎ御駕を巡らされしかるべし。近隣の部落に、この事隠れなければ、太流魔意・勢太奈伊と申す所の首長、人数を催し、押し寄すると承り、また共に来つて従わんという者もこれある由。その上、奥蝦夷には蒙賊来つて干戈止む時なしと承る。すでに時到来り。早々この地にて事を挙げ給うべし」とぞ告げたりける。義経・忠衡、おおきに悦び、「鈴木兄弟が働にて上ノ国を従えたる上は、こ

の白紙鼻は久しく守るに便よからず。ひとまず上ノ国へ移り、かの地において軍議せん」と弁慶・頼然に人数少々付属し、白紙鼻に兵糧船を残し、この所の留守と定め、義経・御台・姫君・泉三郎を始め、秋田・熊井・鷲尾・依田・備前・佐藤兄弟・増尾等、義経を守護し奉り、正月十一日に上ノ国へと打ち立ち給う。また海満呂は志魔母伊へこの事を海満林に告げ知らせともに商議せんと志魔母伊指してぞ急ぎける。

羯惡志、白紙鼻の営を襲う。

去年十一月より以来、伊勢・駿河・海満林は志魔母伊に來り、満平須に頼りて種々心を尽くし、この地に交易の場所を開き、互市せん事を望む。満平須は元來大欲心の上、愛妾喜留志が娘が勧むるによつて、この議を許さんと思へども、羯惡志一人合点せず。これにより久魔伊志の喜留志、久しくこの地に滞留し羯惡志に説いて、すでに十二月の末になりて事成就しければ、明くる正月よりこの地へ船を回し互市を始めんと、近隣の部落、および松前へも使いをもつて触れければ伊勢・駿河・海満林は、ひとまず白紙鼻指して帰りける。かかる所に上ノ国に騒動あつて、日本人首領を殺し、上ノ国を奪い、人民を懷け、勢強大にして、すでに諸部落を呑むの風情ありと風聞す。羯惡志おおいに驚き満平須が前に出でてつぶさに物語し「某、先に申ししごとく、日本人は偽り多

し。白紙鼻に久く船を寄せて滞留する事心得ず。これ奥蝦夷の蒙賊に異らじ。近き中に災ここに到らん。急ぎ白紙鼻の倭賊を討ち取るべし」とクマイシの金架奈へもいい送り、軍勢の用意をなし、程なく正月二十五日、軍勢三百余人、羯悪志を大将としておのの異形の出で立ちにて、得物を携え白紙鼻へぞ押し寄せける。

羯悪志、白紙鼻に戦死す。

かくて海満呂は志魔母意に到りしが、伊勢・駿河・海満林と路にて誓いければ、ここかしこにて噂を聞くに、上ノ国の騒動この地に聞こえ、日本人を討たん為、羯悪志、軍勢を催し、白紙鼻に押し寄するの沙汰頻なれば、おおいに驚き直ちにクマイシへ立ち越え、喜留志が家に行きて、上ノ国の一事を語り、その上義経主従、松前へ加勢として来れり。武勇に優れたる人びとにて、今はかの手下にある由物語りしければ、喜留志は暫く思案して「松前の首領の頼によつて、日本より加勢として、この地に来り、勢い強大にして、すでに謀をもつて上ノ国を攻め取りたる上は、たとえ白紙鼻に残り留まる者共を追い退けたりとも、上ノ国よりかの地の勢を合せて攻め来るべし。しからばついにはこの地の災ともならんか。某思案を巡らすに、金架奈を勧め、日本人に従い、この地を全うし、かれに力を添えて、奥蝦夷の蒙賊を退けんこそ肝要ならんと海満呂と相談して、首領金架奈に勧めければ、元来臆病

の金架奈なれば、「この処さえまったく別条なき事ならば義経に従がわん」と了承す。これにより海満呂は急ぎ上ノ国へと赴きける。ここに志魔母伊の羯悪志、三百余人を従え、白紙鼻より十里ばかり比方に陣を取る。すでに明日は押し寄すると聞こえければ、白紙鼻には弁慶・頼然・伊勢・駿河・海満林とともに、ひとまず敵を防がんと、兵糧船三艘に雑物を積んで、アリナイという所に回わし、白紙鼻には壘を築き、弁慶・頼然、大将として雑兵五十余人、これに従い、本陣としてこれを守る。伊勢・駿河両人は雑兵三十余人を相具し、山の彼方へ回し置き、戦半ばに敵の不意を討たんと計る。海満林はおのが手下の蝦夷兵を四五人従え、わざと小勢にて山の手より敵を遠矢に射んと謀る。かくのごとく、おのおの手分をなし待ち懸けたり。かかる所に海満呂が物語り、勧めによつて、金架奈も日本に心を寄せければ、喜留志を使として満平須が方に遣わし、日本義経の荒増を語り、弁舌をもつて勧めければ、元来、満平須戦好まねば、ついに帰伏し使を羯悪志に遣わし、人数を召し返さんとす。羯悪志おおいに怒り「一度も敵と戦わずして敵を恐るることあるべからず」とその夜の明方に、無二無三に白紙鼻に押し寄せ、矢を射ること、雨のごとし。されども蝦夷の弓矢は日本に較ぶればおおいに小さくして、おのおの甲冑を鎧いたれば、裏かく矢はなかりける。ただし矢尻に毒を塗る故に、



隙間を射らるる時は即死せずといえども、毒に苦しむ者多かりける。弁慶・頼然は敵を思うに引き受け、一度に討つて出でて戦いける。海満林は遙の山の手より、狙い澄まして射る矢、過たず羯悪志が右の眼に射付けたり。さしもの羯悪志も痛手を負いて怯む所へ思いよらぬ後の山より右に伊勢三郎・左には駿河次郎、三十余人、喚き叫んで切つて出で、当たるを幸に薙ぎ立てれば、羯悪志も心は彌猛に逸れども、ついに叶わぬ乱軍の中に討たれにける。大将討たれければ、なじかはもって堪ゆべき。三百余人と聞えしもわずかに討ちなされ、みなちりじりに逃げ失せける。弁慶・頼然、軍を纏め、味方の雑兵を改むるに、討死せる者は十人に過ぎず、敵を討ち取る事百余級、おおきに勝ちたり。しかれども味方の雑兵おおくは松前の者共なるが、十に八九は矢疵を負いたり。毒矢に当たり、その毒に苦しむこと限りなし。頼然も鎧の透間を二箇所まで射られたり。海満林、進み出でて「この毒を消すには薬あり」とて、辺なる草の根を搾り、白き汁を出だし、これを擦り付けるに、忽治りけるとなり。伊勢三郎義盛が曰く。「この勢いに志魔母伊をも乗り取るべし。思うに足りぬ夷人は臆病なり」といえば海満林が曰く。「この辺の部落は戦を知らず武に疎しいえども、奥蝦夷は左にあらず。まずまず上ノ国へ討ち取る所の首、並びに生捕を送るべし」と評定するところへ、久魔伊志の金架奈

が使喜留志、志魔母伊の首領満平須を伴い、おのおの種々の献物を捧げて白紙鼻の営に來り、海満林をもつて降参の由を弁慶へい入れて地に平伏す。これによって弁慶・頼然これを許し、おのおの人質を受け取り、その在所々々に歸し、久魔伊志の兵百人・志魔母伊の勢百人を残して、雑兵に加え、伊勢三郎・駿河次郎・海満林を大将として、上ノ国へ遣わし「白紙鼻の勝軍を注進し、志魔母伊・久魔伊志ともに味方に属し候」とて人質を送り、弁慶・頼然はなおも白紙鼻に残り留つて、敵の備をなしにける。

## 卷之六

義経初めて軍議を謀る。

さる程に義経は鈴木・亀井が謀にて事故なく上ノ国を手に入れ給い、民を撫するに徳をもつてし、人を威するに武をもつてし給いければ、蝦夷人おおきに帰伏してセブクラよりセタナイに至るまで、上ノ国の諸部落は従わずという所なく、今は上ノ国の人民、義経を首領と崇め、種々の産物を日々に献じける。義経も今は安居の思をなし給う。ここに三月十日余、白紙鼻より伊勢三郎義盛・駿河次郎清重・海満林、志魔母意・久魔伊志の雑兵二百人生捕り、人質を引具し上ノ国に到着し「過にし正月二十八日、白紙鼻に一

戦して、志魔母伊の大將羯惡志および雑兵百人を討ち取る。これにより志魔母伊の首長満平須・久魔伊志の首長金架奈おのおの降参し味方に属し、志魔母伊より松前までの部落はおおいに帰伏し、日々に白紙鼻へ産物を捧げて集まり今は太平に候」と申しければ、義経を始め泉三郎忠衡おおいに悦び、伊勢・駿河・海満林が功を賞し厚く労られける。光陰移り安く、程なくその年の五月になりければ「さらばまず秋田次郎が仇丹呂印が居する志夫砂理を攻めて丹呂印を討ち取るべし」と従臣を集め、商議せられける。海満林が曰く、「これより志夫砂理へは陸地は三百里余なりといえども、大山巨川ありて、なか／＼大勢容易に通じ難し。ただし、白紙鼻より船にて渡る時は、五百里もありといえども通路、却って自由なりという。またこの処より西南に当たって仮墨太という所あり。この地の首領を加金須という。この者、元来無道にして、かの地の人民怨を含む。これよりわずか百里に足らずといえども、かの処より、いまだ人一人も来らず。これを討つて威を示し、かの地の人民を撫育し給うべし」と申しければ、泉三郎忠衡が曰く、「近隣部落は残らず帰伏すといえども、仮墨太はいまだ来従せず。しかる上は志夫砂理・仮墨太、両所へ手分けをなして、軍勢を向けられしかるべきか」と申しければ、秋田を始め、あり合う人びとこの議に同じ、手分けをぞ定められける。まず上ノ国に砂牟印

が屋を城郭として、竹木を伐つて、柵を結び回し、要害堅固に備え置き、さて仮墨太へは泉三郎忠衡を追手の大將として、黒井次郎景次・伊勢三郎義盛に海満呂を添えて、蝦夷勢三百余人、また一方は依田源八兵衛広綱を搦手の大將として、備前平四郎成房・増尾三郎兼邑に海満林を添えて、雑兵三百人、都合六百人、仮墨太を指して押し寄する。また、志夫砂理へは、海陸三手に分かつて、陸地の追手は熊井太郎忠基を大將として、鷲尾三郎義久・駿河次郎清重に雑兵三百余人を従う。搦手は秋田次郎尚勝を大將として、秋田が郎徒・松前人を合わせて五百余人、また白紙鼻へ使を遣わし「海路より武蔵坊弁慶・民部卿頼然に、蝦夷松前の勢五百余人を従え、陸の勢に十日ばかり先達つて志夫砂理へ打ち立つべしと、仮墨太・志夫砂理、何方にても攻め落とすなば、おのの一手になりて助け合うべし」と互に合図を定めける。元来、この地に馬なければ、大將のほか皆歩行立にて、蝦夷の甲冑、異形の出立多かりける。

加金須、宇宛比とともに軍議を謀る。

端蝦夷の仮墨太には首長加金須、日本人、上ノ国の首領を殺し、人民を従え、勢強大にして、近隣の部落は悉彼が有となり、今はこの所へ人数を催し押し寄する由聞えければ、大いに驚き一族下従を召し集め、いかがはせんと評議す。多くの蝦夷人、集まりお

りたれども、元来愚蒙の者共なれば、だれあつて何といふべき様もなく、ただ黙然とし居たりしが、宇宛比という者、進み出でて曰く、「某、いまだ戦場には臨まねども、わが父、先年奥蝦夷にて蒙古と戦い、ほぼ軍法を聞けり。それ戦は城に籠つて防ぐあり。

出でて野陣して戦うあり。敵多勢なれば城に籠り守りて防ぐ。その上日本は詭りの謀を用ゆと聞く。今倭兵、上ノ国の人数を促し押し寄するとも、五千人には足るまじ。この地の人民を数うるにおよそ二三万はあるべし。しからば敵に倍せる事遙かなり。敵両方より二手に分かれて来るとあらば、この方も勢奈瓦を追手と定め、久奴井を搦手となし、この二箇所に出張して防ぐべし」といふ。定嘉留という者これを聞きて、「われ初めて軍法を聞けり。尤も至極せり。しかし、愚昧の心にて存ずる時は、人びと命は惜しきものなり。その惜しき命を、ゆるがせに捨つる事いたすべき事とは見えず。いかがすれば敵と闘う事にや」。宇宛比が曰く。「人を戦わしむるは円き石を千仞の山より転ばすが如し。出でて戦わねば、死するように致す事なり」。定嘉留、これを聞きて、「いかさま左なくては叶わざる事なり」と同ず。しからば手分けを定むべし。追手の三軍は、上軍の大將、西仮波、中軍の大將孫魔志・下軍の大將雨綿破と相定め、二千五百余人の雑兵を従えたり。搦手の三軍は上軍の大將休保差・中軍の大將孟志貴・下軍の大將羯

麻貴と相定め、その勢二千五百人を引率し二箇所に分かつて出張す。宇宛比は首領加金須と共に仮墨太にありて三千余人の雑兵を従え、弱き方へ加勢せんとぞ待ち居たり。

忠衡・弘綱、勢奈瓦・久奴井を攻む。

かくて海満呂は寄手の案内者として、須江知亜という所に着いて様子を聞くに、敵に思ひの外宇宛比という者ありて、軍法を覚え、勢奈瓦・久奴井の二箇所に出張して防ぐの由聞こえければ、猥りに戦い難しと大將の本陣へ使を立てかくぞ申しける。「追手の副将黒井次郎、勢奈瓦に着いて敵の形勢を見るに、もとより城壘としては、堀もなく塀もなく、ただ雑木を集めて一重の垣を結び回らし、その中に異形異類の出で立ちにて、スツウチ棒・シヨキネ棒の類を携え、その外おのおの弓を持ったるばかりなり。黒井次郎これを見て大きに笑い「合戦を知らざれば尤なり。ただ一息に踏み破らん」といふ。泉三郎これを聞きて大いに制し「敵を侮る者は、必ず人に生捕にせらるるとは孫子の語なりと聞く。敵は軍術を知らずと思ひ、案内も知らぬ重地に入りて戦いなば、却りて大なる敗を取るべし。わが君この蝦夷の地にして、今日始めての軍なれば、何分大事にかくべき事なり」と敵の備より三町ほど手前に陣を取り、鬨をどつとあぐれども、敵は静まつて音もせず。しばらく見合わすれども音もなし。掛大鼓を急に鳴らして、また鬨を上

げけれども、尚も敵は静まり反って音もせず。軍に馴れたる日本の諸大將なれども、敵対始の事なれば戦の法を知らず。但しわが猛勢に恐れてはや逃げたるか。今一度関を上げて、なお敵声を合わさずんば軍を進めんと思案しまた関を上ぐる。程こそあれ敵も一度に関を合わす。その声味方に数倍せるを聞きて驚く所に敵はや一度に咄つと打ち出で矢を射る事雨の降る如く、雑兵共短兵火急に進め来る。泉三郎・黒井次郎が勢もとより松前蝦夷の駈集勢なれば、余り急なる勢に起つ足もなくばつと引く。大將も大勢引き立ちたる習なれば、思わず四五町引き立てられ、軍法崩れければ追討に討たる者多かりける。伊勢三郎義盛は追手三百余人の中より百人ばかりを従え、わざと遙かの後陣に備えしが、この有様を見て「汚し。返せ」というままにもとより馬上なりければただ一騎真先に進み、「海満呂はいづくにある。この程の敵に汚くも引き退く者かな」と四角八方に駈け散らしければ、敵またこれに驚き四度路になつて進みえず。泉三郎・黒井次郎、これに大いに力を得、馬引き返し当たるを幸いに薙ぎ立てる。この馬武者に駈り立てられ敵退色になりければ、義盛大音声にて軍は勝なるぞ。このに勢奈瓦の柵を揉み落とさんと追立ける。敵これに大いに恐れ本陣指してぞ逃げ入りける。伊勢三郎直ちに軍を進めんとす。泉三郎駈け来つて、急に進む事なかれ。われ口には敵を侮る事を

戒めながら、逸る心に侮りけるにや。今日初度の戦に背を見せたり。思いの外の夷軍のていたらく、急に進み難し。なお搦手の軍の次第を聞き合わせんと陣を構えて守り居りたり。搦手へ回りし依田源八兵衛弘綱は、海満林を先に立て進みけるが、二日路遅れて久奴井に着きこの処も勢奈瓦と同じ拵にて陣取つたり。大將依田弘綱、これを見て軍法を知らざれば尤も理なり。まず一両日足を休めて踏み落さんと久奴井を三里ばかり引き退きて陣を取る。泉三郎忠衡は搦手の合戦心許なしと、また伊勢三郎義盛に人数百人を付けて搦手の見舞に遣しける。敵方には防の大將休保左、宇宛比が下知を受けて、羯魔貴に究竟の精兵五十人を引率させ「幸、今夜二十五日、一天墨を差したる如くなれば、密に敵陣に忍び入り、大いに火を放ち陣營を脅かすべし」と時分を考えて軍を出だしける。さて時刻になりければ、忍んで弘綱が向陣にここかしこに火を掛けて、関を咄つとぞ上げにける。元来、弘綱、油断はせざれども、蝦夷の習、歩むに足音なければ、いつ忍び入りたるやらん。寄手の方に思い掛けなく、「弓よ。薙刀よ」と騒動し、同士討なんども数多ありて、皆散々になりて走らんとする所に、追手より見舞のために来りし伊勢三郎義盛この火の手を見て「何とも合点ゆかざる火なり」と思い、馬を早めて駈け来り進んで見れば、敵よりはや夜討ちに入たり。さてこそとて「伊勢三郎義盛、ここ

にあり」と名乗って突いて掛かる。この勢いに力を得備前平四郎成房・増尾三郎兼邑、生年十七歳、ことに今日初陣の若武者なれば、伊勢三郎に勇められ「敵は小勢なるぞ。驚く事なかれ」と下知をなし、馬に鞭を加え、群がる敵を四角八方に薙いで回る。この三人の馬武者に駆り立てられ、元来歩立の蝦夷なれば、軍を纏めて引き退く。然れども伊勢三郎に助けられ、その陣場を退かず弘綱も成房も初度の軍に氣を取られ「蝦夷の敵兵侮り難し」としばらく控えて陣を張る。

久利満、宇宛比を刺す。付 忠衡・弘綱、仮墨太を陥れる。追手・搦手の二軍、寄手みな負けを取りたれども、左右方ともに伊勢三郎が働いて敵を退け陣場を動かず堅めたるとも、心遅れて徒に敵を眺めて進みえず。蝦夷方にはこれに氣をえて、宇宛比が軍術を褒めぬ者こそなかりけれ。かくて仮墨太には首領加金須は家臣属従を集めて軍議しけるに、この時、宇宛比を軍帥と称して、上座に居らしむ。宇宛比が曰く、「夜討は不時の事なる故、討方は常に勝ち、討たる方は常に負けるものなり。もし敵陣よりまた夜討する事もあらん。この用心の為なれば、老いたる者を選び出し夜の番を申し付け、勢奈瓦・久奴井へ遣わすべし」という。時に末席より勢奈瓦の久利満という者ありけるが、この者は先年婦女の遺恨にて常に宇宛比と異趣ありけるが、今日彼が上座せるを

見て無念限りなくこの言を支えて申しけるは「夜の番に老いたる者を選び出すとは合点ゆかず。耆老たる者は夜討の時に用に立たぬ者なり。訳もなき了簡なり」と嘲笑う。宇宛比これを聞きて、「汝等如きの生まれながらにして蝦夷を離れず外知らぬ愚盲の知る事にあらず。若き者は氣血盛んにして、夜はよく臥し昼は眠らぬものなり。老人はこれに反して昼は眠りて夜は寝ねず目覚め安し。汝らが知る事にあらず」という。久利満聞きて大いに怒り「その理は何にもせよ老人にもよく寝るあり。壮き者にも夜寝ざるあり」といえば、傍なる者共「いや／＼宇宛比の語、理に当たって聞こえたり」というにぞ。久利満座に堪らずその儘座を立ちてけるが思ふ様常々の遺恨といひまた今日の耻辱、方々もつて堪忍なり難しと、宇宛比が帰る道にぞ待ち伏せける。宇宛比これを夢にも知らず、評議終わつて後、加金須に暇乞いしおのが宿所に帰り休息し、何の心もなく久奴井の陣へ見舞の為行き過ぎる処に、思ひ掛けなく物陰より何の苦もなくシヨキネ棒を以て宇宛比を衝きけるが仮墨太の運の尽にやありけん。ただ一衝きに急所を衝かれて息絶えたり。郎徒共立ち騒ぎ、互に討つ討たれつ戦いける。その暇に久利満ただ一人宇宛比が首を引き下げ、難なく泉三郎が向陣へ駆け込み右の委細を物語し降参す。忠衡大いに悦び、この者味方となる上は、近日、仮墨太を乗っ取らん事日を数えて待つべ

しといひもあえぬに、久利満が郎徒、追々に着陣しなければ、降参の者なればとて「先陣に進めて、功を顕わすべし。某よろしく披露し得さすべし」と、直ちに搦手の大将依田弘綱が方へ使を遣わして曰く。「敵の智将、宇宛比を討取たれば、軍は味方、勝に極まれり。来る三日、辰の刻に左右方一同に攻むべし。必ず、図を外し給うべからず。但し、敵の諸軍、過半は勢奈瓦・久奴井に出張し、その上、宇宛比、久利満に討たれたれば、本城仮墨太は空虚なるべし。然る時は伊勢三郎には合戦最中なる時、敵の後に回り、本城、仮墨太を乗っ取り給うべし。然らば、ただ一時に仮墨太を手に入れん事この日にあるべし」と言い送りければ、搦手の諸将依田・備前・増尾等尤もなりと同心す。伊勢三郎もこの手にありければ、三日を遅しと待ち居たり。さて、その日になりければ、追手大将泉三郎忠衡・黒井次郎景次、柵近く攻め寄せ関を咄と挙ぐるや否や柵踏み破って攻め掛かる。勢奈瓦には三軍の大将西仮波・孫魔志・雨綿破なりけるが、頃日、仮墨太の力と頼みたる宇宛比は久利満に討たれ、その上久利満を先として多くの剛将敵に降りしかば、大に騒動し、だれ難ありて進む者もなかりしが、大将西仮波が手下火宇雷・魔久連・馬勢留・金魔志という兵共、我劣らじと討つて出る。なかにも西仮波、大音挙げて「汝等は日本本の吹流。この島に渡り来ってかく敵対する事甚だ以て奇怪なり。

火宇雷はなきか。あれ、討ち取れ」と下知すれば、火宇雷「得たり」と真つ先駆けて切つて掛かる。寄手の先陣海満呂、阿修羅王の荒れたるごとく火宇雷目掛けて突いて掛かる。互にこれを見て、劣らぬ剛力にて請けつ流れつ戦うたり。黒井次郎これを見て「あれ討たすな。者共よ、掛かれ」という儘に馬乗り出だし下知すれば、仮墨太の降将久利満これにて手柄を顕わさんと、郎徒引き連れ討つて掛かる。西仮波これを見て憎き久利満が振舞かな。敵に降つて先陣に向かつて戦をなす。彼を討ち取らずんばあるべからずと惣軍一同に我劣らじと突き出ずる。寄手も負けじと喚き叫んで戦いける。伊勢三郎義盛はかねて合図の事なれば、追手の合戦半と見えて、関の声遥かに聞えければ、搦手の軍を進め、久奴井を横切りに通り勢奈瓦の後へ回り、仮墨太の本城に押し寄せける。仮墨太には宇宛比が殺されたる騒動にて抄々しき兵もなく、首領加金須、五百人ばかりを従え、勢奈瓦・久奴井を頼みとして備えもなく敵ここへ寄するべしとは思ひよらざる所に、伊勢三郎義盛、その勢百人ばかり仮墨太の柵際にて関を上ぐるや否や、我先にとぞ攻め入りける。城中慌てふためき取るものも取りあえず、大に騒動し、同志討する者多かりける。その隙に寄手より所々に火を放ちけるに、折節、風激しく吹きて、四方に火移り、燔火、盛んに燃え上がる。城中この火を防ぎ兼ね、皆我先にと逃げ走る。

伊勢三郎これに氣を得て逃る者には目も掛けず、百人の勢真丸になし、加金須が籠る仮墨太の本城を乗っ取らんとぞ揉んだりける。首領加金須、火を防がんとすれば敵四方より攻め掛けたり。敵小勢なれども、詮方なく勢奈瓦の味方と一つにならんと勢奈瓦を指してぞ逃げたりける。また、久奴井には搦手の大将依田源八兵衛弘綱は合図の時刻になりければ、久奴井の柵際に推し寄せ、追いつ返しつ戦うたり。蝦夷方には、休歩左・孟志貴・喝魔貴、一手になつて防ぐ所に、仮墨太より敗軍の蝦夷人共逃げ来つて、勢奈瓦の合戦真最中に仮墨太の本城へ思いもよらぬ倭兵押し寄せ、ここかしこに火を掛けしが、折しも悪風炎を吹き仮墨太、一時の火となり、ついに敵城を乗っ取り、首領加金須も行方知れずという。休保左を始めこの手の兵共、この由を聞きて、大いに驚き、宇宛比殺されたれば、とても叶うまじと勢奈瓦と一つにならんと、我もくぐとこれもまた勢奈瓦を指して逃げ散つたり。これによって、依田・備前・増尾等なんの苦もなく久奴井の敵を追い落とし、続いて仮墨太へ攻め入らんとす。ここに首領加金須は放々、勢奈瓦へ逃げ来りしが、合戦半ばなりければ入らんとすれば敵道に満ちくたり。救わんとすれども力なし。とやせんかくやせんと途を失いついに忠衡が陣へ使を立て、降参をぞ願ひける。忠衡これを許し引鉦を打つて軍を退けしかば、勢奈瓦には西仮波・孫魔志・

雨綿破以下の兵共、加金須降参の上は是非なくおのおの人質を出し降参しければ、忠衡これを許し搦手へも云い送り、諸大将皆みな仮墨太へ到れば、仮墨太にははや、伊勢三郎城に入り替わりて、忠衡・弘綱を始め、黒井・備前・増尾等を迎えたり。泉三郎仮墨太を点検し民を撫育し、急ぎ上ノ国へ使を遣わし、勝軍の次第を注進し「首領加金須降参し、仮墨太を明け渡したり。急ぎ御駕を回らさるべし」と義経を迎え奉りける。

義経、仮墨太に到つて人民を撫す。

上ノ国には義経の武威を以て民を従え給うに、草木の風に靡くが如し。太流魔意の首長喜留満・勢太奈伊の首領久利満も戦わざるに従ひける。かかる所に、六月十日余、泉三郎忠衡が使者として、海満林、上ノ国に帰り来たり義経に謁し、勢奈瓦・久奴井より仮墨太を攻め取り、首長加金須、降参の由を注進し、「かねて約せし事なれば、志夫砂理の合戦心許なし。直ちに仮墨太の勢を引率し、志夫砂理へ行かんと存じ候えども、仮墨太に然るべき大将なくては心許なし。ひとまず君巡見の為御駕を回らせ候わば、いよいよ人民帰伏仕らん」と申しければ、義経やがて有り合う郎従、亀井・鈴木・片岡・佐藤等を召して商議ありて、鈴木・亀井は上ノ国の留守と定め、片岡八郎弘常・佐藤三郎義信・同四郎経忠並びに上ノ国の砂牟印を召し連れ給ひ仮墨太を指して到り給う。海満

林は向導なれば先陣に進みけり。ほどなく日を経て、義経、仮墨

太に着き給えば、泉三郎忠衡を始め、依田弘綱・伊勢・備前・黒

井・増尾等大きに悦び出迎え、まずく城中に入り給えば、首領

加金須および仮墨太に名ある者悉く御目見え仕りける。その者共

には西加波・休保左・孟志貴・孫魔志・雨綿破・羯魔貴・久利満・

火宇雷・魔久連・馬勢留・金魔志等なり。義経日本より秋田が送

る所の米五十俵を仮墨太の人民に施し、徳を以て懷け給い、この

度仮墨太を討ち取ったるは、伊勢三郎義盛第一の功なりとて、則

ち伊勢三郎にこの地を預け給い仮墨太の守護となる。さて志夫砂

理の丹呂印は大敵なれば、熊井・秋田が合戦の程心許なしとて三

手に分けて、加勢の軍兵を向けらる。まず一手は依田源八弘綱を

大将として、仮墨太の加金須・孫魔志・雨綿破等が勢を合わせて

千余人、これを追手と定め、また一手は片岡八郎弘常を大将とし

て仮墨太の久利満・西仮波等が勢を合わせ千余人、これを搦手と

す。また一手は増尾三郎兼邑を大将とし、仮墨太の休保左・孟志

貴これに従う。なканずく増尾三郎はいまだ若年なればとて、海

満呂・海満林をこの手に属せられ、これを遊軍と定め弱き方を救

わんとこの手にも千人を従えたり。三方の勢、都合三千余人、仮

墨太を討つ立ち志夫砂理指してぞ急ぎける。義経は泉三郎忠衡・

備前平四郎・黒井次郎・佐藤兄弟・砂牟印を御供にて、上ノ国へ

目出たく凱陣し給いける。

## 卷之七

秋田尚勝、志夫舎理を攻る。

さる程に、秋田次郎尚勝は搦手の大将として羯余人の軍勢を従え、夜を日についで急ぎければ、志夫舎理より五十里此方なる郡奴という所にぞ着きにけり。尚勝は今年まで二十年来、身を苦しめ、何とぞ本望を達せんと思ひ結いたる事なれば、追手の勢を待ち合わすに及ばず、一攻め攻めんと急ぎに急いでぞ攻め近づく。志夫舎理にもこの事隠れなかりければ、首領丹呂印、属従を集めて商議をなしその用意をぞなしにける。まず丹呂印が弟吉利英という者に二千余人の雑兵を従え、久利麻という山の際に出張させたり。この手下の強兵には仁志麻留・羌奴貴・阿羌夷とて、志夫舎理に隠れなき勇者なり。また一方は宇満留を大将として、仮甫乱・久麻呂・阿金須という勇将、これに従い雑兵共に二千余人、未角壺志の本道より敵を半途に迎えたり。秋田が兵五百余人、備もなく攻支度も調えず無二無三に討つて掛かり、宇満留が兵二千余人に駆け合わせ火花を散らして戦いける。もとより秋田が兵は松前蝦夷の者共多かりければ、皆微弱にしてなじかは以て志夫舎理の勢



に及ぶべき。ただ一息に衝き崩され四角八方に逃げ走る。大将秋田次郎尚勝は安からぬ事に思い、馬乗り回し、士卒を下知して「返せ、返せ」というままに、敵の大將を目掛け討って掛かる。蝦夷の勇将阿金須、その丈七尺ばかり、面の色黒く、眼の光は星の如く、髪鬢左右に分かれしが、蝦夷の甲冑に身を固め大太刀を抜きて振り回し、当たるを幸に切って回る。秋田次郎も馬上の達者日頃手練の太刀抜き翳して渡り合ひしばし挑み戦いしが、尚勝苛立つて討つ太刀にさしもの阿金須受け兼ねて逃げんとするを、馬上より畳み掛けて討ち付ければ、冑の真向打ち破られ、即時に仆れて死にたりける。仮甫乱・久麻留これを見て左右より射手を揃え、雨の降るごとくに射掛くる矢、さしもの秋田も馬を射られ、鎧の隙間に射付けられ、毒矢に苦しみ矢を抜いてかなぐり捨て、かねて用意の葉を擦り付けなどして、少し退りて見えたる所へ、思もよらぬ久麻の山際より、吉利英が二千余人、矢を射る如くに駆け来り、右往左往に突き掛くる。この勢に駆き立てられ、秋田が雑兵われ先にと逃げ惑い、討たる者数を知らず。さしもの秋田も堪り兼ね、未角菴志指して引き退く。敵もさのみ長追いせざりける。これによって、未角菴志に陣を置き敗軍の士卒を集め後陣の追手を待ち居たり。秋田次郎心は矢長に思えども、今日の初度の合戦に打ち負けし雑兵を数うるにあるいは討たれまたは行方

知らず、落ち失いて、五百余人と聞こえしも百には過ぎざりける。

頼然、伊和奈意に戦死す。

ここに、武蔵坊弁慶・民部卿頼然は白紙鼻より兵船十艘に取り乗り、志夫舎理の西なる伊和奈意という所に追々に着船せり。折しも日和よく、陸の秋田が勢に十日ばかりも先達つて到着せり。然れども、陸の味方を待ち合わせ三方一時に志夫舎理を攻め討たんとわざと海上に泊りせしが、頃日搦手の秋田が勢、志夫舎理に着くと等しく、熊井が勢も待ち合わせず、即時に押し寄せ未角菴志の平原にて一戦し、多勢に無勢、敵わねば秋田次郎大いに打ち負け、未角菴志の浜辺に引き取り生死を知らずと聞こえければ、弁慶・頼然大いに驚きあるいは秋田が拔駆せし事を怒り、陸地の追手熊井が勢は「いまだ一騎も来らざるに、秋田次郎敵を侮り、初度の軍に敗を取りたり。悪き秋田が振舞かな。然りといえども、これを見捨てなば味方の弱くなれば、秋田を救わずんばあるべからず」と弁慶自ら三百余人の雑兵を引率し、未角菴志へ加勢の為にぞ打つ立ちける。頼然は二百余人を従え伊和奈利の浜辺に堅固に陣をぞ備えける。かくて、志夫舎理には、首領丹呂印、昨日の合戦に勝ち勝ち敵を追い退けしが、今は残る軍兵、なおも未角菴志にありと聞き、急ぎ討つて、日本の賊を生捕にせんと、また吉利英を大将として、秋田が陣へ押し寄せんとぞ謀りける。ここに

欧大意という所の首領加理元という者「日本人この地に渡り、志夫舎理の丹呂印と合戦し、大いに打ち負け未角耆志へ逃げ走り浜辺に陣取ったり。また伊和奈意の海上より倭賊、軍勢を催しこれも浜辺にあり」と聞きければこの儘にて差し置かばもし日本人志夫舎理を攻め抜かば、災いといひにこの地に到らん、しからば丹呂印に好はなけれども、外国の賊を追い退け、勢に乗らば志夫舎理をも攻め取らん」と深く巧みて軍勢を催しける。この加理元は丹呂印と領地を互に競り合い、つねに合戦止む時なかりけり。時にその勢二千人、加理元自ら大将としてかの頼然が控えたる伊和奈意へこそ押し寄せけれ。民部卿頼然は二百余人の軍兵を従え、浜辺に陣を堅めて居たりしが、加理元が二千人の強兵共音もなく押し寄せて鬨を咄つと上ぐるや否や、矢を射る事雨の如し。頼然も油断はせざれとも、思い掛けなく欧大意の勢に寄せ掛けられ心得たりという儘に、馬引き寄せ四角八方に乗り回し、「あれ、打ちとれ」と下知をなし敵を馬の蹄に掛けんと揉んだりける。この伊和奈意は海辺にして岸高く峰聳て、巖石多く、平遠ならざる地なれども、加理元が兵、歩行立にて剛強なれば、いかなる悪所も厭いなく、得物を取り持ち当たるを幸に切つて回る。味方の勢もここを先途と防ぎ戦えども、松前・江刺あるいは志魔母伊・久魔伊志等の端蝦夷の者共なれば、敵と較ぶれば大いに味方は劣りしかば、

頼然苛立って「われ自ら戦わずんば、勝利をうる事あるべからず」と思い、いかなる悪所も嫌いなく、切つて回りければ、この頼然に向かう敵一人も生きて逃るはなかりける。頼然その日の装束には唐綾の直垂に紺糸威の鎧を着し、同じ毛の冑の緒を締め、二尺有余の太薙刀を携え夏毛なる馬に打ち乗つたれば、天晴大将ぞと見えにけるが、余りに厳しく働きしが運の極むる所やらんとある岸に馬を乗り損じ遙かの谷へ馬とともに真逆さまに落ちて跡形もなくなりたりしは無残なりける有様なり。かく大将を失しかば、なじかは以て堪るべき。もとより松前蝦夷の仮武者なれば、あるいは討たれまたは逃げ散つて、二百余人ありつるも、この一戦に打ち負けて、残る者こそなかりける。敵は思う儘に打ち勝つて、勢いいよいよ盛になり、欧大意指してぞ引き取りける。惜むべし。頼然は君に仕えて忠をなし一度も不覚を取らざりし身なりしが、今日いかなる日やらん。図らざりし難に逢いし事惜むにもなお余りあり。その後年を経て義経未曾久を取り給ひし時、この地にて民部卿頼然が霊を顕わしけるにより、土人神と祝い祭りけるとなり。義経を後に神と祭り、ギクルミ、オキクルミという。蝦夷語にギクルミは義経なり。オキクルミは判官なり。またライグルというは頼然の事なりとぞ。今地名に来年鼻というは頼然生害の地にて、この伊和奈意の浜なりとぞ。

熊井忠基、志夫砂理に大いに戦う。

末角壹志の弁慶が陣へ敗軍の兵共来りて告げて曰く。大将頼然死したるによつて伊和奈意の営は敵に奪われたる由を語りければ、武蔵坊弁慶大きに驚き引き返さんとする所に、秋田次郎敗軍の士卒百余人を集め、初度の合戦に打ち負け弁慶と一緒にならんと逃げ走る。これによつて弁慶も左右を救う事能わず、暫く末角壹志の平原に野陣して、秋田尚勝とともに種々商議をぞなしにける。

しかる所に追手の大将熊井太郎忠基は道中にて所々の部落に遮る者あつて、これを攻むるに暇取つて、思ひのほかに搦手の勢に遅れども、二十日ばかりを経て末角壹志にこそ着きにけれ。弁慶・尚勝大きに悦び、この程の合戦に味方大いに敗軍し頼然も不慮の死を遂げし由を語りければ、熊井を始め鷲尾・駿河、おのおの大きに驚き、さて評議に及びまず二手にぞ分けにける。一手は熊井忠基、大将にて秋田尚勝これに属して三百余人、一手は武蔵坊弁慶を大将として鷲尾義久・駿河清重これに従い三百余人、能魔奈意という所に陣を取つて、まずまず頼然が敵なれば欧大意の残兵、伊和奈意に控えたるを攻め討つて、伊和奈意の営を取り返さんとぞ謀りける。欧大意の加理元は伊和奈意の一戦に勝ち伊和奈意に雑兵を残し置き、直に末角壹志を攻めんと謀りけるが、志夫舎理より欧大意を攻めるなどの風聞ありければ、いつしか聞き怖

じして、伊和奈意の軍兵共みなく、欧大意へぞ帰りける。これにより熊井・弁慶等再び軍議あつて志夫舎理を攻めんと計る。丹呂印は敵に新手の加わりたる由を聞きて、また吉利英に千人の雑兵を添えて上軍とし羌奴貴に千人の雑兵を付けて下軍とし、左右より討つて出でさせ、久利魔の山際に引き込み奇術を行い、日本人を生け捕らんと深く読みけるとなり。寄手の大将熊井太郎忠基は究竟の強弓なれば真先に馬乗り出だし敵を目掛けて射掛くるに、熊井が矢先に向かう者一人も生きて帰るはなかりけり。さる程に敵も味方も入り乱れ、追手・搦手一時に合戦始まつて、関の声・矢叫の音天に響いて夥し。かの末角壹志の渺々たる原野の平場において火花を散して戦いけり。敵の大将吉利英、時分はよしと思う頃左右の手を上げ眼を張り口より黒煙を吐きければ、忽散乱し陰々として雲霧の如く暗夜の軍に異ならず。敵一人も見え分かず。後陣に控えし下軍の大将羌奴貴の髪を振り両手を組んで何やらん牛の吠ゆるが如く叫んで手を解けば、これも忽ち形を隠したただ喚き叫ぶ声ばかりにて散々に打ち散らす。味方の雑兵大きに恐れわれ先にと四角八方へ途を失うて逃げ散りけり。これ則ち蝦夷の幻術、胡砂吹・芝隠という物ならん。かかる奇術に驚かされ、大いに敗軍し思はず味方の諸大将を始め軍兵共、五里ばかり引きたりける。これによつて討たる者数を知らず。されども味方の運や

強かりけん。敵の謀りし久利麻の方へは一人も逃げざりけり。

熊井太郎忠基・武蔵坊弁慶を始め、鷲尾・駿河等思い掛けなき奇術に遭い、大いに討ち負け、無念に思っているが、ようやくに敗軍の兵を集め、末角壱志の浜辺に寄り集まり暫く息をぞ休めける。秋田次郎もかねて胡砂吹、芝隠は聞き馴れて覚悟の事なれども、かくまでにはあるまじき物をと始めて敵をぞ恐れける。その時、熊井太郎が曰く。「敵奇術をなすといえども合戦半ならざればこれをなさず。然れば今度においては味方の雑兵は後陣に備え、馬上の武者は真先に駆け出で、敵の射る矢は何程の事のあらざれば、馬上より敵を見澄まし選み討ちに大将たる者を射て取るべし。これ上策ならん」と種々計策をぞ回らしける。さしもの弁慶も敵の奇術に形を見失いしには詮方なくぞ思っている。かかる所に敵はや志夫舎理へ引き取りたりとありければ、しばらく末角壱志に営を固め敵を味方の営に引き請けんとぞ謀りける。

熊井忠基、羌奴貴を射る。

日本の諸将度々の合戦に討ち負け大いに氣を落とし、いかがはせんとするところへ、仮墨太より加勢の為、志夫舎理に向いし、依田・片岡・増尾、三方の勢三千余人、追々に末角壱志に着きければ、弁慶を始め熊井・秋田・鷲尾・駿河大いに悦び、今はこの勢を以て敵を討たん事心安しと、勇み進んで末角壱志に諸大将寄り

集まり商議に及びまた改めて手分けをぞなしにける。秋田尚勝が曰く。「敵は奇術をなし、その上端蝦夷に較ぶれば雑兵も大きに強勇なり。殊に頃日の合戦思い掛けなく欧大意より伊和奈意を攻めたる故に頼然を失うたり。今は近隣の部落を悉く従え後に患なくして志夫舎理を惣攻にすべし」という。依田・片岡・増尾等「某等は新手にて候えども、この地の向導は知らず。いかにも上策に付いて合戦をいたすべし」といえば、熊井太郎も弁慶も秋田が言を然りとす。これによつて秋田次郎尚勝・片岡八郎弘常一手となり仮墨太の久利満・西仮波これに属し、その勢千余人、八十里ばかり東の方志利不加という所に川を前に隔て陣を張る。武蔵坊弁慶は依田弘綱が勢と一手になり加金須・孫魔志・雨綿破等に従え一千余人、伊和奈意の頼然が旧営浜辺に陣を張る。末角壱志には熊井太郎忠基・鷲尾三郎義久・駿河次郎清重・増尾三郎兼邑が勢と一手になり、海満呂・海満林・孟志貴・休保左これに従い、千羯人備えを固め、近隣の部落を攻め落とし、志夫舎理・欧大意の通路を断ちて攻め寄せんとぞ謀りける。さる程に志夫砂理にはこの程の合戦に毎度討ち勝つといえども、日本勢退かず、なおも新しの加わりたる由を聞き、さらばまたこなたより押し寄せ追い散らさんと今度は丹呂印自ら中軍の大將となつて、千余人の雑兵を従え、弁慶・弘綱が備えたる伊和奈意に押し寄せる。また一手は

吉利英を大将として、これも千余人の雑兵を引率し、秋田・片岡が備えたる志利不加に押し寄する。一方は羌奴貴を大将として千余人の雑兵を引率し、熊井・増尾が備えたる末角壺志の本陣に押し寄する。さる程に三方一時に志夫舎理を、打っ立って攻め近く。日本の陣にはかねて敵の寄するを待ち請け、今度は軍兵も互角なれば「敵奇術をなすとも味方は陣を守って備を乱さず、選討に大将を討ち取るべし」とかねて熊井が謀にぞ従いける。なかにも末角壺志には熊井太郎・増尾三郎・鷲尾三郎・駿河次郎、四人の大将、海満呂・海満林に本陣を堅く守らせ、仮墨太の孟志貴・休保左を左右に立て、敵寄るや否や四人の大将真先に馬を駆け出だし、狙い澄まして放つ矢に敵を討つ事数を知らず。敵の大将羌奴貴は海獺の皮の甲冑を着し、蝦夷太刀の五尺ばかりなるを抜き持ちて、一際優れし大男、真先に進んだり。熊井忠基「これこそ良き敵ござんなれ」とよつ引いて放つ矢誤たず、羌奴貴が真甲に射付けたり。なじかはもって堪ゆべき。幻術を行う隙もなくまず一番に討たれにける。これを見てこの手に属せし仮甫乱・阿羌夷ここを先途戦いけれども、四人の馬武者に駈り立てられ討たる者こそ多かりけれ。されども敵も猛将多くして、この合戦いつ果つべきとも見えざりける。また伊和奈意へ押し寄せたる惣大将丹呂印、敵も味方も入り乱れ戦真唯中にまた例の黒煙を吹き出だし

ければ、雲霧の如く隠々として敵も味方も前後左右に人影も見え分かず。さしもの弁慶・弘綱も大崩れになりて士卒の討たる事数を知らず。なかにも依田弘綱が雑兵諸共二十里ばかり逃げ退きける。弁慶は伊和奈意の陣を堅く守って破られずといえども、もとより味方は蝦夷に駆集勢なれば皆散々になりて残る兵多からず。この手の軍も負軍とぞ見えにける。また吉利英は志利不加へ押し寄せしが、この処は片岡八郎・秋田次郎陣營を堅固に守り、互に河を隔てて遠矢に射立て、暫しあしらいおりしが、敵の大将吉利英怪しげなる術をなすよと見えしが、今まで千余人と見えし勢いづくへ隠しけん、残り少なになりける。秋田・片岡下知をなし、雑兵に河を渡させ、無二無三に敵の陣に切り入りたり。なかにも片岡八郎真先に河を渡して攻め掛かる。久利満・西仮波続いて川を渡しけるに敵いつの間に川をこなたに渡りけん。味方の陣に逆寄して当たるを幸いに切つて回る。秋田次郎ここを先と防ぎ戦いけれども、吉利英奇怪の術をなし。ここにあるかとすれば忽形を見失い、真黒なる霧の如くなる物を吹き出だし、東西を知らず。今度も大いに散軍し、士卒はわれもくと逃げ走る。敵は大いに勝ち勝ちけれども大将吉利英乱軍の中にて深手を負いければ、雑兵に介抱せられ、志夫舎理にこそ引つ取りけれ。これに氣を得て片岡八郎馬立て直し戦いしが、味方も過半は討たれあるい

は手を負い大きに疲れければ、ついに敵わず西仮波・久利満諸共に志利不加の陣へ帰る事あたわず、末角壱志の熊井が本陣指してぞ走りける。秋田次郎は散軍の士卒を集め志利不加川を前に当て陣を立て直し味方の士卒を数うるに、手勢わずかに二百人には過ぎざりける。三方の合戦に敵を討ち取る事五百余人、味方はいは逃げ失せて末角壱志の営にはわずかに五百人ばかりぞ残りける。されども熊井太郎、敵の大將羌奴貴を討ち取りたれば、大いに悦び敗軍を集め備をなして堅めたり。

#### 海満呂・海満林、志夫舎理を夜討にす。

熊井忠基が一矢に敵の剛將羌奴貴を射殺すといえども、とかく味方敗軍して勝利なければとやかく評議に及びこの地の案内を知りたる海満呂・海満林が計り謀こそしかるべしと一同し、同月二十七日、海満呂・海満林雑兵五百人を引率し末角壱志を忍び出で志夫舎理指して打ち立ちける。志夫舎理には羌奴貴、討死すといえども、合戦勝利ありければ、士卒を労い、いよいよ堅固に備を立ててぞ守りける。夜半頃に海満林兄弟、五百人をそれぐに分けて城の口々に備えさせ鬨を咄つとぞ上げにける。志夫舎理の城中かねて用意やしたりけん狼煙を挙ぐると見えけるが、諸方より雑兵一度に夥しく集まり海満林兄弟を始め士卒を中に取り込めて、五重七重に囲み込みける。さしもの兄弟、謀大きに相違し敵の不

意に仰天し、とやせん、かくやと思えども、所詮一人を以て百人に当つるとも、中々十分の一に敵すべきにもあらざれば、しかし術をなして目をくらまし手足を悩まさんとて、兄弟一同に文を唱えアシクルの術をおこないける。このアシクルの術とは蝦夷にてアシというは夜なり。クルとは部衆という事にて、この術をおこなう所の地、暗夜の如くなるより名付けし事にて、手足を悩まし目を眩き耳癢い、いかなる魔魅の類といえども、その術に中たる時は形をも潜め出ずる事あたわず。然れども、この術、生涯に一度ならではおこない難き術なれば、これにて兄弟の者もおこなわざりしに、今夜の合戦この兄弟が身に掛かりければ、何とぞ計策の如く勝利を得ばこれこそ一生の思い出と巧みければ、兄弟今夜はこれをぞおこないける。これによつて蝦夷の剛將一人も働く事あたわず。かくて城中よりは一方の固を開きて士卒出で逢いけれども、皆々雑兵にて、海満呂・海満林も敵と目指して、戦い肯わんずる者もなければ、切り払い薙ぎ立て城中にこそ押し入りける。然るに、城中には目指す大將等はかねて設けし抜け穴より逃げ散つて一人も見えざりける。かくて城に火を掛け出でんとするに、丹呂印が術をもつて、その火物に移らざりけんば、詮方なく逃れ出で、味方の勢を集めひとまず末角壱志指してぞ引き取りける。

卷之八

羌奴定、熊井及び五將を擒にす。

さる程に志夫砂理の城中には、首領丹呂印、諸將を集めて商議をなす。頃日、合戦に伊和奈意・能麻奈意両所にて日本勢を討ち取り、大いに勝利を得るといへども、末角壱志の一戦に志夫舎理第一の強勇羌奴貴、熊井が矢に当たり討死し、また志利不加にて吉利英、深手を負いたりければ大に力を落とし、いかがはせんと評定す。仮甫乱・仁志麻留等を始めとし、誰ありて進む者もなかりけるが、羌奴貴が娘羌奴定という者あり。首領丹呂印に願を立て「妾、女の身なりといへども、父を討たれ外に頼の親類もなく候えば仇を討つて父が墓に手向けたく候。願わくば妾に三千人の兵を借し給わるべし。今日寄する所の大將は日本に隠れなき勇將熊井太郎忠基とて強弓の上手にて、妾が為には父の敵、先陣に進んだる両將は、奥蝦夷、未曾久の者なるが、頃日日本人に属従し所々の合戦に功を顕したりと聞く、海満呂・海満林という兄弟の者に端蝦夷、仮墨太の降將休保左・孟志貴・西仮波・久利満この七人の大將、千人の軍兵を率し末角壱志に陣取りしが、明日はこの所に押し寄せ候由、今日降参の者あつて詳しく相知り候」といければ、丹呂印が曰く。「汝、女の身にしていかに剛なりといえ

どもかかる大敵を退くる事心許なし」といけるが、また思案して云うよう。「汝が父羌奴貴死し、わが弟吉利英は志利不加の合戦に深手を負いて生死を知らず。しかる上はわが術を伝え置きし者、汝ならではこれなし。所詮、奇術にあらざれば敵を退くる事難し。しかれば汝の望みに任せて汝に三千人の兵を与うべし」とて、仁志麻留・阿羌夷・久麻呂という剛勇三人を添えて、羌奴定を大將として末角壱志に到り、敵の寄せぬさきにこの方より逆寄せにすべし」といい含め四手に分かつて押し寄せたり。この末角壱志は山もなく川もなきただ眇々たる平砂の地なりければ、「平場の合戦快し」と蝦夷の強勇、おのおの弓矢・得物を携えて、われ先にとぞ進みける。末角壱志には大將熊井太郎忠基・海満呂・海満林・休保左・孟志貴・久利満・西仮波等の勇將、おのおの一所に集まり軍議しける。熊井忠基諸將に向かつていけるは「昨日の合戦、敵の剛勇を数多討ち取つたりといへどもついに味方敗軍せり。然るに今日の合戦は馬武者とては一人もなし。馬上はわれ一人なれば、とかく昨日の如く大將と思しき者を選打に討つよりほか別に方便もあるまじ。敵手分けをなして寄するとも味方は今日は一陣に厳しく備え敵を随分陣際に引き寄せて、おのおの討つて出ずべし。必ず長追して平場に出でてまた幻術に驚くべからず。かの幻術をなす者丹呂印ともに五三人に過ぎずと聞く。ことに昨日の合

戦に羌奴貴を確かに討ち取りたりと覚えれば、今日寄せ来るは大方、丹呂印なるべし」といえば、海満呂兄弟が曰く。「夜前敵の城中に夜討して様子を見るに、はかばかしき大将も見えず」というところに味方の斥候二人、敵の陣より馳せ帰って申しけるは、敵は夜前の夜討に抜け穴より忍び出で、すぐに亜墨母意という所よりただ今この所へ寄せ来る大将は女にて丹呂印が愛妾羌奴定とて羌奴貴が娘にて候が、三千人の軍兵を引率し四手に分けて寄せ来たり候。もつとも、この女も胡砂吹・芝隠の術を得候由を申す。熊井聞きて「夷女の働、何程の事あらん。今度は味方小勢なれば平場の合戦を望まじ。この要害に待ち請けん」といまだ言葉も終らぬ所に、四方に鬨の声聞こえ、はや矢を射る事雨の如し。歩行立の蝦夷人なれば、歩むに足音なしといえども、かねてその備をなしたれば大将熊井太郎真先に馬を乗り出だしかの幻術をおこなわぬ先に大将羌奴定を射落さんと敵より射る矢を事ともせず敵の大將を目掛けて駆け回れども、羌奴定は歩立にて甲冑を帶したればいずれ大将の分は見えざりける。その隙に羌奴定かの胡砂吹の術をなしければ、にわか霧の如くなるもの雲の如く霞の如くに掛かり、一面の平地、敵も味方も見えざりける。されども熊井太郎下知をなし、「かねて覚悟の事なれば驚く事あるべからず。必ず備を崩す事なかれ」と下知すれども、雑兵共方角を失ない同志討

を仕出だし敵も味方も入り乱れ、難なく平場へ出でにける。敵は地理の案内を知りたる事なれば、駆け引自由にして戦いければ、味方に討たる者多かりける。胡砂吹も暫時の間に消ゆればもとの白昼となる。熊井太郎は馬駆け出だし、かの胡砂吹の起りし方を目懸け追っ掛ければ、海満呂・海満林・西仮波・休保左・孟志貴もとより蝦夷の逸足なれば、熊井に続いて追い掛くる。羌奴定も叶わじと思いきん雑兵諸共久利麻を指して逃げ走る。やがて追っ付き射掛ければ、羌奴定樹木の隠に入るよと見えしが、忽形を隠し、辺りに有合う人も見えず、暫くあればまた頭れたり。熊井・海満呂今日を限りと追い詰めてこの女を得ずんばと何国までも追っ駆けしが、とある徑に行き掛かる。また形を見失いければ今はこれまでひとまず元の路に引き返さんとする所に、左右に野も山も敵満ち／＼て、雨の降る如くに射掛くる矢に、熊井が頼み切つたる名馬の鼻を射られければ、起き上がったて歩行立になつて四方を見るに、また黒煙隠々として、さながら暗夜に異ならず。熊井を始め、海満呂・海満林・西仮波・孟志貴・休保左も帰るべき路を失い南無三宝と思ひしが、なおも続きし雑兵に下知をなし、ただ一筋のこの道を打ち散らして通らんと、黒煙満ち／＼て、暗さは暗し敵には目当ありて、四方に鬨の声耳を轟かす。矢の来る事板屋の霰に異ならず。大将を始め、雑兵に至るまで、矢を負わ



ぬ者なかりける。なかにも先に進みし飯墨太の孟志貴・休保左途中に大きな穴数多あつて、まず一番に落ち入りければ、穴の中には敵ありてやにわに取つて押さえて生け捕られける。これを跡に知る者なく、暗さは暗し路は見えず。雑兵共この落し穴に入りし者、数を知らず。惜しいかな。熊井忠基を始め、海満呂・飯墨太の西仮波、この五人の大将、この処にて生捕にこそなりにけれ。海満林はいかがして逃れけん、難なくこの所を抜けて味方の陣へぞ帰りける。海満林がほかこの道へ入りし者、帰る者一人もなかりけるとなり。羌奴定は思うままに謀り仰せ、大きに討ち勝ち百人ばかりの生捕を先に立て志夫砂理にこそ引つ取りける。目覚ましかりし有様かな。この落穴は羌奴定が父羌奴貴が初度の合戦に幻術をおこない、途に迷わせ、この謀を設けて生け捕らんと工みしに、熊井を始め、秋田次郎その外人一人も久利麻の径へ行かざりしに、また今度羌奴定かねて父が拵え置きたる久利麻の山際の径へ敵を引き寄せ、かの落穴にて敵を一人も残らず生け捕らんと百余り穴毎に人を二人三人五人ずつ忍ばせ置きしを知る者さらになかりけり。さて末角壱志の陣には飯墨太の久利満ばかりにて、大将たる者一人もなく、千余人の軍兵も今日の合戦に打ち負け、二百人ばかりになり弁慶が伊和奈意の陣と一手にならんと落ち行きける。秋田二郎も片岡に離れしかども志利不加川を前にして陣

取しが、末角壱志より敗軍の勢逃げ来たつて、昨日の大合戦と前夜の夜討に今日の合戦みなく、味方大いに討ち負け、あまつさえ大将熊井忠基を始め鷲尾・駿河・増尾・海満呂・孟志貴・休保佐並びに飯墨太の久利満・西仮波も、今朝の合戦には末角壱志の陣にありしが、今は皆々討ち死にせるや一人もなく、早敵も志夫砂理へ引き取りたりと聞きて、秋田次郎おおいに驚き力を落とし、なかにも久利満・西仮波は昨日にて、この所にありしが、片岡ともに行方知れず思いしが、「末角壱志の熊井が陣と一手になりしが、今日の合戦に討ち負けたりと見えたり。しかれば、伊和奈意に弁慶が勢より外は、頼とする者なし。ひとまず上ノ国へ加勢を乞わん」といいけれども、程隔たりし事なれば、いかがはせんと大いに気をぞ落しける。

義経・忠衡、志夫砂理に到る。

志夫砂理には羌奴定、末角壱志の一戦に大いに討ち勝ち、大将熊井太郎及び海満呂・西仮波・休保左・孟志貴の五将、その外雑兵百余人を生け捕り、討ち取る者数を知らずと。首領丹呂印大きに悦び、「今は心安し。この勢に日本人を追い退けん」と勇み進んで見えにける。元来蝦夷の人情強惡の者なれば、情なくも熊井忠基及び海満呂・西仮波・休保左・孟志貴の五将を始め、百余人の生捕共、残らず志夫砂理の蝦夷が手にぞ誅せられける。惜しいかな。

熊井太郎忠基は究竟の精兵にて、義経に仕えて忠をなし、ことに蝦夷が地において敵の強勇羌奴貴をただ一矢に射つて高名を顕したる人なるに、運の尽くる所やらん。開興いまだ半にも到らざるに、敵の奇謀に落ち入りしは、惜しまぬ者こそなかりけれ。また海満呂は義経この地に始めて渡り給いしより海満林と共に、兄弟一緒に一度君臣の約を結び、何卒、未曾久を義経の手に入れんと、日夜心身を苦しめ謀をなしたる忠臣なるに、図らずに敵の擒となり誅せられしは惜しむべし、く。飯墨太の西飯波・休保左・孟志貴も共に加金須が手下にありけるが義経の武徳に帰伏し、この度の寄手に属し身命を軽んじ功名を立てんと二心なき者共なるが、かく、義経の片腕と頼み給いし、熊井を始め五人まで、やみく／＼と生け捕られ蝦夷が手に誅せられければ、行末いかにも思わぬ人こそなかりけれ。程なく寄手陣に、この事聞えければ、ひとまず、諸大将、一つになりて商議せんと、武蔵坊弁慶が伊和奈意の陣へぞ招きける。寄り集まりし人びとには、依田源八兵衛弘綱・秋田次郎尚勝・鷲尾三郎義久・駿河次郎清重・片岡八郎弘常・増尾三郎兼邑・海満林・飯墨太の加金須・孫魔志・雨綿破・久利満等なり。頼み切った熊井を始め五人の大将を失いし事なれば、人びと勇気を落しだれありて進み出る者もなかりしが、海満林は頃日の合戦に兄海満呂を羌奴定に生け捕られし事を無念に思い何

とぞして、この恥辱を雪ぎ、兄の敵を討たずんばわれ生きて何かせん。しきりに残兵を集め軍を進む」といへども、弁慶・依田を始め諸大将大いに制して「所詮、この疲れたる勢を以て、急に進んで勝利をうる事難し。この蝦夷を平定せん事、この一戦に限るべからず。勝つも負くるも軍の習、始終の勝こそ本意なれとて海満林を宥め、さて、残兵を数うるに、駈集勢なれば、頃日数箇度の合戦にあるいは討たれまたは逃げ散つて、今はわずかに五百人には足らざりけり。この儘にては敵この処へ押し寄せなば難儀なるべしとて、兵糧を船に積み、みなく伊和奈意の浜より兵船に取り乗つて羅計志利島という島まで引き取り、上ノ国へ飛脚を立て加勢をこそは相待ちけれ。さる程に上ノ国には義経・忠衡、志夫砂理の合戦の様子心許なしと、日夜評議区々にて、さる五月熊井・秋田は陸地の大将となり、陸路を向い、弁慶・頼然は白紙鼻より海路を船にて向かい、その後飯墨太を討ち取つて、また飯墨太より、直ちに依田・片岡・増尾・海満呂兄弟、飯墨太の勇将数人を添えて加勢に遣わせしが、程隔たりたる処にて常に往来不由にて、その音信のなかりければ、今は心許なしとて鈴木三郎重家に人数五百人を属けて、志夫砂理へ遣わさんと商議ある所に、伊和奈井より飛脚到着して曰く。去る六月秋田尚勝、志夫砂理において初度の合戦に打ち負け、志利不加川という所に退き加勢を

待なく、弁慶・頼然、船手の兵を引率し、伊和奈意という処に着し、二度、末角壱志という所へ、弁慶・尚勝一手になりて、敵を引き請け合戦あり。然るに同時に欧大意の加理元という者、伊和奈意に押し寄せ合戦始まり、ここも味方討ち負け、あまつさえこれが為に頼然討死仕り候。かかる所へ熊井・鷲尾・駿河等到着し、能麻奈意・末角壱志の渺々たる原野にて大合戦あり。然るに敵の大將丹呂印並びに羌奴貴というもの胡砂吹き、芝隠の奇術をなし、数度の合戦味方大いに敗軍し士卒を失い、大きに諸將氣を落とし候所に、依田・増尾・片岡・海満兄弟、仮墨太より到着し今は勢強大になり、近日志夫砂理を攻め落さんと評議仕り候えども、頼然が討死、敵に幻術あつて、軍難儀にして、なか／＼仮墨太如きの夷賊にあらざる由を注進す。義経・忠衡、これを聞きて、大きに驚き、頼然を惜しみ給う事限りなく、かねて秋田が申せし如く、芝隠、胡砂吹の術にて難儀なる由、行末の合戦心許なし。我自らかの地に立ち越さん間、鈴木・亀井は上ノ国の人民帰せし者共なればこの地の留守と定め給い、九月二十五日出陣し給う。一手は義経大將にて佐藤三郎義信・同四郎経忠・砂牟印を従え給い千人の雑兵を引率し、一手は泉三郎忠衡を大將とし、黒井次郎景次・志摩母伊の満平須・久魔伊志の貴留志を従えこれも雑兵千人、都合二千人上ノ国を打つ立ち給い行路を急ぎ、程経て十月二十日余

宇計伊志という所に着き給うに、ここへ秋田次郎より上ノ国への飛脚に行き逢いたり。急ぎ様子を尋ね給えば「さんぬる七月、末角壱志・能麻奈意・志利不加三所同時に大合戦あり。中にも末角壱志にて熊井太郎忠基、敵の剛將羌奴貴を射落しけれども敵少しも弱らず、三方ともに味方大きに敗軍せり。その夜また海満呂・海満林敵の城中へ忍び入り夜討ちをせしに、返つて敵の謀に落ち入り大いに兵卒を損じたり。これに加え翌日また敵の大將羌奴貴が娘羌奴定という者、女なれども剛勇にて末角壱志に押し寄せさま／＼の奇術をなし、味方の諸將を悩ましついに熊井太郎忠基を始め海満呂・仮墨太の西仮波・休保左・孟志貴これが為に生け捕られ、末角壱志の営も破られ今は伊和奈意に弁慶が陣あるのみ。諸將みな散り／＼になりて甚だ難儀に候。急ぎ加勢を給わらずんば一人も生きて帰る者あるべからず」と息を切つてぞ告げたりける。義経・忠衡これを聞いて、大きに驚き給い「頼然が討死をさへ惜しみしに、頼み切つたる熊井太郎、敵の手に生け捕られ、然のみならず、海満呂、仮墨太の勇将三人まで失いし事、無念の至なり。たとえいかなる奇術をなすとも、蝦夷の者共何程の事あるべきぞ。志夫砂理を攻め破らずんばあるべきか。秋田が為には父が仇なり。わが為には今また頼然・熊井が現在の敵なり」と大いに怒り給い、駅路を急ぎ夜を日に継いで馳せ給う。

義経・忠衡、志夫砂理に大いに戦う。

程なく義経・忠衡途を急ぎ志夫舎理より百里ばかりこなたの伊曾也という所に到着ある。ここに暫く營を構え給う所に、また兵粮用意の爲とて追々白紙鼻より回船数多着岸せり。然るに弁慶を始め、依田・片岡・鷲尾・駿河・増尾し等羅計志利島にある由を聞き、急ぎこの島へ義経・忠衡、伊曾也まで到着の由を知らせければ、弁慶・弘綱以下の諸将大いに悦び急ぎ伊曾也に來会し、おのおの対面ありて志夫砂理合戦のていたらく、並びに胡砂吹き芝隠し等の幻術にて、度々の合戦敗軍したる有様、羌奴定という女、剛強にて熊井・海満呂等の五将、その外雑兵百人余を生け捕り、即時に誅せし由の物語、中にも秋田次郎は天を仰いで怒りける。義経・忠衡始終を聞いて、所詮かくの如くならば謀を以てするにあらずんば夷賊に勝つ事あたうまじ。まずぐ敵に忍を入れて敵の形勢を窺わんと志利不加・伊曾也・志麻奈意の三所に陣を取り、まず一方は泉三郎忠衡・秋田次郎尚勝・黒井次郎景次・志魔母意の萬平須・久魔伊志の喜留志並びに海満林を始めとし一千五百人、志利不加に陣をとる。一方は依田源八兵衛弘綱・駿河次郎清重・片岡八郎弘常・飯墨太の加金須・孫魔志・雨綿破・久利満等一千五百人、志魔奈意に陣取たり。また一方は大將義経の本陣にて、武蔵坊弁慶・鷲尾三郎義久・増尾三郎兼邑・佐藤三郎義信・同四

(二〇〇)

郎経忠・上ノ国の砂牟印等二千余人遙かに隔てて伊曾也に陣取りなをも敵の形勢をぞ伺いける。ここに欧大意の加理元は過ぎにし伊和奈意の一戦に討ち勝ちし後は、倭賊恐るゝに足らずとて大いに驕り勢強大にして志夫砂理へも敵すべき体に見えにける。日本の忍の者共、義経にかくと告げれば、義経聞き給い「これぞ究竟の事なり。なにとぞ志夫砂理と欧大意とを同志討させ、両虎挑む所を二つながら一つに取るは軍法の奥義なり」とて、人民に米穀・酒などを与え恩を見せて、様々の雑言・風聞をぞ致させける。案のごとく志夫砂理の丹呂印・宇満留という者に雑兵一千人を付属し欧大意へぞ押し寄せける。加理元大きに怒りわれ先に日本人を追いつけ、伊和奈意・末角志志の合戦に討ち勝ちしは、全くわが力なり。今又日本人来りて三処にあつて、近日押し寄するの沙汰あるに、何ぞ丹呂印われに敵するや」と大きに怒り、即時に人数を催し半途に出でて宇満留が兵と大いに戦うといえどもさらに勝負はなかりける。この事日本の陣へ聞えければ、泉三郎大いに悦びさらば、この隙に志夫砂理をひと攻め攻めんと義経・依田へも謀し合わせ十一月二十日余、志夫砂理にこそ押し寄せけれ。いつも蝦夷の習にて敵を城に引き請け戦うという事なく敵寄ると聞くや否やまた手分けをなし、飯甫乱・仁志麻留・乱計留等おのの軍兵を引率し半途に行き合い矢を合わす。日本勢はかねて謀り

し事なれば追い詰まりつつ戦いしが、急に引鉦を打って志利不加指して引かんとす。敵これに氣を得て大きに追い退けし心地して志夫砂理指して引きけるが、思い掛けなく秋田次郎、いづくより回りけん。帰る途にささて戦うたり。泉三郎「時分はよしぞ。続けや。者共」というままに、真つ先に馬駆け出だせば、黒井次郎・満平須・喜留志を左右に備えて、敵を中に取り込めんと、揉みに揉んでぞ攻めたりける。義経、弘綱もかねて合図の事なれば、この合戦に出で合わんとおの陣を発せられしが、百里余も隔たりければ、敵の有無をば知らざりける。志夫砂理より丹呂印遙かにこれを見て大きに驚き、「あれ、討たすな。者共よ」と下知をなし、手勢千人前後に随え無二無三に討つて出で秋田が勢の後方より中を割つてぞ駆けたりける。されども味方も今度は多数なれば、殊に大将義経も出陣し給えば、「千人が一人になるまでもこれを引くな」と諸大将下知すれば、いつ果つべきとも見えざる所に丹呂印「何やら怪しげなる事をなすよ」と見えしが一面真黒になり、霧の如くなる物一里四方にはびこり敵も味方も見え分かず。されども秋田次郎は初よりこれを心得五百余人真丸になつて味方の陣へ引き取りければ、この合戦にこそ味方に討たる者少なく敵を討つ事多かりけれ。義経も伊曾也より百里余の路をただ二時ばかりに駆け付け給いしが、かの胡砂吹を見給い急に進まんとし

給えども、弁慶大いに諫めて、大将たる御身、合戦の勝負はこの一戦に限るべからず。暫く軍の様を見給うべしといければ、尤もなりと同じ給い三十里ばかりこなたに野陣をすえて見物し給いしが、程なく敵も味方も自然に分かれて軍は止みにける。「この合戦は泉三郎が謀にて敵欧大意へ軍兵を差し向けたれば志夫砂理も軍兵少かるべし。味方は新手にて軍兵も互角なれば、敵半途まで寄せ来らば味方も討つて出で戦うべし。その時後方を包んで敵を城に入れ立てじ」と秋田次郎に雑兵五百人を属けて前日より伏せ置きけるが、手筈の如く図は外れざれども敵も用意したりけん、丹呂印、急に救うて術をおこないし故味方の三陣は程遠くしてこれを救う事あたわざりしとなり。

義経、陣法を蝦夷兵に教ゆ。

かくて義経は味方の營に帰えり給えば、忠衡・尚勝・生捕並びに降参の者を引き連れて義経の伊曾也の陣にぞ来りける。則対面ありて昨日の合戦、忠衡・尚勝が働をぞ感じ、厚く労われける。さて、忠衡・尚勝および弁慶・鷲尾・佐藤兄弟・増尾等あり合う郎従を御前に召され「昨日の蝦夷勢が軍の次第を見るに、おのおの剛強なりといえども軍法は知らず。ただ頼むものは胡砂吹き芝隠しなれどもこれ衆人なすにあらず。弓は日本に較ぶれば大いに尖ならず。また味方の雑兵も過半は蝦夷の駆集勢なれば敵と異なる

事なしといえども、その將たる者の下知によって雑兵、身体の如く自由なるべし。今寒国にて、しかも極寒に向かえば堅く營を守り、敵寄せ来らば謀を以て敗るべし。さなくば必ず味方より敵を討つべからず。敵を討つに時あるべし。味方の兵に陣法を教ゆべし」とて、諸大将に仰せて諸葛孔明が八陣の法を指揮せられける。その後は丹呂印と加理元と合戦度々におよび、討ちつ討たれつさらに止む時なかりけれども、却つて義経の三陣は静かなり。則ち今十一月の初より明くる二月までは、日夜軍陣の法を蝦夷の士卒に教えられ進退の自由ならん事をぞ謀り給いける。

## 卷之九

義経再び志夫砂理に大いに戦う。

庚戌の年も暮れて、明くれば辛亥の歳へ日本、後鳥羽院、建久二年。南宋、光宗紹熙二年に当たる。正月は義経・忠衡、志夫砂理の向陣にて年を越し給う。いまだ余寒激しければ敵一人も寄せ来らざれども、用心堅固に備え、日夜陣法を雑兵に習わせ、今はほぼ熟しければとて、二月八日義経自ら大将として、武蔵坊弁慶・佐藤三郎義信・同四郎経忠・増尾三郎兼邑を左右に備え、千人の軍兵を引率し、前後百人ずつを十組に分ち、残る雑兵千人を驚

(二〇二)

尾三郎義久に付けて、本陣に残し置き給う。また泉三郎忠衡は黒井次郎景次・海満林・萬平須・喜留志を従へ、これも人数百人ずつを一組とし、以上千人を十組に備えたり。秋田次郎尚勝は五百人を従え本陣を守る。一方は依田源八兵衛弘綱・駿河次郎清重・加金須・孫魔志・雨綿破等これも同じく千人を十組に分けたり。片岡八郎は五百人を従え、この手の留守となる。斯様に手分揃い、駆引・進退自由に調いければ、さらば押し寄すべしと二月八日まだ東雲の明けやらぬに忠衡の手の先陣萬平須、百余人、志夫砂理に押し寄せて、鬨を咄つとぞ上げにける。志夫砂理にはかねて用心厳しく堅めけれども、去冬の欧大意との合戦に士卒大きに疲れける。去年十一月以来は日本人寄せ来らず。その上今日わずかに百人余の鬨の声なれば、驚く気色少しもなく半途に出ずるに及ばず備えもなくして、得物を引つさげわれ先にと走り出でてぞ戦いける。味方は悉く五色の旗を一組一組に挿して、進退大将の下知に従いければ、一組引けば一組の百人入れ替わり、入れ替わりでぞ攻めたりける。この合戦に敵を討つ事数を知らず。味方には百に一二より、討たる者こそなかりけれ。義経は三方の陣を見渡し給い、遙かの後陣にあつて旗を回して下知し給う。始めの程は志夫砂理の兵共、事ともせざりけるが、次第に繰り引くに人数を入れ替へ、志夫砂理より志利不加・志魔奈伊までの百有余里

の間は野にも山にも青黄赤白黒の旗を挿して動かしければ、首長丹呂印遙かにこれを見て堪えかね、「あれ、討ち取れ」というほどこそあれ仮甫乱・仁志麻留・乱計留等各人数を揃えて突いて出る。丹呂印また羌奴定を召して「今日、日本人の軍立を見るに、いずれも進退度ありて駈引自由に旗を動かす。これを討つ事奇術にあらずんば難し。急ぎ汝行き向かつて敵兵に途を失わすべし」とありければ、羌奴定畏まり、雑兵千人を引率し、遙かに後陣に討って出ずる。先に進みし仮甫乱・仁志麻留、一陣崩せば一陣入れ替わる。いつ果つべきとも見えざる所に羌奴定が一千余人、一手になりて打って掛かる。義経の勢の中より右の方には佐藤三郎義信、生年いまだ十九歳、これも同じく百人の雑兵を後方に立てて駈け出ずる。中央よりは増尾三郎兼邑、これも生年いまだ十八歳、同じく百人の軽卒を従え真先に馬乗り出だし向かいたり。三人ともに二十歳に足らぬ血氣盛りの若武者なれば羌奴定が千人の兵の中へ駈け破らんとぞ進みけり。かかりければ羌奴定例の胡砂吹の術をなしければ、白昼なれども霧の如く、黒煙一面に立ち登つて、真の闇の如し。あたかもこれや誠に昔、黄帝蚩尤と戦い給いし時、蚩尤霧を降し味方の軍兵、方角を失いしも、かくやとあれど夥し。義経遙かに胡砂吹にて黒煙の立つを見給い、旗をもって下知をなし、左右に開き一陣に陣は崩るれども余陣は堅く備えた

れば、暫時の間、黒煙消ゆればかの胡砂吹の起こりし方を目当てして、また四方より討って掛かり起きれば開く。かくの如く士卒の駈引自由にして、進退途を失わざれば、いつ果つべきとも見えざりけるが、漸く夕陽西に傾き今朝よりの合戦に士卒も互に疲れければ旗をもって軍をまとめ、引鉦を打って引き取り給いければ、仮甫乱・仁志麻留続いて追っ掛けれども、羌奴定はや志夫砂理へ引き取りければ、仮甫乱・仁志麻留心ならずも雑兵に引き立てられその日の軍は止みにけり。

常陸坊海存、義経に遇う。

かくて、義経は本営に帰り給い泉三郎が陣に使いを立てて召し給う。これによつて、忠衡、秋田尚勝とともに義経の本陣に來りて、商議をなす。この時、義経の本陣は伊曾也なりけるが、あまりに程遠しとて伊曾也には片岡八郎を残し置き、要害の地なればとて末角壱志の熊井が陣せし旧営に入り給う。義経、忠衡及び諸將に向かつて宣いけるは「昨日の合戦互角なり。われ謀りしに違わず、敵は陣法を知らず無二無三に押し寄すれども、味方は法を守つて備を乱さず。しかれども敵奇術をおこなうによつて、味方の軍兵、方角を見失うによつて数度の合戦敗れを取りたり。かくの如くにては、敵を討つ事いつ果つべきとも思われず。その上兵糧運漕も不自由なれば何はせん」と評議し給う。忠衡が曰く。「敵の奇術も

大方味方に合点したり。今度においては謀を設けて討ち取るべし」と商議区々なる所に、上ノ国より鈴木・亀井が使として、上ノ国の馬全印という者向導にて備前平四郎成房並びに松前の桂呂仁が使、安呂由という者、日本秋田が郎徒堀尾新八忠辰、兵糧並びに名馬を多く連れて松前に渡海し上ノ国に到り、鈴木・亀井に對面しその後直ちに加勢の為此の処に來り候。その上常陸坊海存も日本より渡海しこの処へ到着の由を申す。義経・忠衡大いに悦び「名馬・兵糧を得るのみならず、常陸坊いまだ存命にてここに到る事、わが運命開くべき端なり」と悦び急ぎ對面あり。常陸坊海存は遙々とこの島に渡り、義経主従に巡り合い過ぎにし事共を語り合いてぞ悦びける。海存、義経・忠衡に向かいて申しけるは「某、過ぎにし文治五年閏四月、君高館を落ち給いし後、館に残り留まつて杉目行信・増尾兼房等と同じく寄手を防ぎ戦いしが、ついに行信・兼房を始めおのおの自害しなければ介錯し、館に火を掛け煙の紛に忍び出で、津輕の方へ志し君に追いつき奉らんとし、駒形嶺を通りし時、一人の老翁に行き逢いたり。その体異相にして、甚だ殊勝なりけるが、かの異人某を見て「汝に一術を教ゆべし。われに従つて來れという。某心得ず思えども、老人の体異相なればこれに付いて到るに、駒形の深山に到り、一つの岩窟のありける所に到り、一卷の書を某に授けて曰く。われはこの地に久しく住む

者なるが、わが命数限りありて、すでに天上に到らんとす。だれあつて、この処を守る者なし。汝われに替わつてここに居しこの書を見るべし。自然に神変不思議の術を得るべし」という。その時、某「われは主君に仕うる者なり。君を先へ落とし参らすれば、心許なし」という。異人の曰く。「汝、この処におらば、今より辛亥の歳三月必ず君に巡り逢うべし」という。これによつて、某、奇異の思いをなし、老人の教えに任せ、かの岩窟に留まり、日夜書を学びしが、夢ともなく現ともなく、程なく二春の星霜を経たり。しかるに過ぎにし正月津輕深浦の辺に到りしに、はからずも堀尾忠辰に逢い君ここに渡り給い今は上ノ国という所に居給う由を聞く。程なく遙々の波濤を凌ぎ松前に渡れば、君の御名隠れなく上ノ国に到つて鈴木・亀井にも對面し合戦の様を尋ぬるに、志夫砂理の強敵攻め抜き難く君自らこの地へ來り給う由、かの老人が申せしごとく、果して今三月君に逢い奉れり。今度の合戦においては某敵の奇術を止めさせ申すべし」と忠衡を始め依田・武蔵坊・佐藤・鷲尾・駿河・秋田等にも對面し、過ぎにし事どもを語り合いともに軍議をぞしたりける。また備前平四郎成房は於与辺という所に賊ありて兵糧運漕を海賊せしかば、これを攻めんとかの地に赴きついに於与辺の賊を平定し上ノ国に帰りけるが、志夫砂理の強敵攻め難く合戦難儀なる由を聞きこれも加勢の為にぞ來



りける。

備前・駿河、羌奴定を討ち取る。

義経は常陸坊海存と種々物語し海存が学ぶ所の書を論じ給うに、「いずれも奇異の術なり。海存はほぼこれに熟すといえども、いまだ通理するに及ばねども、敵のおこなう幻術を挫く術を得たりければ、この度の合戦には羌奴定を生け捕るべし」と備前平四郎成房に駿河次郎清重を伏兵となし、おのおの三百人ずつの雑兵を引率し、二三日前より志夫砂理より五十里南なる山際に忍ばせ置き、また秋田次郎尚勝に堀尾新八忠辰・松前の安呂由・上ノ国の馬全印おのおの新手の勢を二千人、末角壺志の本道より攻めさせ、敵を思う図に誘き出さんと謀る。その外、義経・忠衡・弘綱、三方より隊伍を乱さず五色の旗を立て百人ずつを一組と定め、この度は常陸坊海存軍師となつて義経の本陣に控えたり。かくて志夫砂理には頃日の合戦に羌奴定が働きにて、またまた、軍に勝ちければ、近日敵の陣を夜討にせんと謀る所に「敵にまた新手加わりやがて押寄する」と告げければ「また、例のごとく半途にて合戦をなさん」と三手に分かつて向かわしむ。一手は羌奴定を大将とし阿羌夷・久満留これに従つて、雑兵二千余人、一手は宇麻留を大将とし仮甫乱・乱計留を従えて雑兵二千余人、また一手は仁志麻留大将にて一千余人の雑兵を引率し、三方の勢都合五千人、志夫

砂理城中数を尽くして三手に別れて攻め近ずき、まず末角伊志の本道へ向かいたる。羌奴定が先陣久麻留、秋田次郎が新手の勢に駆け合わせ火花を散らして戦いける。秋田が兵は新手にて、その上馬武者十騎余りもありければ四方八方に敵を駆け散らさんです。後陣より羌奴定これを見て急に押し寄せれば、常陸坊遙かに後陣に控えしが羌奴定が兵の頻りに進むを見て旗を振つて下知すれば、義経の旗本右の方より武蔵坊弁慶、馬上に大薙刀を打ち振つて百余人の雑兵を後方に従え急に討つて出る。また左の方より増尾三郎兼邑、緋威しの鎧に同じ糸の冑を着し馬上に太刀抜き翳しこれも百人の兵を従え一散にこそ向かいけれ。合戦やがて最中と見えける時、蝦夷の大将羌奴定例の如く胡砂吹の術をなし雲霧を起こさんとすといえども、常陸坊海存本陣にありて呪文を唱えまた諸將に呪文を教えければ、人々これを唱ゆるによりかの術をなす事あたわず、味方の雑兵方角を失わず。中にも武蔵坊弁慶は久麻留が一際勝れて見えければこれぞ大将ならんと久麻留目掛けて何国までもと追つ掛け、馬に鞭を当てければ、さしもの久麻留、弁慶が勢いに恐れをなし足を限りに逃げ走る。弁慶は黒革威の甲冑を着し七つ道具の指物を差し、大薙刀を打ち振つて久麻留に討つて掛かる。久麻留は蝦夷第一の剛勇、身長九尺五寸面は夜叉の如く髪鬚一つになつて逆上り、身は海獺の皮の鎧を着し太刀拔

き翳し弁慶に渡り合い暫し挑み戦いしが、歩行立ちの事なれば弁慶が馬上の働きになじかはもって勝るべき。ついに敵わず討たれにけり。増尾三郎兼邑は大将羌奴定を目掛けて切つて掛かる。羌奴定も余りに手繁く馬武者に追いつてられかの芝隠れをなし身を隠さんとすれども、常陸坊が教えし呪文を唱ゆれば忽ち形顯れたり。これによつて奇術もおこなわれず、四十里ばかりぞ逃れたりける。されども増尾三郎は血氣の若武者なれば、何国までもと追つ掛けたり。羌奴定ついに志夫砂理に入る事あたわず南の方を山を望んで逃げ行くところに、思いもよらず山の際より右の方に駿河次郎、左の方には備前平四郎一度に起つて羌奴定を中に取り込め難なく首をぞ取りにける。則ちこの首を太刀の先に貫き本陣指して帰りけるに、この首の目の玉折節は見開きくるくくと回りけるとなり。さしにも手強き蝦夷兵なれども、海存が教えし呪文にて幻術おこなう事あたわず。故にこの手の二千人の勢、半ば討取ら中にも大将羌奴定・久麻留を討ち取りければ、味方の諸将悦ぶ事限りなし。志夫舎理の大将阿羌夷は敗軍を一つにして本城にこそ引き取りける。

#### 乱計留、萬平須を討つ。

中軍に討つて出つたる大将宇麻留・乱計留・飯甫乱が勢、二千余人、秋田が勢に目も掛けず、直ちに泉三郎忠衡が勢に討つて掛か

る。忠衡、今度は熊井太郎が羌奴貴を射落とせし例に習つて馬上に弓矢を携え、敵の將たる者を撰み討ちに射つて落とす。中にも乱計留は志麻母伊の萬平須を目掛けて切つて掛かる。萬平須も暫し支えて戦いしが、剛勇の乱計留なればスツウチ棒をもつて萬平須を横様に突きければ、萬平須、太刀取り直し払わんとすれど痛手にて働き得ず。雑兵共立ち掛かり、ついに押さえて討たれにけり。軍、散じて後、久魔伊志の喜留志、萬平須が討たれたる事を聞き、大きに嘆き「われ久魔伊志を出でしより、萬平須と死を共にせんと思ひしに、今日萬平須討死したり。われ誓いて明日の合戦に討死せん」とぞ申しける。この喜留志がためには、萬平須は婿なりける。これによつて死骸を求め志麻母伊へ程遠ければ、妻子に知らする事もなり難しとて、側に死骸を埋み、しるしに、柳の枝を挿したりける。今蝦夷に人死する時は土中に埋葬し印に柳を植ゆる事を例とするとなり。また志麻留が兵一千余人秋田尚勝が勢に駈け合せここを先と戦いしが、堀尾新八忠辰が放つ矢に当たり乱軍の中に討たれにける。三方の合戦同時にて、蝦夷方大いに打ち負けければ、首領丹露印、志夫砂理より遙かにこれを見て急に救わんとすれども、日も夕暮れになりて互に相引になりてその日の軍は止みにける。

海存、丹呂印を捕らんと謀る。

その夜、志夫砂理には首領丹呂印、大きに怒り、今日の合戦に羌奴定を始め、仁志麻留・久麻留等の宗徒の大将、強勇の者共、数多討たなければ、元来堪えぬ蝦夷の気性なれば、「その夜直ちに軍兵を催し、敵の陣に押し寄せ判官を討ち取らん」という。飯甫乱が曰く、「今日の合戦の体を見るに、尋常の合戦にあらず。敵に神人あつて味方の幻術おこなわれず。この体にては今夜急に攻めたりとも判官を討ち取る事難し。一兩日を待ち攻め討たん。随分用心堅固にして備を乱す事なかれ」という。これによつて丹呂印を始め乱計留・阿羌夷等この議に同じて、その夜の軍は止みにける。その頃蝦夷の雑兵衆人に至るまで「今日の一戦、馬武者に大いに駆け立てられ、頼みとする胡砂吹はおこなわれず。日本のいかなる者にや」といへば、「判官々々」といいし程に、この後判官といへば鬼神の如くに恐れけるとなり。義経は今日の合戦に勝ち勝ち給ひ、營にありて諸將を集めて商議あり「今日の合戦、まったく海存が力なり」とて海存を軍師と尊み給う。今日の大戦に敵の首を討ち取ること一千余級、中にも勇強の夷女羌奴定及び久麻留・仁志麻留等の強將を討ち取りければ、悦び給う事限なし。常陸坊が曰く。「敵、今日の合戦に手懲して馬武者に駆け立てられては、さしにも猛き蝦夷人なれども足立たぬと見えたり。臆病神の醒めぬ先に、明日志夫砂理に押し寄せ、首領丹呂印を捕らえじ」とそ

の夜諸將を触をなし、明日未明、志夫砂理を惣攻と定めらる。秋田次郎尚勝は「明日の合戦にも、いづれの手へなりとも属し先陣仕らん」といいければ、海存が曰く。「某、存ずる旨あれば某が指揮に従わるべし。今日の合戦に五十里南なる山際にて羌奴定を討ち取つたり。明日の合戦は極めて丹呂印討つて出ずるべし。討つて出ずるものならば味方の諸將馬上の銘々急に追つ詰むべし。かの志夫砂理に入る事能わずんば、果して明日も南の山の手へ走るべし。然らば足下五百余人を従え南の山際に伏せて時刻を相待たるべし。極めて足下が仇を明日討つべし」という。義経の曰く。「この理、尤なりといへども、敵今日の合戦に羌奴定山際に討たれたれば、明日の合戦何程手繁く追い詰むるとも、この路へは走るまじ」と宣へば、常陸坊が曰く。「もつとも御掟にて候えども、敵も敵により候。元来無智の夷なれば、深き慮を用いば、謀却つて相違せん。今日の方便にて幾度にも戦うべし」と評議一決しておのおの用意ぞなしにける。

## 卷之十

義経、志夫砂理を陥す。

明くれば三月二十日、例のごとく、まだ東雲の頃、三方の寄手一

隊々旗を簞してぞ進みける。ここに一方の大將依田源八兵衛弘綱は同手に属したる駿河次郎清重・加金須・孫魔志・雨綿波・久利満等を召して、「昨日の合戦、味方勇猛を振るい敵の名ある大將を討取る事数多なりといえども、某が手にはさせる手柄もせざる事おおきに恥辱なり。今日に到つては、是非首領丹呂印をこの手に討ち取るべし」と雑兵に至るまで、酒肴を与えいい合わせ、勇み進んで真つ先駆けてぞ急ぎける。さる程に志夫砂理には、丹呂印、諸將を集めて評議し敵の寄する由を聞いてまた、半途まで出で逢わんと三手に分かつて向かいける。中にも大將乱計留おおいに下知して曰く。「判官なればとて何程の事のあるべきぞ。続けや、者ども」というままに真先かけて討つて出ずれば、生死知らずの若者どもわれ先にと討つて出ずる。まず一番に依田弘綱が勢と駆け合わし、暫し支えて戦いしが、大將弘綱下知をなし「あまり進み過ぎたり。ここを四五町引き退け」と旗を回しければ、諸卒みなく後へ引き退く。敵はこれを見て恐れて逃ぐると見るままに、関を作つて討つて掛かる。依田弘綱「足場はよきぞ。取つて返せ」というままに、加金須・孫魔志・雨綿波・久利満等踏み留まつて叫んで掛かる。敵の大將飯甫乱は、身には怪しげなる甲冑を着し、シヨキネ棒を振り立てて、当たるを幸に無二無三に突いて掛かる。味方の雑兵これに中たり、討たるる者も多かりける。大將弘綱こ

れを見て、馬上に敵を見下ろしければ、弓十分に引き詰めて飯甫乱が胸板を目掛けて切つて放つ。過たず胸板を射通しければ、忽ち倒れて死にたりける。阿羌夷はこれをも知らず、スウチ棒を打ち振つて、士卒を下知して、衝き回りけるが、飯墨太の久利満に渡り合い、暫し戦いしが、何思いいけん志夫砂理指して引き退く。二陣に控えし駿河次郎、馬乗り出だし雑兵を先に立て、真一文字に討つて掛かる。これを見て蝦夷の乱計留、駿河が勢に駆け合せ、火花を散らして戦うたり。駿河次郎は熊井太郎が羌奴貴を射落せし例に習い、馬上より撰み討に射たりしかば、この矢先に懸る者数を知らず。追いつ返しつ十合ばかりも戦いしが、ついに駿河次郎が発つ矢に乱計留も討たれにけり。その外名ある勇將は依田・駿河が矢先に掛かり討死する者多かりけれ。先陣おおきに勝ちければ、日本勢なおも進んで攻め入らんとす。泉三郎忠衡、先陣の軍を見て「続けや続け」というままに、馬乗りばな逸足出だして駆け出ずれば、この手に属せし海満林「これぞ大事の合戦なり」と弓矢携え討つて出で、敵を狙うて射掛くるに徒矢は一つもなかりける。義経の本陣よりも、かねて依田・駿河と契約せしかば、増尾三郎兼邑・武蔵坊弁慶おのおの馬を乗り出だし、われ先にとぞ攻め近づきける。志夫砂理には首領丹呂印・乱計留・飯甫乱が敵に討たれしを見て、なじかはもつて堪うべき。一散に駆け

出でて、当たるを幸に難立てる。駿河次郎清重・依田源八兵衛弘綱・増尾三郎兼邑・武蔵坊弁慶、四人はかねて謀りし事なれば、一所に集まり、丹呂印が一際優れし大男、蝦夷錦の袍を着し、海獺の皮の甲冑に矢を負い、弓を携えしが、その面は夜叉のごとく、眼の光は日月のごとく、その声、牛の吼ゆるのごとく、勢這うて来る所へ、四人の大将、余りの葉武者には目も掛けず、ともに馬を並べて丹呂印に討って掛かる。中にも弁慶は鉄の棒をもつて、近寄る敵を討ち殺し、大将目掛けて飛んで掛かる。丹呂印も弓投げ捨て太刀を抜き、ここを先と戦いしが、四人の馬武者、われを目掛けて矢を射掛け、あるいは四方より打って掛かるに、防ぎ兼ね暫し躊躇い、奇術をなせども呪文を唱ゆれば、かつて人の目を幻さず。詮方なく四角八方死に物狂のごとくに駆け回り、なおも敵わじと思いいけん、一散に逃げ走る。依田・駿河これを見てあれ、逃すなと大声あげ、一鞭打って追っ掛ければ、常陸坊が図りしに違わず本城へは逃入らず。南の方なる山の手へ向けてぞ走りける。弁慶も兼邑も何国までもと追掛けれども、足速き丹呂印、弁慶も兼邑も何国までもと追い掛けれども、足速き丹呂印なれば難なく見失い、「志夫砂理へ引きつらん」と本陣指して攻め近付きなおも進んで攻めたりける。丹呂印この南の方なる山際へ逃げたるは、志夫砂理の本城より久利麻の山路へ抜穴あつて叶わざる時

は、この抜け路より通路をせんと工みけるが、熊井が生け捕られしあとは、味方の諸將久利麻の山際に落し穴多くある事を知りければ、久利麻の山路へ堅く入る事を戒めける故、人一人も到らざりしとなり。また常陸坊は志夫砂理より久利麻へ抜け道ある事を知りたる故、昨日の合戦も今日の軍にもこの通路を伏せ勢を設け置きしとなり。

秋田尚勝、丹呂印を討つ。

蝦夷の惣大将丹呂印は南方の山を指して逃げ入りけるが、運の極まる所やらん。思いもよらぬ山間より秋田が勢五百余人、中に包んで取り巻きたり。丹呂印も今は叶わじと思ひければ、死物狂いに働きしが、秋田が郎徒堀尾忠辰と暫し渡り合いけるに、馬も弱りければ堀尾歩行立になり、引つ組んで挑み合いけるが、堀尾なじかはもつて丹呂印に及ぶべき。ついに、組み敷かれ、すでに危うく見えける所に、秋田尚勝この体を見て一散に駆け来たり、「年来の父が敵、覚えたか」というまに、丹呂印に切り付けければ、下より堀尾が跳ね返えしその外、雑兵立ち重なり難なく押えて首をぞ取りにける。そもそも、この丹呂印は身の丈、九尺五寸にして、色青黒く、眼大にして日月のごとく、蝦夷の衆人に異なりし人物にて、ことに暴悪にして人民怨を含みけるが、今度秋田に討れにけり秋田次郎は大いに悦びこの首を太刀の先に付けて「敵の

大将、丹呂印は年来の敵なる故に、秋田次郎が討ち取つたり」と大音上げて呼ばわりく、志夫砂理の本城指してぞ攻めたりける。志夫舎理には大将阿弋夷これを見て、今は叶わじと思ひけん。柵を捨て、われ先にと乗り込みく攻め入つてまず一番に加金須・久利満等本城に入りて、男女の分かちなく当たるを幸に打ち殺ろし、その侵す事法に過ぎたり。されども合戦をも致すべき者は、あるいは討たれあるいは逃げ散つて、残り留まる者とは、老人幼児婦女のみなりければ、恐れ慄きわれ先にと逃げ惑う。大将義経、遙かの後陣よりこれを見給ひ「ただ今、志夫砂理を陥したり。降参の者を殺すべからず」と下知し給えば、鷲尾三郎義久・備前平四郎成房馬を速めて「静まれ、静まれ」と制するにぞ、すこしは鳴りも静まりける。これによつて、ところぐくに火を掛けしかば、折節風激しく吹いて、蝦夷人の立並べたる陣営一面燃え上がり、なおも民屋に掛かり、志夫舎理の山野一時に灰燼となりけるは、凄しかりける有様かな。火も漸くに鎮まれば、義経を始め諸大将われもく、と志夫砂理にこそ入り給う。

義経、上之国に凱陣す。

かくて、義経は志夫砂理に入り給ひ、丹呂印が城郭の跡を見給うに、石を畳んで穴を掘り、いづれも穴居に異ならず。その巖石を建てたる精巧、人力のよく及ぶ所にあらずとおおきに感じ給ひけ

る。さて、泉三郎忠衡・常陸坊海存・依田源八兵衛弘綱・武蔵坊弁慶われもわれもと入り来る。また海満林はいつの間に到りけん。久利麻の山際の抜穴よりおおくの敵兵を生け捕り、すなわち城中へ出でにける。これにより抜路を吟味せられければ、久利麻への通路、二十四路ぞありにける。義経また民に米穀を与え日本の美酒を施し、徳をもつて撫育し給ひ、なおも「残留まる兵共あれば、降参を請くべし」と所どころに触れられければ、志夫砂理の近隣、義経の徳を慕ひ、我もわれもと産物を献じ、志夫砂理にこそ集まりける。欧大意の加理元も義経志夫砂理を攻落とす、さしにも猛き丹呂印、幻術をなす事も能わず、ついに判官に討たれたる由を伝え聞き「わが為には判官は仇ならず」とやがて献物を捧げて人質を出だし、降参を乞ひにける。これによつて、志夫砂理より南西、中・端の蝦夷は判官の名を呼んで、恐れぬという者なく、暫しはこの地も静かにして今は内地に異ならず。義経も暫くこの地に滞留あつて、石を壘みし城郭に竹木を伐つて柵を拵え、城郭の修理をなし給う。しかるにこの度義経に松前蝦夷の雑兵共、ここに充満して民の婦女を犯す事法に過ぎたり。日本の諸大将おおいにこれを制するとも、かつて止まず。制し兼ねてありければ、義経法律を定め給ひ、「もしわが妻と定めざる女を犯す者あらば、その髪鬘を一筋も残さず抜き取るべし」と定め給う。この法律厳し

くもし背く者あれば刑に行われける。げにやこの法律末世に伝わりけるにや。今に妻と定めざる女を犯す者なし。もし過つて犯す、則ち忽髪を抜くとなり。これ蝦夷の風俗なりとかや。この地に義経はここに三十日余りも在居し給いしが、今は志夫砂理も帰伏し、義経の徳を慕い諸部落より日々献上夥し。これによって諸將を集め評議し給い、奥蝦夷、未曾久を窺わんと種々計策を回らし給うといえども、これより奥蝦夷の際にはイシカリとて大河ありて頃は四月ことに河水おおきに漲り渡るべき様もなかりければ、ひとまず上ノ国に帰りこの程の諸軍勢の労れを休めんとて、武蔵坊弁慶に上ノ国の馬全印を添えて人数千人を残し、この地の守護と定め給う。これによつてついに弁慶はこの地において年を経て病死いたしけるとなり。この所以にや、今も志麻古麻喜の西に弁慶崎という地名残りしとなん。さて義経は常陸坊海存・秋田次郎尚勝・鷺尾三郎義久・片岡八郎弘常・駿河清重・備前成房・佐藤兄弟・増尾兼邑・依田弘綱・海満林・加金須・久利満・孫魔志・雨綿破・松前の安呂由を召し連れ給い、めでたく凱陣し給う。泉三郎忠衡は先陣を承り、一日路、先に進んで打ち立ちその路を払うに、義経の到り給う処ごとにその首領われもくと道路に出でて凱陣をぞ祝しける。義経はその処どころの制度、それぐに下知し給い、程なく五月に上ノ国へ帰城し給いければ、上ノ国の繁栄げに蝦夷

の都に異ならず。

海存・尚勝、日本に帰る。

すでに義経、上ノ国に凱陣し給いければ、亀井・鈴木を始めとし伊勢三郎も仮墨太より来り、志夫砂理の勝軍を祝しける。常陸坊海存は義経に向かつて「某儀はこれより御暇を賜わるべし。いまだ学業熟し申さず候えば、駒形嶽に帰りかの異人が教えしごとく、仙道に入りてふたたび神通を得ばいよく君を守り奉るべし」と諸大將にも懇に暇乞をぞなしにける。義経も「この度汝が来る功にあらずんば、志夫舎理の大敵を討ち取る事難からん」といほど名残を惜しみ給えども、もとより留まる気色なければ、御暇を給わり「またまた渡り来るべし。われもこの島を從えなば、回り逢うべき折こそあらめ」と日本渡海の舟などを下知し給いければ、秋田次郎尚勝進み出で「某も君に従い奉り、君の武徳をもつて年来の仇敵丹呂印を討ちし事、日来の本望何事がこれにしかん。しかる上はひとまず本国に立ち帰り、妻子にも逢い重ねて、再びこの地に渡り、なおも兵糧運漕は某沙汰し申すべし」と義経に懇に暇乞し、常陸坊海存並びに松前の安呂由と共に同船し、上ノ国の海浜より本国へとぞ出帆致しける。かかりし後は松前より上ノ国までの通路自由にして蝦夷の人民太平をぞ謡いける。

島丸誕生。義経月を賞す。

ここに義経の御台所は過ぎにし頃より懷妊ましまして、程なく八月臨月に相当たり安々御平産ましまして若君御誕生ありける。諸大将を始めとし蝦夷の人民に至るまで悦ぶ事限りなく、日々に誕辰の嘉儀を祝し種々の産物を捧げ奉る事夥し。すなわち御名をば島丸君とぞ申しける。式日あるいは祝儀等の日は蝦夷の風俗にて老若男女、手を引き合いて御礼にぞ上りける。頃は八月十五夜にて、一天曇りなく空晴れて一入月の明かりければ、義経宴を催し給い、諸將を召されける。その人々には泉三郎忠衡・依田源八兵衛弘綱・亀井六郎重清・鈴木三郎重家・備前平四郎成房・片岡八郎弘常・駿河次郎清重・増尾三郎兼邑・佐藤兄弟・海満林・砂牟印等なり。その外蝦夷の者共、日本の風俗を学び、酒宴をなし、謡い躍りける。なかにも砂牟印は上ノ国の豪家にて蝦夷にて風流の者なりけるが、四弦のいわゆる胡琴というべき物を取り出たし、これを弾じ声張り上げて歌謡す。その声は牛の鳴くがごとく、その詞を通事をもつて悉く尋ね給うに、占候海潮の詞なり。義経も興に入り給い、月曇りなかりければ、笛を吹き日本の雅楽を奏し給う。蝦夷人はついに聞き馴れざる事なれとも笛の音を感じけるにや、いとど興をぞ催しける。増尾三郎兼邑は都に育ちて風流を学びければ、今様朗詠し一曲を奏でて。謡い舞いけるとなり。蝦夷はまた名鷹の多き所にて種々の鷹を献じければ、鷹野の

催はば日限を定め給う。さてまたこの地に産する草木は日本より大なる物多かりける。款冬の葉等も優れて大きく、差し渡三四尺もあり、虎杖は一丈ばかり伸び、唐竹のごとく茂りける。この地に五穀を植ゆる事を教え種を下ろし植えしむるに、もとより寒国なる故にや稔らず。土地五穀を植ゆるに宜しからず。粟・稗など少しずつ作り習いけるとなり。

#### 秋田尚勝、再び蝦夷に渡る。

秋田次郎尚勝は常陸坊海存と俱に過ぎにし六月の末に松前を出帆し、海上難なく日本の地の着きければ、常陸坊と別々になり商人の姿に身を窵し本国秋田に帰りしが、頃は日本建久二年鎌倉の武威盛んにして、過ぎにし文治五年八月奥州には頼朝自ら軍兵を率いて御館を攻め給い厚加志山に合戦あり、ついに御館泰衡は家人河田次郎がために討たれ給い、今は奥州も鎌倉殿の有となりし事を聞き涙を流しける。されども本国秋田は静かにして渡海も自由なりければ、密かに兵粮のため米穀を積んで蝦夷に送り、また蝦夷の産物、昆布・螺蛤・鰓肭臍・熊胆などを本国へ積み登せ、交易日頃に十倍しける。かくて本国に一年余りも居りけるが、何卒蝦夷に再び渡り、義経とともにかの地を従えんとまた渡海の用意をぞなしにける。尚勝が妻は奥州の者なるが、秋田が一子の今年十二歳になりけるを伴い、日本の建久三年壬子六月本国秋田よ



り出船し日を経て程なく松前の地にぞ着きにける。今は中蝦夷より端蝦夷、松前までの通路自由にして、その繁栄古に百倍せり。この後國中暫く静謐に及び、義経の武威を恐れかく徳を慕いける。しかるに奥蝦夷、未曾久に蒙古と合戦度々に及びしか、程なく義

経諸軍勢を催し前後八年の間に、未曾久の乱を静め蝦夷を一統し太平の政をぞ行われける。この始末、後編に載せられたれば、暫くここに筆を指し置くのみ。

年表

本書の主な記載事項を表示した。また、それに関係ある事項も参考までに下欄に記載した。それは必ずしも史的正確さは求めてはいない。本稿の意図が、本書刊行時の通念のどの部分が共通し、どの部分を否定、又は発展させたかと云う事を見るためである。

年 月 日

延暦一三 八〇一九 二七

桓武天皇に征夷大将軍坂上田村麻呂、蝦夷討伏

康平五 一〇六二

清原武則 源義家の弓勢を試す

前九年の役終わる

康治二 一一四二

藤原基成陸奥守として下向

仁平三 一一五三

この頃秋田次郎の父 松前交易 丹呂印に害さる

平忠盛没

平治一 一一五九

義経誕生

平治の乱

仁安二 一一六七

平清盛 太政大臣に

嘉応二 一一七〇 五

藤原秀衡 鎮守府將軍 無量光院造宮

承安四 一一七四 三

義経鞍馬を脱走

平清盛 福原に経島を築く

伊勢三郎臣下になる

安元一 一一七五

義経奥州に入る

治承四 一一八〇 一〇二

義経 黄瀬川に頼朝に会う

元暦一 一一八四 一 二〇

二 七

八

文治一 一一八五 一

二 一九

三 二四

五

一一

二 一一八六 秋

初冬

三 一一八七 二

一〇 二九

四 一一八八 三

四

一一

五 一一八九 二 二五

閏 四 三〇

五中

五 二二

奥州の使い鎌倉着

範頼・義経 木曾義仲を宇治川に破る

同 平家を生田・一谷に破る

義経 検非違使の判官になる

摂津大物ノ浦出船

屋島の戦

壇の浦の戦

腰越状堀河攻め

頼朝 守護地頭の制を設く

義経 平泉へ

秋田尚勝端蝦夷に鷹を求めた

梅原達治

義経 秀衡の許へ

秀衡没 その前に 泰衡 家督相続

追捕令

奥州下着

宣旨下向

雑色里長平泉に

藤原一族協議 鎌倉の意向に添う事にする

高館を攻撃 義経 自殺

義経 深浦着

奥州の使い鎌倉着

五下	義経ら 秋田尚勝に逢う
五下	義経ら深浦出発
六一	義経 深浦出船
六七	
六一三	
二六	
六下	深浦発 白紙鼻に
六下	亀井・鈴木ら白紙鼻に到着
六二六	泉の館を攻める
	泉忠衡 自害の体で深浦へ
六二九	忠衡ら 深浦出船
七下	江刺に到着
八一〇	
八一五	月見の宴
八一六	海満呂 義経に帰伏
八二二	
八二五	基成父子 降伏
九三	
一〇二四	頼朝 鎌倉に凱旋
一一	伊勢ら志魔母伊互市を望む

鎌倉の飛脚 奥州に到着  
 泰衡の使者 首越越に参着  
 義経の首実検

鎌倉 阿津賀志山を抜く

頼朝軍 平泉に到着

泰衡 賛柵で郎従河田次郎に殺された

二一〇	使者 志麻母伊着
一一〇	忠衡らネブクに着船
一二五	忠衡ら白紙鼻に到着
一二二	沙牟印を襲う
六一九〇	元三の式
一	上ノ国へ
一二五	羯悪志 白紙鼻を攻撃
一二	伊勢三郎ら白紙鼻へ帰還
三 一〇	志夫沙里攻撃の商議
五 五	泉 依田ら飯墨太を攻撃に
	熊井 秋田 弁慶ら志夫砂理を攻撃に
	泉 黒井ら勢奈瓦に敗る
二五	依田 久奴井陣営に火を放つ
	飯墨太を攻撃
六中	泉の使者 上ノ国に
	頼然 伊和奈意に戦死
二七	未角耆志攻撃
七末	合戦
九 二五	出陣

鎌倉方 大河兼遠を衣川に破る

	一〇中	宇計伊志到着
	一二下	志附沙里攻撃
	一一初	蝦夷の士卒に教練 明二月迄
二 一一九二	一一一	志夫沙里で年越
	一五	
二八		志夫沙里を攻撃
三二九		続攻
八		男 島丸生
八一五		宴
六		秋田 常陸坊帰国
三六		秋田松前に戻る
弘安四 一二八一		
嘉吉三 一四四三		
明和五 一七六八 九		

源頼朝 公文所を政所と改称

弘安の役

武田  
松前に

安東盛季 津輕から渡道

『通俗義經蝦夷軍談』 平安 桃林主人識